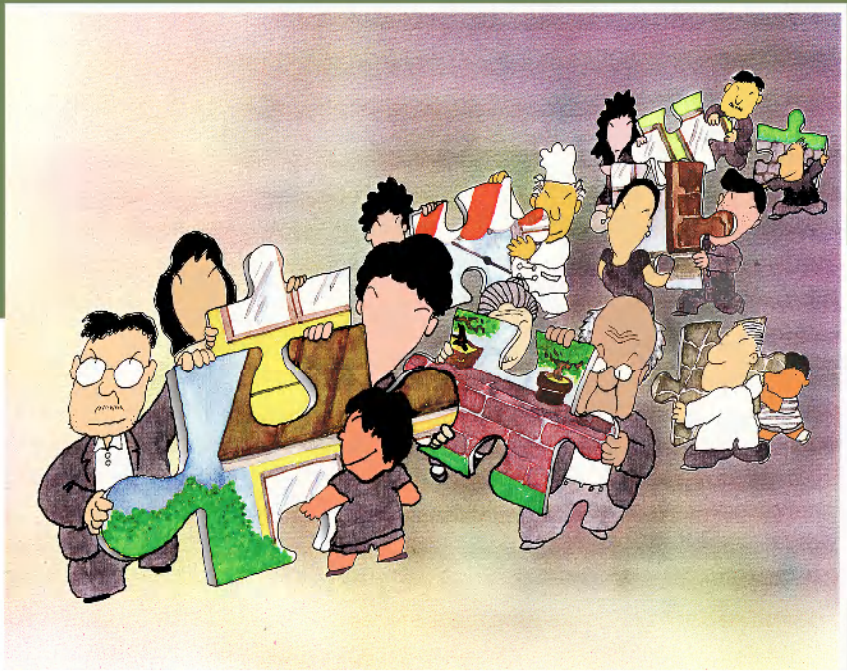
連載専門誌

# 対人援助学マガジン



Vol. 2 No. 1
June 2011
第五号

対人援助学会

| | | |
|---|---|---|
| 目次 | | 002 |
| 執筆者＠短信 | 執筆者全員 | 003-008 |
| 知的障害者の労働現場　005 | 千葉　晃央 | 009-013 |
| 社会臨床の視界　（5） | 中村　正 | 014-026 |
| ケアマネの出会った家族たち　（5） | 木村　晃子 | 027-032 |
| 街場の就活論　vol.5　-新卒採用に今、何が起こっているのか- | 団　遊 | 033-035 |
| 心理療法が始まるまで（5） | 藤　信子 | 036-038 |
| 誌上ひとりワークショップ（前編）　-家族援助は街のアパレル- | 岡田　隆介 | 039-043 |
| 映画の中の子どもたち　5「八日目の蝉」 | 川崎　二三彦 | 044-045 |
| 子どもと家族と学校と　⑤ | 中島　弘美 | 046-049 |
| 蟷螂の斧　-社会システム変化への介入-　part1-　第5回 | 団　士郎 | 050-056 |
| 学校臨床の新展開　⑤　「ののさん」のこと | 浦田　雅夫 | 057-060 |
| ポストモダンな学びのスケッチ-（5）　繋がりの中で見えてくるもの | 北村　真也 | 061-070 |
| 幼稚園の現場から　V | 鶴谷　主一 | 071-075 |
| 福祉系対人援助職養成の現場から　⑤ | 西川　友理 | 076-080 |
| 我流子育て支援論　（5） | 河岸　由里子 | 081-086 |
| 不妊治療現場の過去・現在・未来　5 | 荒木　晃子 | 087-093 |
| 対人援助学＆心理学の縦横無尽　（2） | サトウ　タツヤ | 094-096 |
| 家族造形法の深度　（5） | 早樫　一男 | 097-104 |
| 旅は道連れ、世は情け　⑤　お金と責任 | 村本　邦子 | 105-108 |
| きもちは言葉をさがしている「紅茶の時間」とその周辺　第4話 | 水野　スウ | 109-115 |
| やくしまに暮らして　第四章 | 大野　睦 | 116-124 |
| お寺の社会性（参）　―生臭坊主のつぶやき― | 竹中　尚文 | 125-129 |
| こころ日記　ぽちぽち（2） | 脇野　千恵 | 130-133 |
| これからの男性援助を考える　第三回 | 松本　健輔 | 134-137 |
| **新連載　ノーサイド　第一回** | 中村　周平 | 138-142 |
| またまた長い編集後記 | 編集長＆編集員 | 143-145 |


目次

# 執筆者@短信

（到着順）

## ◆ 河岸由里子◆（臨床心理士）

かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

ゴールデンウィークに日本 TFT 協会の関係で、１週間被災地に行っていた。宮城県南部の山元町で病院のスタッフ中心の支援を予定していたが、病院だけではなく、一般の避難所にも出向いて、多くの方の支援に携わる結果となった。TFT は身体的な問題にも対処できることから、頭痛、肩こり、腰痛等から入り、その後カウンセリングが出来た。津波被害は境界がはっきりしていて、地震被害だけと違って、被害の差が大きい。そうした格差に加えて、避難している間に、かろうじて残った２階部分に泥棒が入り、放火までしていったと泣いている被災者に出会った。地震被害、津波被害、更に、盗難と放火。こんな理不尽なことがあってよいのかと憤りを感じる話だ。他にも、塩害の問題で３年は使えない畑、イチゴの産地として栄えていた地域でもあるが、壊滅状態になり、しかもゼロメートル地帯になって、家も建てられない状況。ホッキ漁に使っていた船は全て流された。踏んだり蹴ったりの中での復興は、道のりも遠い。避難所の人々も少しずつ仮設に移っているが、心理的問題はこれから顕在化してくるだろう。最後に福島に寄ったが、ここはもっと悲惨だ。目に見えない放射能の被害が更に加わり、長期にわたる避難を余儀なくされる人々。仮設すら地元に建てられない。住み慣れた地域から、遠く離れて生活することは、年配者にはとても辛いことだろう。「生きているうちに帰れるか」そんな気持ちを思うと、本当に今回の被害は厳しい。７月にまた行く予定だが、２ヶ月の間にどのくらいの変化があるか、そして、その時に自分が一体何を出来るか、たいした役には立たないだろうが、出来ることをやって来たいと思う。

## ◆木村晃子◆

**もう一つの連載　～横顔～**

鈴子さんの家に訪問へ行くと門のところで女性とすれ違った。来客があったのではないかと尋ねたところ、「娘だよ」と言う。「珍しいですね。」と声をかけると、鈴子さんは「あのね」と話し始めた。

私がまだ１２歳の頃、母は４０歳。ある日、母は荷物をまとめて家を出て行ったの。それから、時々母の所に行くことがあったけれど、時には玄関から入れてくれないこともあった。不倫相手がいたみたい。父と母の別居生活は１年半続いて結局母は戻ってきた。それからも、父と母はケンカが絶えなかったけれど夫婦を添い遂げたのよ。私は、そんな親をみていたから、夫婦円満が一番だと思っていた。でも、結婚した相手は浮気、ギャンブル、定職につかない。私は必死で子供を育てたけれど、４０歳になった頃、疲れちゃって家を出て夫と離婚したの。その後間もなく夫は病死してしまってね。子供たちは、母さんが父さんを殺したって言っていたの。しばらく子供たちとは行き来がなくなった。私は５０歳を過ぎて、仕事関係で出会った人と再婚したの。よき理解者でね。本当に幸せだと思える日が続いたけれど、１０年が過ぎたある日、交通事故で突然この世を去ってしまった。さみしかった。あんなに悲しいことはなかった。

あの子ね、今年４０歳。子供も二人いるのよ。最近よくここへ来るようになった。きっと、何か悩んでいるのでしょうね。あの時の私のように。そう言って、鈴子さんは遠い過去の自分を見ているような表情をした。

**＊北海道　当別町　普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。**

## ◆村本邦子◆

前号を書いた頃は、毎朝のように10キロ走り、焼きたてパンを食べ、ご機嫌な毎日でしたが、3月の過酷なオーバーワーク＋αで、すっかり体調を崩してしまいました。どこがどうというほどのものではないのですが、珍しく、どうにも冴えない日々を送っています。この頃では、多少お腹がすいても、多少眠くても、無理がきき、普通に生活できるようになったので、「いろんなことが我慢できるようになって、私もようやく大人になったのかなぁ」と自分に感心していたのですが、鍼の先生から、「それは生物として逆行しているからよくないよ」と言われてしまいました。そうなのか!? ホームベーカリーはご機嫌に続けていますが、ジョギングする元気が出てきません（まっ、10キロ平気で走るという方が変だったという説も･･･）。

今回は、自分が創り上げてきた小さな組織のあり方を振り返りつつ、現在、身を置いている大きな組織との関わり方を考えていました。自分を元気にする身の立て方を見つけたいものだと思っています。その一方で、子どもたちの活躍（一番最近では、ラッパーの息子がハワイのラジオ放送に1時間ゲスト出演し）や研究所スタッフと教え子たちの成長ぶりに元気づけられています。生物学的に言えば、少しずつ弱っていって譲っていくというのがいいのかもしれません。大人らしく省エネモードで長続きするように。

## ◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職。1956 年 5 月 19 日、専光寺で長男として生まれた。生まれたときから、誰しもが「寺の跡取り」として私を見ていた。それに対する反発もあった。また、子供の頃に近所で誰かが亡くなると、学校の帰り道に悪ガキが「竹中！葬式やな」と言って、ニヤっと笑う。それが嫌だった。人の悲しみで飯を食っていることが嫌だった。自分は絶対に坊主以外の職業に就くつもりだった。高校生の時に仏教に興味をもった。それでも葬式坊主にはなるまいと思っていた。それが、今、生臭坊主、葬式坊主、くそ坊主である。

## ◆ 北村 真也◆私塾「アウラ学びの森」代表。（http://tiseikan.com）

学位論文の提出から修士課程の修了までの期間、すなわち年度終わりが私塾の主宰者としては一番忙しい時期でした。今年は私の二人の娘の受験があり、おまけに父親の入院騒ぎまで同じ時期と重なってしまいました。そして４月、これらすべてがそれなりの結末を迎え、さて５月に入って「これからの自分

をどうデザインしていこうかな」という再考期に突入しているような感覚におかれています。50代という大きな節目を前に、まさしく今その大事な準備の時期なのかもしれません。

## ◆ 川崎二三彦◆

「銀行から電話がかかってきたよ。キャッシュカード忘れたんじゃない？」

慌てて財布を確かめると、やはり…。ほんの数時間前にＡＴＭを利用した時、現金に気を取られ、忘れてしまったのである。

「これで二度目よ！」

妻の小言を馬耳東風に聞き流し、銀行に出向いてカードを返してもらう。バツの悪さも手伝い、そそくさとその場を離れて再びＡＴＭの前に立つと、どうだろう、たった今受け取ったはずのカードが見当たらない。焦って探すと、果たしてカードは先ほど行員と話していたカウンター上に残されていたのであった。というようなことが、私には昔からしばしば起こる。加えて最近は物忘れや思わぬ粗相が目立つようになってきた。

「この料理、何って言ったっけ…」

「グラタンでしょ」

「そう、グラタン」

などと喋っていた時だ。

「あっ」

と、思うまもなくコップに注いだビールがこぼれてしまう。ウウム、これは単なる不注意じゃなくて誰しも避けられぬ衰えじゃないか…。と思い当たった瞬間、一つのアイデアが閃いた。

「そうだ、こんな失敗談の数々を呆け日記として記録しよう。10年も続ければ、老いの道筋が手に取るように浮き彫りになるぞ」

そう思って始めて見ると、不思議なことに失敗がかえって嬉しくなってしまう。

「お客さん、お忘れじゃないですか、と声をかけられたのは今月すでに２回目か」

「とっさに“手探り”という言葉が出てこなかったことは記録に値する」

＊

などと書いた原稿が京都新聞に掲載されたのは、すでに7年も前の2004年夏。今は形を変えてツイッター（@_kawauso_）を舞台に報告を続けている。曰く、

「あれ、座席番号5Cですね、私もです。と思って見たらホームが違う。慌てて飛び降りたけど、危うく博多へ行くところだった新幹線京都駅の出来事」

「しまった、またしても！　西に行くつもりで乗ったJRが東に進んだ」

「映画を見終えて帰宅したら、部屋の鍵がない！　失敗多き人生だから、こういうこともあろうかと対策は立ててあるので慌てなかったけれど、いかにも不味い」

「おやっ、革手袋が…。『今日は使わなかった筈だけど』と思ってよく見ると、なんと黒のオーバーコートが入れ替わっている！新幹線で隣席だった知人のものだ」

＊

さて、マガジン今号の原稿。〆切は6月25日だとすっかり信じ込んでいたところへ編集長から念押しのメール。慌てて材料を仕込みに走り、何とか書き上げたという次第。まことにお粗末様でした。

追伸：本件もちゃんとツイートしています。

## ◆団士郎◆

毎日出勤する場所というのは、もう十数年ない。日によって出かけるところが異なる。仕事をするパートナーが変わる。そこは全て、「仕事（図）」中心の関係である。だから日常（地）にあたる同僚がない。「図と地」はゲシュタルト心理学用語だが、私の立ち回り先はおおむね「図」だと言える。

勤め人時代、職場は「地」だった。何があろうと、なかろうと、先ずそこに出かけていき、挨拶をしてお茶を飲む。さて仕事の段取りはどうなっていたかな・・・と始動する。

こういう「地」のコミュニケーションが、個人のベーシックな安心感を維持する働きをしていたように思う。

だから毎日出かけるところが異なる非常勤専門職者や個人事業者の内的安心は、どのように形成されるのかずっと気になっていた。

こういう人間関係の繰り返しの中に、ツイッターとfacebookが入ってきて3ヶ月過ぎた。ネット上の知人が意識の中で新たな人間関係として場を持ち始めている。

この場の不思議さは、空間的遠近をものともしないところ。今の知人か昔の知人かにもこだわらないこと。誰の系列の知人かなども気にしない。それに、知っている人かどうかも大したことではなく、興味ある意見の人かどうかで接近が可能だ。ギブ＆テイクであるべきというような拘束からも外れている。

Facebookは実名登録を原則とし、ツイッターはニックネームでも何でも構わない。前者は積極的に友人関係の拡大を勧めてくるが、後者は何も発信せずに、人の書き込みを読むだけもＯＫである。

未経験の人の中には、トラブルを過剰に不安視する人もあるが、個人的経験で言えば、気にすることはない。私は両方とも実名登録しているが、ことさら支障はない。

興味のある人のツイートを読むのは面白い。一定の時間は取られるから、生活に多少の影響が出るのは仕方がない。私の場合、移動中の読書量は、随分減ってしまった。まぁ何事にもプラスマイナスはある。　　。

年長者から若年層まで。わりにフラットにやりとりできるのもこのツールの良いところだろう。毎日必ず、ご機嫌を伺うし、自分も出来るだけ一日一回以上の書き込みをしようと決めている。

ＴＬ（タイムライン）は自分が構成するのだから、新聞やＴＶニュースのように、皆が同じものを見ているわけでもない。

この公然化された私的コミュニケーションは、従来型のコミュニケーションとは異なるから違和感のある人や、つまらないと思う人もあるのは当然だろう。その上で、まず私のツイートをご覧下さい。google検索で「ツイッター　団士郎」。登録しなくてもご覧いただけます。

## ◆ 中村周平◆

対人援助マガジン　連載のタイトルは「ノーサイド！」にしました。ラグビーは試合終了時「ゲームセット」ではなく、「ノーサイド」と言います。

試合が終われば敵味方という「サイドをなくし（ノーサイド）」、お互いの健闘を讃え合うというところからきています。

事故を境に、かつての指導者と対極の立場となり、終りの見えない試合を続けていた私にとって、大学院における修士論文作成、家族クラスターの先生方の言葉はノーサイドの笛の音だったのだと思います。

## ◆岡田隆介◆

先日、明石書店から「家族が変わる　子育てが変わる　コミュニケーションのヒント」という本を出しました。本は書くよりも売る方がたいへんで、できれば新書サイズにという希望を持っていたのですが無理でした。でもこれまでの本よりはずっと軽く安いので如何？って、勧め方が違うか・・・。

## ◆鶴谷主一◆（幼稚園園長）

５月中旬に団遊くんが世話人を務めて、見学会を計画してくれました。宮城県仙台市のＭ幼稚園の見学会です。「え？こんな時期に？」「こんな時期だからこそ」・・・という訳で、行って参りました。

今までもいろんな幼稚園、保育園を見学してきて「もう、そんなに驚くことは無い」と高をくくっていた私ですが、その幼稚園の規模の大きさとバイリンガル教育にかける力の入れように驚きの連続でした。１日目は幼稚園の概要や教育内容の話を５時間聞き、翌日は東日本大震災を体験した幼稚園の「その時・その後」と被災地への貢献の話を５時間聞いて、またまた驚くやら感動するやら・・・。幼稚園って、ほんとにいろいろだなあ～、ということを感じたのでした。

その日の夜は、仙台市内に住む僕の祖母107歳を訪問し、自力で食事も排泄もこなし、寝ていることが多くなったそうですが、そのことを気にしていた祖母の笑い話ひとつ。ヘルパーさんとの会話で、「食べて寝ているばっかりで申し訳ねえ、ハローワークさ連れてってけろ！」と言ったそうです。最初は「職安」と言ったそうですが、ヘルパーさんに「いまは、ハローワークって言うのよ」と聞いたあとの発言です。長生きの秘訣でも講義する？なんて笑いましたが、そんな気概が長生きの秘訣かもしれませんね。私も見習いましょう。

## ◆ 藤信子◆

日本集団精神療法学会（以下 JAGP）第 28 回大会の大会長を終えたら、少しゆっくりできると思っていたところにこの大震災が起こった。これまで 16 年間災害支援者のためのグループを実施してきたこと等もあり、JAGP の企画の「東日本大震災関係者の相互支援グループ」の委員になった。それで、今年中は各地で「相互支援グループ」を行うことになり、4 名の委員はそこに参加してコンダクター、ココンダクターを務めるので、出かける日々はなかなか終わりそうにない。それで大会前に考えていた「今度の大会を終えたら、少しゆっくりして」という計画はどこかに飛んでしまった。

大学の中では、心理・教育相談センターにおける、小児脳腫瘍の後遺症の人のグループのメンバーが増え、グループに参加する実習生と、グループの運営や個人のセラピーについて話す時間が増えて忙しくなったが、新しい材料や課題を考えるのは楽しい。こういうことだから仕事が減らないのだろうか。

## ◆ 中島弘美◆

対人支援の仕事や勉強を続けているなかで、同じような職種の人とばかり、かかわっているのはバランス良くないように感じて、働く女性の会「よこの会」に入会しました。この会は、関西を中心に約 150 名の会員で構成され、民間企業の社員、公務員、経営者、フリー専門職などが、お互いの仕事の情報交換をしたり、ノウハウを学んだり、講師を招いて知識を得たりして、長く働き続ける知恵を培っています。入会して 15 年ほどになりますが、この会は働く女性にとってまさに対人援助組織で、その運営がすべて会員のボランティアでなりたっているところも特徴だと思います。

6 月例会は『ワールドカフェ』を体験し、7 月は、高齢者デイサービスセンターの施設長をお招きして、施設の立ち上げや利用者支援の工夫などをお話いただく予定で、現在例会プロデューサーとして準備をしています。

関心がおありの方は　よこの会で検索 してみてください。

参加希望の方は、直接お申込みいただくか、CON までご連絡ください。

## ◆千葉晃央◆

ヨキ結果ヨリモ、
義ヲ尽クシ、
己ダケノ正シキヲ貫キ、
散ルコトハ、
美シキコトカ？

大震災復興事業、貧困・格差社会、均一ショップの全国展開、百貨店の大衆化、少年犯罪の横行、子による親殺し、自殺（心中）のブーム、アメリカ化、2 大政党制、風俗潜入ルポなど、これらはすべて 80 数年前の戦前昭和にあった出来事です。今と共通項もありませんか。その後、軍国主義、敗戦、GHQ による民主化という道をたどるのです。私たちがこれから辿る道はどんなものかと？あの時も「資源」がターニングポイント。そこからの脱却という意味で期待もあったのが「原子力」というのは事実なのでしょう。ただ、多くの犠牲を払ってでも、「本音」と「建前」を両立させるということには、断固反対の思いです。日本の歴史が動いた多くの場面で、そんなエピソードがありすぎます。圧倒的に今と戦前昭和が違うのは、「寿命」です。30 年ぐらい違うようです。その長くなった人生をどう生きるか？その質に関して、問われているように思います。戦前昭和を駆け抜けた女性の一人北村兼子は、複数の著書、風俗潜入ルポ、初の関大女子大学生、女性パイロットとして冒険の企画、名だたる文化人との交流などのエピソードが残っています。彼女は 27 歳の若さで、腹膜炎で死去です。「盲腸」です。この頃は抗生物質がないので胃腸炎でも亡くなります。短く生きた日本人たちは、今の日本、日本人にどんな思いを抱くのかきたいところです。そんなことを考えながら、戦前昭和にはまっています。

## ◆浦田雅夫◆

現在、京都弁護士会子どもの権利委員会の安保千秋弁護士、吉田雄大弁護士を中心に、京都に関西初の子どもシェルターを作る活

動が始まっています。私も微力ながらかかわっています。今回のマガジンにはそのことについて書かせていただきました。たまたま芸大の教員をしていますので、まわりにはアートやデザインを専門とする教員や学生が大勢いますので、ロゴマークやチラシ、リーフレットなどの制作を頼みました。このプロセスのなかで、ロゴマークができるまで、一枚のチラシのできるまでがよくわかりました。おかげで電車の広告や看板、チラシなどが妙に気になるようになりました。何を伝えたいのか、クライエントの意思を反映したものになっているか、かつデザイナーの味も加わっているかなどを感じ、一枚のチラシから醸し出される雰囲気を少し味わえるようになりました。面接と同じですね。６月２５日　京都ひとまち交流館ぜひ、おこしやす。

## ◆ 荒木晃子◆

立命館大学グローバル・イノベーション研究機構客員研究員　島根県内田クリニック生殖医療心理士　精神科・岡田医院　心理士

最近、自分の職位を「精神科の心理士です」という機会が減った。仕事が減ったのではない。他に忙しいことが増えたのだ。うれしい悲鳴をあげながら、つい先日も自分の誕生日を忘れ、予定を入れて仕事で走り回っていた。ついでに、年齢も忘れられたらいいのにな。そういえば、数年前、恩師の先生から「荒木さん、不妊の話、これから百回はすることになるでぇ～」といわれ、ぎょ！っとした経験がある。昨年まで、「えっと、今日でさんじゅう何回め～」とおもしろがっていたが、それ以降カウントできなくなった。きっと、天国の父も喜んでくれてるだろうな。折角なので、この場を借りて、コマーシャルを。

＊島根県松江市にて「第２回　団先生の家族WS」が７月よりスタートします。参加受付中お問い合わせは島根家族援助研究会

担当：大村　simanekazoku @yahoo.co.jp

＊２０１１年９月３日(土)立命館大学で「家族の＜創成と再統合＞シンポジウム～生殖医療と里親・養親～」を開催予定。入場無料。ドキュメンタリー映画の初上映あり、豪華キャストによる講演やパネル・ディスカッションあり。こうご期待！

## ◆松本健輔◆

カウンセリングルームHummingBird　主宰

http://www.hummingbird-cr.com/

結婚相談所を辞めて、夫婦・カップルの問題解決のためのカウンセリングルームを設立して一年半。開業し、試行錯誤しながら必死でここまでやってきました。その中で問題を解決されたクライエントさん増えてきました。その終結された方から最近「悩んでいる知人を紹介をしたい」とメールを頂いたり、「落ち着いたから改めてお礼を」とお手紙を頂いたりとようやくやったことが実りつつある感じがしています。

そんな中、最近になって結婚相談所で出会った人との結婚を悩んでいるクライエントさんや、結婚相談所で結婚した後に夫婦で問題が発生し来所されるクライエントさんが増えてきました。結婚という一つのキーワードでは前の仕事と関連しているつもりではいましたが、正直こういう形で前の仕事との点と点が線になるとは思っていませんでした。こういうふうにこれからも自分のやってきたことが一つ一つ繋がっていく、そんな仕事ができたらほんと幸せだと思わせてくれる出来事でした。

## ◆西川友理◆

いくつかの学校で、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士などの、福祉系対人援助職養成に携わっている者です。学生達と過ごす日々の中で見えてくるものを書いています。

東日本大震災から２ヶ月半。日本中にいる人全てが、多かれ少なかれ心のどこかでいつも被災地のことを抱えつつ、生活をしている日々です。同じように被災地のために、と思いつつ、まったく真逆の事をしている人達がいて、それぞれがそれぞれを批判している状況もあります。「そんなのは復興支援と言えない」「それは単なる自己満足だ」というふうに。被災者のニーズもばらばらなんだから、支援の仕方も色々あるのは当たり前と思うのですが…。

「トータルで見ると日本は被災地のことを常に気遣いつつも、わりと普通に機能出来ているみたい。だから被災地支援は必ずなされるし、また立ち上がれるよな」…と信じてもらえるように、被災地以外の人たちは、いつもよりちょっとだけ頑張りながら、出来るだけ普通の日々を過ごすことも、また１つの支援かもしれない、と思います。

## ◆団遊◆

このマガジンにも寄稿している原町幼稚園の鶴谷さんたちと一緒に、被災時に救援物資の配給基地となり、複数のメディアでも活躍ぶりが取り上げられた仙台市・Ｍ幼稚園に行きました。あの時、実際に幼稚園で起こったことと、被災園が今考える子供の安心・安全とは？を学ぶためです。

いくつも印象的なことがありましたが、中からふたつ取り上げます。

ひとつは「全員が冷静に動けることを前提としたマニュアルは意味をなさない。また、その場で考えることは不可能なので、アクションを細かくリスト化しておかないといけない」ということです。

もちろん、Ｍ幼稚園にも震災マニュアルはありました。しかし、職員の何人もが未曽有の衝撃にパニックになり、冷静に動けなかったそうです。また、なんとか子どもを誘導できた職員も、そのような中で冷静に次のアクションを考える余裕はありません。結果から見ると「万全を自負していたマニュアルは、あまりにお粗末だった」と副園長は振り返っていました。

ふたつ目は「子どもたちにとって最大の支援は、一日も早く元の生活に戻してあげることだ」という話です。震災を機に、下痢が止ま

らない、不眠が続く、涙が止まらない、言葉数が減る、食事を摂らない、さまざまな変化が子どもたちに起こっています。それを食い止めようと、誰もが心のケアに奔走し、有事の中でも幸せな状況をと気にかけます。

しかし「有事である」という囲いとプレッシャーが、子どもたちを苦しめていると言いました。未だにテレビはＡＣの広告が続き、親が不安を口にします。その不安は子ども心に届き、処理不可能なわだかまりとなって深く浸透していきます。「知らない方がいいこともある」という言い方がありますが、対応策を持たない子どもには、大震災のことをリアルタイムに伝える必要はないのかもしれません。その情報との遮断こそが、何よりの支援かもしれません。

子どもたちを元気づける一番の薬は、多少無理をしてでも園を開き、震災前と変わらぬ生活を送らせてあげることだと言いました。園庭で遊ばせることにはもちろんリスクが伴います。しかし、リスクヘッジで子どもの心をつぶしてしまっては、元も子もありません。実際に、先に挙げた状況が、開園で改善された例がいくつもあるそうです。難しい選択を強いられている園がたくさんあります。学びの多い仙台でした。　2011.5.25 記

## ◆水野スウ◆

東京生まれ。石川県津幡町の住人。週いちオープンハウス「紅茶の時間」家主。コミュニケーションワークショップ「ともの時間」の水先案内人。1988 年よりミニミニコミ「いのみら通信」編集人。

3.11 後の最初のマガジン原稿は、いのみら通信の由来について書きました、21 年前に自分で出した「紅茶の時間」の本、『まわれ、かざぐるま』を何度も読み返しながら。この本は、娘が生まれたころや紅茶の時間の始まりのころを書いたものだけど、一見、子育て本っぽく見えながら、後半 3 分の 1 は見事に原発の話。

出版社を通さないから当然、流通ルートに乗らず、本屋にも並ばず。そのかわり、全国にいる通信の読者さんたちが、それぞれのおうちで小さな本屋さんをしてくれて、本はたくさんの方のところへ飛んで行きました。出産祝にもよく使われ、読み進むうち、いつの間にやら原発入門、としてよろこばれた？みたいです。

手渡し感覚の本のひろがりから、新たなネットワークも次つぎ生まれて、この貴重な経験が、本の産地直送っておもしろい！と私に確信させてくれました。冊数が残り少なになった今、ネットで見つけてご注文くださる方がふえました。

娘と協働制作の次の産直本『贈り物の言葉』は、この夏、出版の予定です。

## ◆尾上明代◆

編集長さま　入院は何とか免れました・・・が、やはり体調は、かなりシンドくて、とても残念ですが、今回の投稿は無理です。
昨日は夜にも京都でＷＳをすることになっていたので、帰宅が真夜中で、今日も先ほど帰宅。余力がなく、今夜からまた寝込みそうです・・。

先週末に書く予定だったのに、できなかったのが、やはり原因です。ご迷惑おかけして申し訳ありませんが、よろしくご了承下さい。

## ◆ サトウタツヤ◆

地名には歴史が刻まれている、とは時に聞く言葉である。それほど大げさでなくても、土地の特徴を名前にするということはあり得るだろう。ニックネームのようなものだと考えればいい。杉の木が一本立っている場所を「一本杉」と呼んだりするのは決して不思議なことではない。このほどの大震災に見舞われた荒浜などという地名も由来は何となく想像がつく。

東日本大震災で、様々な地名と出会うことになったが「ゆりあげ」という地名には仰天した。音で聞いているだけでは、きれいな響きの地名であるが、漢字で初めて見た時は、飛び上がらんばかりに驚いた。閖上と書いてゆりあげ。「ゆり」は門構えに水なのである。不謹慎だが津波水害の場所に無縁とは思えない。しかしこんな漢字はありえるのだろうか？そして、すぐにインターネットで由来を調べてみた。すると、名取市閖上公民館のサイトにすぐにたどり着いた。
http://www.city.natori.miyagi.jp/public/yuriage-kou/index.html
「”閖上”地名の由来」を読むとまたびっくり。

名取川河口にある閖上浜は，昔「名取の浦」と呼ばれていた。 清和天皇の貞観（しょうかん）13年，この海岸に霊験あらたかななる十一面観音像が，波に“ゆり上げ”られたのを漁師がみつけた。それ以来この浜を「ゆりあげ浜」とよんだ。現在高舘山の那智神社に安置されている那智観音像がそれであると伝えられている。「ゆりあげ浜」の文字を「閖上」と書いたのは，いつ頃か定かではないが・・，以下略。

だそうである。由来は貞観に遡るというのだ。貞観といえば平安時代。貞観地震として知られる巨大地震が起きた時である。貞観13年（871）の2年後に「ゆりあげ」られた十一面観音像が見つかったというのであるから、これは単なる偶然の一致ではないだろう。貞観と平成という時をこえて千年に一度級の二つの巨大地震がおきた。これらと「ゆりあげ＝閖上」とは無縁ではないはずだ。

地名といえば、Fukushimaという地名が世界的に有名になった。外国人と話をするときに、「京都に来る前は福島にいた」といっても殆ど通じなかったが、今ではワールドワイドである。福島に住んでいたころ、地元のテレビでは「Happy Island＝福島」というコマーシャルが流れていた。ハッピーアイランドに戻るまで時間はかかるだろうが、息の長い支援（がもし必要なら）を続けていきたい。その福島大学で元同僚たちが必死に頑張っている。そんな様子を垣間見ることができるサイトを最後に紹介しておきたい。

ガンバロウ福大！行政の「結」
http://311gyosei.blog39.fc2.com
福島大学震災義援金の受け入れについて
http://www.fukushima-u.ac.jp/kinkyu/20110329_01.html
福島大学避難所日誌
http://fukudai311.blog.fc2.com/page-1.html
チェーンメール考（立命館大学人間科学研究所エッセイ）
http://www.ritsumeihuman.com/essay/index.html

## ◆脇野千恵◆

◆学校現場は相変わらず多忙です。今、所属の２年生の職場体験の引き受け先の事業所探しをしています。これって教師の仕事？と思うのですが…。最近は不況も重なり、中学生の仕事体験に協力する余裕はありませんと断られたり、人数を減らされたりと、年々厳しい状況にあります。約３００名の仕

事場探しは、努力では解決できない課題となっています。少なくとも１３０カ所以上の事業所確保が必要で、これから夏休みにかけて営業の仕事に翻弄されそうです。

◆来週から教育実習生が６名やってきます。以前講師なのに実習生を持たされ、いやな思いをしたことが思い起こされますが、長く教師をしていると教え子がどんどんやってくるようになります。先日も挨拶に来た学生に呼び止められましたが、どうも名前が思い出されずかわいそうなことをしました。若い先生がやってくると、一番に喜ぶのはベテラン教員。ちょっとセクハラめいた発言も気になりますが、約一ヶ月職員室は賑やかになりそうです。

## ◆中村　正◆

立命館大学に勤務して 23 年目となった。29 歳の若い赴任だった。その３期生にあたる卒業生とばったり会った。大学近くの、いつもゆっくりと本を読んだり、原稿を書いたりしているカフェだった。当時から彼女はとても印象的だったのですぐに名前と顔を思い出した。センスのよい年賀状をいつもくれた。デザイナーとして仕事をしている。久しぶりにいろんなことを話した。最後に、今、こうした『対人援助学マガジン』を出しているので、みておいてとすすめた。早速読んでくれたらしく、ほどなくしてメールが届いた。一読者の感想ともなっているので、一部修正の上、本人の承諾も得て、ここに紹介しておきたい。

・・・・・・・・・・・・・・・

中村先生

先週土曜日はおくつろぎのところ、または深い思索をされているところを突然お邪魔しました。1993 年卒業の松浦です。

視界の先に中村先生がみえたときには、驚くというよりはごく自然に歩み寄って行ってしまいました。それは中村先生にたいして、私のこころに時間的な断絶がないからと申しあげてもよいかもしれません。

20 年、日々この社会に生き経験したことを、「関係性の病理」の発見として、心のなかの中村先生（的なもの）にリポートする習慣になっているのです。

例えば先週水曜日は映画『ブラック・スワン』を観、ホラー映画的に怖がる女子を横目に、いろんな要素が含まれているのに描ききれてなくて残念、中村先生に編集し直してもらいたいナ、などと思っていたものですから 3 日後の土曜日の夜、先生にお会いしても違和感がなかったのです。

さて、『対人援助学マガジン』読ませていただいております。素敵におもしろいんです！さすがに勉強しなくては、すべてすっきり理解できるわけではないのですが。

その感想を一気にここでお話するのは控えますが、とにかくおもしろくてなりません。実社会で日々体験している case を分類できる、立派なファイリングホルダーをもらえたよう。わたしのホルダーは 20 年前のままだったのですから喜びひとしおです。

対人援助学会が研究機関として活発に活動していることも興味深いです。ちなみに地方の里山から逃れてきた大学生のときは、社会病理学的視点を「これだ、助かった」とおもっていました。マガジンの率直な感想としては「たのもしい、助かった」という視点より、「おもしろい」。

専門職なので、比較的自由な働き方をしています。一息つくとき呼び出してください。

コーヒー、ひとりじゃないときもまたよい時間ですよね？

・・・・・・・・・・・・・・・・

嬉しい感想だった。二十歳だった彼女ももうアラフォー。苗字がそのままだったから、独立独歩の人生なのだろう。その出で立ち、言葉遣い、そして闊達な印象に仕事を楽しんでいる様子が伝わる。何よりもゼミで話したことが生きている！こんな風に大学での学びをひきうけてくれているのかと感じいった。まだ青臭い教師だった頃を思い出しつつ、心地よい疲れと珈琲の香りで満たされた土曜の夜だった。

## ◆早樫一男◆

### ４月から変わったこと、変わらないこと

もっとも大きな変化は仕事が変わったことです。当然、勤務場所も変わりました。しかし、朝の目覚めの時間はあまり変わりません。６時前後には目が覚めます。仕事に出かけるまでの１～２時間、パソコンに向かって、ひと仕事しています。これは、これまでできなかったことです。公務員生活を退職後もメリハリのある仕事に恵まれていることには、本当にとても感謝しています。

長年の自家用車通勤は交通機関利用に変わりました。私にすれば、歩く生活が飛躍的？に増えました。おかげで、毎朝、ズボンを履くときに、「お腹周りが少しスリムになっているかも？」とひそかに喜んでいます。目標はあと５㎝ぐらいスリムになること。

管理職という立場での気遣いとは全く無縁になりました。これもとても大きな変化です。相変わらず、夜の帰宅時間は遅く、夕食を食べて（アルコールも）、すぐに寝るという生活スタイルに変化はありません。

昨年の職場、一昨年の職場、さらにもう一年前の職場のメンバーが、時折、「一杯飲みましょう」と声をかけてくれます。アルコールとのお付き合いは変わらないまま一生過ごしそうです。

## ◆大野　睦◆

大阪生まれ。幼稚園時代、朝のご挨拶が出来ず自閉症児として扱われる。自然や動物が好きな子供は自然豊かなところで生きていきたいと大学卒業後に屋久島に移住。エコツアーガイドに就き、ネイティブビジョン設立。１９９８年独立、２００１年法人化。２００８年屋久島観光協会ガイド部会長就任。満月の光と２０００本のキャンドル、僅かな電力、そしてアーティストはじめ総スタッフ全員ボランティアで開催するコンサート「やくしま森祭り」発起人。

BLOG:
http://mutsumi-ohno.seesaa.net/
Twitter:
http://twitter.com/mutsumiohno

### 雑誌の新たな利用法

対人援助領域全ての教科において、学生のレポート題として、この雑誌を指定します。WEB上に常にバックナンバーがあるので、手に入れやすいでしょう。

この中から関心のある文章を選んで論評させるのはいかがでしょう。幅広い多分野の執筆陣ですから、学生も関心を持ちやすいのではないでしょうか？

# 旅行がない！

千葉　晃央

●職員：

「この旅行のウリはなんてったって、神戸牛！夕食にはお肉がたくさん！見てください！このおいしそうなお肉！これで１人前です！」

「おなかすいた～。」
「おいしそ～！」
「そんなん食べたことないで～！」

●別の職員：

「この旅行プランのポイントはエビです！この写真の大きなエビをみてください！そして、なんといってもビーチがあるところ！このきれいな景色…」

「やっぱりビーチは最高やな～。」

……見ていた先ほどの神戸方面担当職員：
「おいおい、季節がちゃうがな！夏の海の写真使うなよ～、行くの秋やで～。」

●これまた別の職員：

「こっちは温泉！みんな、温泉すきでしょ～！みてみて！これが露天ぶろ！」

「お～！」「オ～！」
「ええ写真やな～♡」

■RKS（旅行先）総選挙！

これは、旅行先選定のためのプレゼンの様子です。昼食後、利用者が集まって、その前で職員が話をします。行事は集団という支援の力を発揮する大事なグループワークの一つです。プログラムや目的地の選定も、当事者である利用者の方々が決めるのが基本です。なかなか、この過程を大事にすることは大変ですが、できる限り丁寧に取り組んできました。

私のまわりでは、最近は旅行代理店に入ってもらっています。それは何かあったときの対応人員数、対応策の点で、代理店という予備力を持つことが有益であることや、プロによるより充実したプランの作成のためです。

行き先は、予算とにらめっこをしながら、複数の案を考えます。そして、各案に職員が２人ずつついて、利用者の前でプレゼンテーションを行います。それが先ほどの場面です。その内容も、言葉だけではなくポスターをつくって、視覚でも訴えます。立ち寄る目的地の写真、乗るバスの写真、食事の写真、忍者ショーのイケメンの人の写真など様々なものが貼られます。

交通手段ですが、利用者の方もバスが好きな方、電車が好きな方それぞれです。しかし、電車ははぐれてしまうと、大変です。

特に旅行のような長距離の移動では乗り遅れると大捜索になります。ですので、観光バスがほとんどです。バスもできればトイレがあると本当に助かります。

## ■代弁者として

先ほどのプレゼンの場面に戻ります。各ポスターは、いろいろなメッセージを発信します。職員も職員自身がいきたいところを担当して、そのプランのプレゼン担当になります。それは、その案に賛成する利用者の代弁者でもあり、ソーシャルワークの一つの機能です。「この写真の方がええんちゃうやろか？」「こっちの方がいいんちゃう？」と仕事が終わった後になっても考えます。いろんなガイドブックから切り取ったり、コピーをして貼ったりしてポスターを作成していきます。

（イメージ写真）

そのプレゼンテーションの後、施設の廊下にポスターを貼り出します。休み時間にはみんなもじっくり見ています。それを見る姿勢は壁に対して肩と肩を並べる横並びです。コミュニケーションが促進される並び方の一つのです。普段は話しをあまりしていない、意外な人同士で話しをしているという場面にもよく出会います。「前いったことあるわ」「えーなー」「でも、もう一回行きたい！」と盛り上がり、日常とは違う会話をもたらします。「この写真ええわ～」とじっくり見たり、「これ食べた～い」「ここにいきたい！」と本当に楽しそうです。

## ■たのしみにしすぎて…

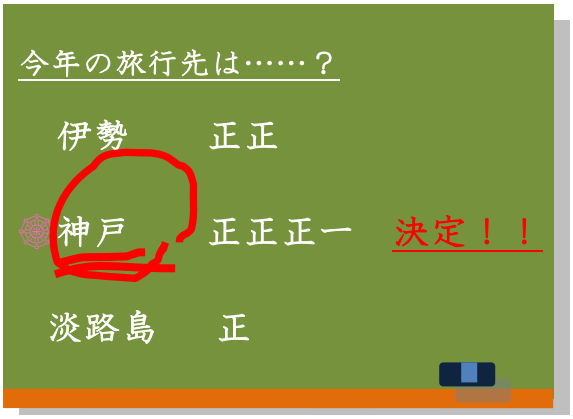
この陽性感情だけならいいのですが、それだけではない部分も触れなくてはなりません。陽性の高揚感の勢いはその「慣性」からか、はたまた高揚感による「疲労」のためか、翻って陰性のものも生み出すことも多いです。援助職は、それも踏まえて挑みます。

「事なかれ主義」で、そういう要素を排除しようという意見もありますが、私はそうは思っていません。そういうことも含めて「普通」だと思うからです。「雨降って地固まる」というように、結構お互いに許したり、謝罪をしたり、水に流したりということも多いです。いわゆる世間一般よりも…かもしれません。

「障害がある」から、「こだわりが強い」から、「後ろに家族がある」からなど、「弱気の虫」の誘惑は多いですが、覚悟の上で取り組むことだと考えています。それはもちろん個人的な意見で、それを発信しながらも組織としての決定に沿っていきます。

## ■開票速報！

一週間後にいよいよ投票です。各職員が自分の担当ケースの希望を把握します。その個人の意見をくみ取る方法も言語が苦手な方はポスターを指でさしてくれることも多く、ポスターが大活躍です。そして、みんなの前で開票作業です。




というような古典的な「正」の字で一票ずつ開票をしていきます！そして、一位が決定！赤のマジックで当選花マルマーク！！「やった～！」と喜ぶ声がある一方、「え～！」「もういややわ～！」という落胆の声も。

## ■多数決さえしたらいいのか？

そこからも職員の仕事はあります。多数決できまった案を、そのまま採用していたらいいわけではありません。最終的に旅行のプログラムは、この投票結果を大いに繁栄して、決めていきますが、ボツになった案にも票が入ったように魅力があるわけで、その声を反映したプログラム作りもします。例えば、ボツ案にあったお肉料理に変更したり、他の案にも入っていた体験教室を組み入れたり等も検討しながら詰めていきます。こうして、「みんなで」作った旅行プランを、「みんなで」楽しもう！というようにしていくのです。

昔読んだアメリカ小説で「民主主義とは多数決ではない。多数派の人たちが自分たちの意見が通ったことだけで満足するのではなく、少数派の人の意見もできる限り反映するなど、少数派の人も納得がいくように進めていくよう努力するものである。その責任が多数派にはある！」というセリフがありました。まさしくそんな感じです。

みんなで考えた旅行プランは、「われわれの旅行」となり、それらのプロセスをみんなで体験することで、ソーシャルワークでいう「われわれ感情」というものが生成されていきます。その「われわれ感情」がグループワーク場面での援助の資源の代表的なものであることは、言うまでもありません。毎回の旅行が、このように丁寧にできてはいなかったもしれませんが、そうなるよう最大限努力をしました。そこにいたるやり取りでは、職員間、職員の上下間、同僚間のなかでのやり取りが繰り広げられました。このようなプロセスを踏むことを大事にする意見もあれば、そうでない意見もあります。

そこでは、いつも自分の中には答えがあります。「誰のための施設ですか？」「職員の労働保障のための福祉施設ではありません」「自分が利用者だったらどうですか？」というものです。なかには同じような問いも持ちながら、結果が違う仲間もいます。自分は上記のような立場を好んでいます。

## ■旅行をとるか？収入をとるか？

こうして、旅行の計画は進んでいきます。

作業を止めて平日に旅行に行っていましたので、旅程は一泊です。そうでないと、一か月の稼ぎに響きます。これまでの連載で述べてきたように、1 工程約 1 円となるといくつやったか？どのくらい長く働いたか？で、知的障害者の実収入はかわってきます。つまり、いかに作業時間を確保するかが重要になってきます。

一方、法的にも余暇の提供という責務は福祉施設に義務づけられてきました。ですので、施設が行う行事も、あまりそこに時間を割かれてしまうと作業工賃が上がらなくなってしまうという「ジレンマ」があります。

そもそも、私のまわりの実習費が高い施設には、経済的支援が必要なケースが利用者となっていることも多いです。そのため、高い実習費を提供することは、おろそかにはできないのです。

## ■私はいない方がいいのではないか

障害者自立支援法へと制度が代わる段階において、出勤した利用者の分だけ、公から費用が出るように制度がかわってきました。以前は、出欠に関わらず、人数分出ていました。なので、通所施設の場合、体調等の理由で施設に在籍しながら、実際に登園、出勤できていない状態であることの意味が大きく変わりました。休んでいると、そのことで利用者の家族が施設に罪悪感を持つということが起こってきました。長期にわたる場合はなおさらです。障害を持った本人側（家族含む）にとっては、自分の籍のところに他の人が入った方が施設は経営的にいいのではないか？うれしいのではないのか？はやく辞めて欲しいのではないか？そんな疑心暗鬼に陥るような不安が、施設に通えていないという悩みを持つ家族の上に更にのしかかり、気持ちを浸食していくのです。

## ■毎月行事に行っていた！

このような状況を打破するために施設は休日としてきた土曜日も開所し、出席実績を積み重ねたり、行事を休日にまわしたり、思い切って行事の削減をし始めたりしました。

行事は、私が勤め始めた 15 年前は月に一回、行事で外出していました。社会資源を利用する場面を多く持ち、社会での経験を増やしていく、そして仕事を離れてリフレッシュをする等を目的として行われてきました。現在、就労関係の福祉現場では年数回というのがほとんどのように思います。施設によっては、行事を施設全体で行うのではなく、一般企業のように働く場が提供する「福利厚生」機能と位置付けて、休日に行事を自由参加で設定し行っているところもあります。

その一方、社会資源として余暇利用の事業を行っているところが地域にできていったというのもあります。しかし、これも人口が集中している都市部と郊外地域とでは、その整備状況は大きく異なります。

## ■旅行のためにがんばる！

ある先生はいっていました。「施設の利用者は、一生懸命働いて、多くない実習費の中から、毎月少しずつ積み立てて、1 年に 1 回だけの旅行を楽しみしてきました。今年の旅行から、来年の旅行までという 1 年。来年の旅行まで、また 1 年頑張ろう！とい

うサイクルがあったのです。それなのに、このような旅行がない！という状況になって、働いてばかりで表情が本当によくない、楽しみがなくなっている！」私も全くその通りだと思います。付け加えると職員側の自分自身も同じ思いです。

ある施設に行った実習生も、こんなことを話しました。「実習中に夏休みがあって夏休み明けに『夏休みどこいったん？』ときいても返事がなかったんです。本人だけでは行けるところも限られているし、みんながみんな余暇利用のサービスを使っているわけでもないです。家族も高齢になったり、仕事をしていたりすると長期休みでもどっかに行ける状況ではないんですよ。」

更にこんなこともききました。施設が利用者と利用者の家族向けに作っている通信・新聞に、職員が夏休みに自分のいった旅行の話しをかくと「いいね～、旅行に行けて！」という声が利用者の家族から複数上がったというエピソード。

このようなことからも施設が行う「旅行」の意味がどのくらい大きなものかが想像できると思います。

## ■援助職チームになる

旅行は職員たちにとっても、プラスの効果がありました。宴会では、ゲーム大会、大浴場ではいっしょに汗を流します、背中も流します。若い女性職員でも入浴介助後の食事、宴会準備…と進めていくとメイクの時間すらありません。でも、そうしたなかで、新旧の職員が共に時間を過ごすことで職員の結束、職員間のお互いの信頼につながっていきました。職員集団の「われわれ感情」の形成です。

もちろん事件はいろいろ起こります。万全を期していてもです。それでも何とか、やりぬくこと、その達成感が私たちの仕事の醍醐味です。「旅行がない!」という状況が続いて数年。私が関わっているところでは、来年旅行が復活です！ひとまず一回ですが。秘かに私はめちゃくちゃに楽しみにしています。

## ■時給 100 円台

利用者に「有給休暇」制度を持っているところもあります。しかし、多くは働いた分だけ、実習費（利用者のお給料）が出るというしくみです。そして、働いてはじめて実習費になる売り上げを叩き出せます。そのための作業の時間を確保、それが利用者の実収入に直結するというのが今のよくある知的障害者の労働現場の現状です。そして、その作業での相場がタイトルにある 1 工程につき 1 円というものです。時間給でいうなら、全国平均で時給約 120 円というような労働の現場なのです。

行事を取るか？収入を取るか？それを常につきつけられている現場でもあるのです。

★

⇒伊勢のおかげ横丁ではショッピングに「てこね寿司」「伊勢うどん」「赤福餅」と本当にたのしかったなぁ～。

# 社会臨床の視界

## （5）

## 「影」をとらえる－感情について－

中村　正（立命館大学大学院応用人間科学研究科）

### 影をみつめること

本マガジン第２号でニーチェを引用した。「怪物と闘う者は、そのためおのれ自身も怪物とならぬように気をつけるがよい。お前が永いあいだ深淵をのぞきこんでいれば、深淵もまたお前をのぞきこむ。」という言葉である（ニーチェ『善悪の彼岸・道徳の系譜』、信太正三訳、ちくま学芸文庫。第４章「箴言と間奏曲」）。その深淵は、闇、病みと言い換えてもいい。さらに社会病理ともいえる。もちろん「怪物」も言い換えて理解した方がいいだろう。その第２号で記した加害者臨床論からすれば「加害者」となるが、「男性」として考えると思考が広がる。もちろん、子どもでも、老人でも、大人でも、教師でも、女性でも、もっと具体的には、オバマ大統領でもオサマビンラディンでも、誰でもいい。そして何よりも、「自分」を忘れてはならないだろう。その「自分」に潜む深淵は心理臨床や精神分析において「影」として把握されてきたことと重なる。今回はその影について、男性性とかかわり考えてみる。もちろん影は否定的なことを意味しているのではない。潜在的な面がそこにあるということとして理解すれば肯定的で、もしかすれば創造的でさえあるかもしれない役割が見えてくる。

第２号に書いた加害者臨床論では、「陰翳が写しだすことへの関心」を述べ、「悪を抱えていきる」と題し、暴力と虐待をみつめるべき深淵としておき、人間の影としてそれらを把握することの大切さやそのことの持つ社会臨床的意味について考えた。ここではさらに暴力・虐待等のわかりやすい「陰翳」だけではなく、自分とは異なる向こう側、退けていること、観たくないと思っていること、意識下に沈めておいてあること等を影として考えてみる。「いま・ここ」で光があたり見えていて、多少とも心地よく関係を取り結んでいることに比べると相対的には沈んでいる事柄という意味での影である。それらは日常的には忘れられている。

たとえば、子育てしながら忘れていた頃の自分の記憶やそれをとおした親との関わりの記憶が浮かびあがる。別姓の連れ合いから教わることは、夫婦であればどうして名字を同じにすることが自然だと観念していくのか等、選択的夫婦別氏制度をはじめとして言葉としてのみ知っていたが生き方にまで腑に落としては考えもしなかったであろう事が多い。子どもの手をひきながら歩いた街は第２の故郷になるといったのは哲学者の鶴見俊輔さん。当時２歳半の娘を連れた「子連れ単親赴任」の経験もそうだった。その時はカリフォルニア州立大学バークレー校にいた。その閑静な大学都市の

保育園界隈の街と家並みは鮮明に覚えている。日本では京都の仁和寺の近くにある御室の保育園に通っていたがその土地とともに関わった保護者や子どものことはきちんと覚えている。家族の凝縮性が高まる旬の時期には土地や人間関係全体への感受性が増すものなのだろう。しかし日本の子育て事情はそう楽観的ではない。男性にとってこの時期は働きざかりなので影に追いやっているのが育児であり残念だと思う。男性の感情生活を豊かにさせてくれる恰好の機会なのだから。

こうして深淵を「向こう側からのまなざし」と置き換え、影を多様に表象してみると自分の見えなかったことや暮らし方において忘却してきたことがたくさんみえてくる。もちろんなかには見たくなかったこともみえてくるので怪物なのだが、それはそれでつきあい方を吟味すると幅が広がり面白いことの方が多い。

## 影のもつ潜在力

私が社会病理や逸脱行動のなかでもとりわけ暴力や虐待のことに関心をもったのはこの影が作用していたと思う。それを意識化することは加害者臨床にかかわる自分の立ち位置の理解としてつながっていった。「加害者臨床にかかわる私は誰なのか」という問いである。その手がかりはマイケル・ホワイトのナラティブ・セラピーであったことも第２号で記した。マイケルが「共犯関係」という言葉を使っていたことは紹介したが、重ねて引用すると、PTSD と診断されたベトナム退役軍人のセラピーに取り組みながら、暴力加害と男性とセラピーと社会の在り方を指摘したその一言である。戦争の PTSD への対応に携わるものの立ち位置について、「彼らをベトナムへ送ったのは我々であるというコミュニティの共犯性」と言い放ったのだ（『人生の再著述』、小森康永ほか訳、ヘルスワーク協会、2000 年、80 頁。原書では community's complicity となっている）。これにはいたく感銘を受けた。こうした理解は、治療同盟という意味にはとどまらない、社会臨床論としても肝心な点だろうと考えさせられた。

もちろん「共犯関係」というのは厳しい言葉なので、いったんは影として一般的にも言えることへと拡げて考えるのがいいだろう。たとえば「傷ついた癒し人論」がある。アドルフ・グッゲンビュール・クレイグは『心理療法の光と影－援助専門家の＜力＞』（創元社）等でこのことを展開した。これはユングの「治療者元型」論に基づいている。クライエントは自分を治してくれる人としてセラピストにこの元型を転移する。これをセラピストに転移すると、自分のほうはそれの影となり、「患者元型（wounded＝傷ついた人）」に取り憑かれる。その結果、事態が悪化する。逆に、セラピストのほうが「私がなんとかしないと」と焦ると、自分自身に「治療者元型」を転移するため、自分の「患者元型」をクライエントに投影してしまう。するとなかなかクライエントのほうに自然治癒力がみなぎってこない。この内なる力のことはストレングス strength とかレジリエンス resilience とも言われていることと重なる。

同じことを河合隼雄はこう語る。「・・対極的な要素を含んだ存在が元型である。たとえば、治療者と患者、癒す人と癒される人等である。分析家が自分を『健康で病むところのないもの』と決めてしまうと治療

者元型が分裂的に作用し、治療者は治療者、患者はあくまでも患者となっていく。患者が自らの治療者元型の働きでよくなっていくことがなくなっていく。まず、治療者が自分のなかに存在する患者を認識すること」(『ユング心理学と仏教』河合隼雄、岩波現代文庫、134 頁）と。

立ち位置を問うていくと、暴力や虐待を扱う加害者臨床に携わるものが自らの内に抱えた病者の側面とは何だろう、男性性の問題をもつ人への支援を行う人が同じように抱える病者の側面とは何だろう、とこんな具合にいろんな疑問がわいてくる。マイケルの問いとそう遠くはない。さらに、対人援助職者は「救済者願望」を影にもっていることが多いので、自己理解や自己覚知ということがことさらに重要となる。臨床における倫理教育や基礎理論の重要性につながる広い課題を影は投げかける。

## 男性と影

問題はその「暴力と影と男性性と私」の関連のこと、である。対人関係が不定形にこの世にあるのではなく、母子関係、夫婦関係、友人関係、師弟関係等というように、関係性をかたどる枠があり、そこから構成されるように機能する相互作用があり、感情が生起する。関係性としての偏り、越境（境界侵犯)、支配と従属、癒着や対立等が含まれ、関係性のねじれが問題となる。その形状をなす有力な変数としてジェンダーがある。しかしジェンダー論は「女性発」の議論が多い。そうすると、男性と男性性は暗数となり、ひどい場合は仮想敵と置かれることもある。これは女性や女性性からみた影である。であるならば、その影としての男性と男性性を、男性の言葉できちんと見つめたいと思った。そうすることでジェンダーの視点が豊かになるはずだと考えた。男性が男性としてみる影ということである。結果として、女性がもつ男性性をも映し出すので、女性の暴力性・攻撃性等が浮かび上がる（かもしれない)。こうして、当面、男性と男性性のもつ暴力、攻撃性、権力（性)、操作等を社会臨床の視界として考えてみることとした。

少年として息子として夫として生きてきた過去の、そうした男性と男性性の影を見つめることは具体的には何かを劈開していくような作業となるはずだ。マイケルのいう「共犯としての加害のなかにみる自己」をはじめとして、「被害を抑圧・解離させてきた自己」、「知識と身体と感情と心理が統合できない自己」、「女性性をもつ自己」、「セクシャリティとエロスの多型倒錯性（ファンタジー）をもつ自己」、「肥大化し傲慢な自己」、「ひきこもる自己」、「ピーターパン的（永遠の少年）な自己」等が浮かび上がる。

影をみる語彙や概念も要る。さらに見たくないものもある。いきなり個人のレベルでジェンダーの影をみつめると、自己否定に傾斜するほどの危うさもでてくるかも知れない。とはいえジェンダーの作用はマクロな変数なので、それを直接に個人に還元させてしまうと難儀な自己覚知となる。そこでいったんは男性文化のもつ影のストーリーラインをだしてみる。男性性ジェンダーは社会や文化の表象でもあるので、いったいそれは個人史にどのように作用するのか、逸脱的行動にどう親和性があるのか、臨床的課題へとどうつながるのかとトレースしてみることが自問自答のようにしてつ

づく。残念ながら教育分析やスーパーバイズの視点のなかにこうした男性性ジェンダー論は組み込まれていないと思う面もあるがそれはまた別の機会に。

マクロな変数（この場合は男性性ジェンダー）とミクロな臨床・個別性（たとえば加害者臨床や司法臨床）の関連性を問うということは社会臨床の醍醐味である。マクロとミクロを統合する「媒体」が自分の身体、行動、感情であり、男性と男性性の軌跡となる。＜場＞としてのそうした身体、感情、親密さがあり、その関係性を構成する社会の形状が浮かび上がり、そこを相互作用としてとりだして対象化すると、クライアントが周囲に組織している、あるいは囲繞されているシステムが重要となる。網の目（メッシュ）のように作用している「関係性の文法」のようなものがある。男性と男性性を特に形容する言葉として、「ホモ・ソシアル（男性同士の社会的連帯や絆のこと）」、「ホモ・フォビア（同性愛者と見られることを恐怖する心理）」、「ホモ・セクシャル（同性愛）」、「ホモ・エロス（同性に感じる生の憧憬的な欲望）」がある（このことは以前にも指摘した）。そして臨床でもよくつかわれる「闘争か逃走か」も男性性と関連する。こうした男性と男性性を形状化する「関係性の文法」はある種の生の様式のようである。

## 影を楽しむ－絵本の読み方教室と隠れたカリキュラム

ミクロなこととマクロなことの連関を考えると、社会へと広がる問いを同時に自己へと再帰する問いとしても立てることが求められる。社会と臨床の連関を問うことはそれを意味する。マイケルのいうような反省的な立ち位置となる。とするとその再帰性は難儀であり、個人としては痛い、受苦的な問いとなる。でもそれが暴力や虐待等の社会臨床的な主題となっているならば、自己を被験者にするようにした問いとしてそれをいったん影として仮置きし、外在化させてみることもできるはずだと考えてきた。これは自分を対象にした当事者研究のタイプだと位置づけることができる。暴力と虐待に男性は加担しているという具合にマクロ性だけを強調すると、対人暴力からの脱出をめざす臨床性が飛んでしまい、男性と男性性それ自体を影にしてしまう。男性には懺悔を迫るだけの仮想敵としての男性となる。現実にはこうした問いを立て続けるのは困難だ。集団性に帰属させてステロタイプな男性観を想定していることになる。反省を迫るようにして男性に何事かをさせようとするアプローチは教育の発想であり、なかなか届かない。ジェンダーのテーマにこのことは多い。たとえば、「育児をしない男を父とは呼ばない」という公共広告はその典型だ。ステロタイプな男性や父親を想定した集団的カテゴリーの押しつけでは動機づけられない。

そこで男性と男性性にねざした熟させ方を練り上げたいと思い、批判ばかりしていても男性の役割の多様化は進まないので、ジェンダー問題への男性の参加促進の方策をいろいろ実践してきた。子どもがまだ幼い頃、男性の育児をすすめる取り組みに関わっていた。日本の父親の育児と家事の時間は一日 10 分だとか、先のキャンペーンのようにそれ自体は男性には何の効果も持たないような脅しのような宣伝文句は聞き飽きた。そんなことでは男は動かない。実施

した私も楽しかったし、若い父親たちにも好評だったのが、男性のための感情教育という隠れたカリキュラムをもった教室だった。保健所で開催した「絵本の読み方教室」がうけた。

お父さんこそが読んであげた方がいい絵本を選び、気持ちを込めて読む練習をする。「ぼくのパパ？ふつうのおとなだよ。やさしいけど。でもたいていは、なんかちがうことを考えてる。遊ぶことができないし」という少年のつぶやきをもとにした絵本は、『小さくなったパパ』（ウルフ・スタルク、小峰書店）というタイトルがついていた。これを読んで発案した。そう、これはてっきり私のことかと思ったからだ。私も娘と遊びながら別のことを考えていることが多いからだ。たとえば研究のこと。なにかネタはないかといつも考えてしまう。純粋に遊べないとはこうしたことを言うのだろう。幼い頃のようには遊べなくなっている自分に気づく。いつのまにか鎧を着て、世間にあわせ、日々のことに精一杯で、何かしら流されていくようになってから、ずいぶんと時が経ったように思えてくる。そこで「絵本のすすめ」を思いついた。

絵本の読み聞かせは、新しい時空間につかのま誘ってくれるいいチャンネルだ。とくに父親の「男らしい」人生からすると、一種の「癒し」のような作用を果たしてくれる。お父さん向けの、お父さんが読んだ方がいい絵本がたくさんあるので、お父さんも元気がでる、育児促進のための、子どもも喜ぶプロジェクトを組んだ。性別役割分業を肯定するわけではないけれど、怖いお話は男性の出番だ。やはり低い声がいいのだろう。おばけや地獄の話しはお父さんの方が喜ばれる。『じごくのそうべえ』（田島征彦、童心社）はおすすめだ。また、お亡くなりになったが佐野洋子さんの『100万回生きたねこ』（講談社）は男性性を考えるためにもよい。いつまでも死なないと威張り散らす「男らしいオスねこ」が変化していく様がよくできている。『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン、篠崎書店）は人間によりそいながら生きる木のお話。私たちが誰かに育てられて生きているということを教えてくれる。『パパ、お月さまとって』（エリック・カール、偕成社）は、はしごをかけて月をとろうとするパパの話し。なんとも雄大で、気持ちがおおらかになる仕掛け絵本である。仕事がうまくすすまない時に読むと救われる感じがする。『おとうさんはウルトラマン』、『帰ってきたお父さんはウルトラマン』、『おとうさんはウルトラマンーおとうさんの休日』（他にもあるが、みやにしたつや、講談社。さらに同じような発想で怪獣シリーズがでている。宮西達也『おれはティラノサウルスだ』他たくさん。ポプラ社）。外で強く闘うウルトラマンも家に帰れば子煩悩だ。胸のアラームが「ピコン！ピコン！」となって「シュワッチ」と飛び立ち、帰る先はウルトラマンの家。そこには子どもウルトラマンが待っている。ここぞとばかりに「ねえパパ、ウルトラマンごっこしよう」とおねだりする。「ええー、さっきまで本当の闘いしていたんだぞ！」と思いながらもうれしそうにウルトラマンごっこする。こうしたやりとりがほほえましい。『ピートとうさんとティムぼうや』（マーカス・フィスター、講談社）は、ペンギンパパの話し。自然体の子育てが雪と氷のなかを生きる暖かさを際立たせている。

紹介すればきりがない。父親にとっても元気のでる育児の薦めはたくさんあるはず

だ。たとえそのかかわりが 10 分でもいい。感情の交流ができる。脅しのような育児奨励はうまくいくはずがない。絵本はもちろん棒読みではいけない。大事なことの一つめは、感情や気持ちを込めて読む、二つめは、ゆっくりと語りかけるようにして読む、三つめは、楽しみながら読む。つまり、演技しながら、時間の流れをゆっくりめにきりかえ、空想の世界に身を漂わせるということが肝心だ。こうした感覚は男性の日常生活にはないことだ。だから効果がある。男性や父親にとってのエモーショナル・リテラシーである。もちろん練習は要るが、いつでもだれでもできる育児である。このプロジェクトのもつ隠れたカリキュラムである。

## 育ちのなかの影

もちろん育児の現実は多様でもっとたくさんあるが、こうした取り組みをとおして、自分の子ども時代を理解するよい機会になった。そういえば私は育てにくい子どもだとよくいわれ、癇癪がそうとうひどかったと母がよくいっていたことを思い出した。また、周囲からは寡黙な少年だといわれてきた。幼い時からそうだった。しかし、内なる言葉は豊かにあったと思っている。寡黙で表情が少ない少年は、学校の図書館の書物を全部読もうと決意した。ＳＦ、ホラー、探偵小説に純文学となんでも読んだ。ずいぶんと言葉がたくさんあると内心では思っていた。外見とは異なるのだと。しかしそもそも感情を表面にだすような人間関係が豊かにあるわけではない。沈思黙考するのが好きだった。そんな寡黙な少年は、高校では山岳部に入った。ますます孤独に憧れるようになった。体力づくりとともに山岳小説をよく読んだ。山岳部は汗くさくて青臭い。青臭いのは、どうして山に登るのかという問いに何とか答えようとしていたからだ。これはまじめな話である。山に行く道中、テントのなかで、部室で際限なく仲間や顧問教師と話をした。こうして青臭い、つまりは文系のクラブだということがよく分かった。しかしこれは今でも役だっている。この連載がそうだ。答えのない、あるいは答えの出にくい問いが好きなのだ。いや、問いそれ自体が好きなのかも知れない。

好きな映画の１つに『イントゥ・ザ・ワイルド』（ショーン・ペン監督、2009 年）がある。1992 年にアラスカの荒野で死体となって発見された若者の実話がもとだという。大学を優秀な成績で卒業した 22 歳の主人公は期待を寄せる家族も貯金も捨て、中古車で旅に出る。その車さえも捨て、一人旅を続ける。道中の出会いと別れを繰り返す。自由に生きようと決意した彼が最終的に目指したのはアラスカの荒野だった。孤独がとてもきれいに描かれている。私も若い頃、とても憧れた。でもそれは対人関係力を育まなかった。上司のいない職業しか向かないと幼い頃から思っていた。確かに実際そうで、今は上司のいない自由業である。やはり、影をみてみるとそこに指示されて生きてきたように思えてくる。

ネット社会の影響なのか、心理臨床化する社会の結果なのか、シューカツを強迫するような社会のなれのはてなのか、そうしたことすべの相関なのだろう、対人関係力やコミュニケーション力をやたらに強調する社会である。どうしてこんなにもコミュニケーションや対人関係に力点が置かれる

のだろうと、寡黙だといわれ、表情がないといわれた幼い頃と重ねて考えることが多い。饒舌に何かを語り、対人関係もよく、快活に感情を言葉に表現するというある種の「善き前提」が対人援助職者に仮定されていないだろうか。そんな人間ばかりではないからこそ、芸術が発達し、スポーツに躍動し、臨床から学ぶことがある。そこにこそ深淵があると思う者からすると、寡黙だといわれつづけ、孤独を好む若い頃の姿は、大切にしたいと思う影となって愛おしくなる。その頃にはもっとファンタジーの世界が豊かにあったように思う。夏目漱石をはじめとした純文学のなかにあるホモ・ソシアルな表現に、同性同士の関係を意識する思春期青年期であったことが反応していた。三島由紀夫の小説にも何かしら危険な誘惑を感じていた。モデルとライバルの男性同士の葛藤に憧れたのだろう。家のなかが女性と母性に囲繞された環境だったからでもある。寺山修司の世界も同じような吸引力をもっていた。それは父性や男性性の不在という高度経済成長時代のジェンダー感覚であるのだろう。後にダニエル・ゴールマンの感情的知性 Emotional Intelligence＝EQ という言葉を知ったが、感情に揺らされながら知的な関心が形成されていく過程が読み取れる。

**身体と行動－ハゲ現象のエピソード**

男性性の傷つきの独特の困難さ（にもかかわらずそれを表現する言葉がないこと）、加害者臨床としてジャスティス・クライアントに関わる自己（規範・正義、ケア、逸脱性、異化願望）、彼らから教わることの多さと共犯関係にある自分の立ち位置の悪さは、影をなす。しかし、その影のなかにある「自分の伸びしろ」「もうひとつの自分」「未開発な自分」「攻撃性を別のかたちに変えている自分」、つまりそれらは、抑圧してきた、解放できていない、犠牲にしてきた（させられてきた）、異なるエネルギーへと代位させてきた影の部分であり、そのとらえ直しは、複数文化的な自己の形成にもつながる。影はネガティブなのではなく、クリエイティブさの源泉だと考えられるからである。こうした関心から男性性ジェンダー論を組み立ててきた。

話を大きくすれば、男性、父親、男の子などに焦点をあて、ジェンダーと男性の視点から、マクロな問題、たとえば戦争、テロリズム、暴力などのハードポリティクスの領域、企業社会、産業組織、科学技術というリーディングセクターの領域とかかわる男性と男性性の特性や存立構造についての考察は大切で面白いものだと思う。もちろん、社会病理的な現実も浮かび上がる。産業社会の抑圧の象徴である(自殺)過労死、ワーカホリック、あるいはアルコール依存症、戦争後遺症、そして犯罪や非行などの逸脱行動まで、広く脱感情作用とでも呼べるような現象と男らしさの病いの相関的な関係がみえてくる。共生、和解、修復、持続、平和という異なる価値を表現する男性と男性性の視点はいかにして構築可能なのかと問うことを模索する。

でも今回は、そうしたマクロな話ではなく、個々人の経験に落としていく話題を紹介しておきたい。男性性がジレンマのようにしてみえてくるエピソードであるハゲ現象のことである。男性の経験をきちんと視野に収めた研究の蓄積を書評論文集として編集し、男性と男性性の研究の広さと深さ

と面白さを確認したことがある（それを中村彰さんとの共編著としてまとめた。『男が見えてくる自分探しの 100 冊』かもがわ出版、1998 年）。これは男性性の見地から社会臨床的な書物をたくさん集めて書評風に紹介し、男性研究を先駆的に論じた書物の読書案内である。そうした観点から、その後にも書評を随時執筆し、男性と男性性の広さと深さの内実を追いかけるようにしてきた。たとえば、男性の身体に関する多様な研究がある。なかでも須長史生の『ハゲを生きる－外見と男らしさの社会学』はそうした男性の身体に係留した個性的なものである（勁草書房、1999 年）。この書評を『社会学評論』（第 51 巻・第 1 号、2000 年、日本社会学会）に書いた。再掲して紹介しておきたい。

ハゲた男性の努力は涙ぐましい。見合い写真に墨を塗る、見合いそのものをしないで結婚する、スダレ（バーコード）頭にするなどだ。本書はこのハゲ現象を対象にしている。著者は、「フェミニズムが語る男性像は比較的素朴で、単純なイメージが深く検討されることなく提示されているように見うけられる」という。たとえば、「男性は暴力的である、男性は競争を好む、男性は女性を支配したいという願望がある」という具合だ。そうではなくてやはり、男性の社会的経験も多様だろうと考えている。その格好の主題にハゲ現象が選ばれた。そもそも男性はどうしてハゲを恥ずかしがるのか。「エラがあろうが鼻がぺっちゃんこだろうが、それほど執着する男はいないと思うよ」、「何で髪の毛だけ執着するんだろう」という語りをハゲの親睦団体、頭光会の会員へのインタビューから引きだす。

男性が経験するハゲ現象は不可解である。ハゲ意識は「女にもてないからハゲを気にする」ということを基本にして成り立っているらしい。女性からハゲを理由にして嫌われた経験を被調査者は有していないにもかかわらずこの信念をいだく男性たち。著者はこの心的機制を「フィクションとしての女性の目」と表現する。もちろん女性はハゲが嫌いという言い方は女性が外見だけで男性をみているという一面的な見方であることもわかっている。しかし、この意識にとらわれていくことで男性たちは自らを呪縛する。それを丹念にあとづける。「脱毛という事態のなかで徐々にハゲを気にしていく過程」の相互作用分析を行う。ハゲつつある人が髪の毛を気にしているときのしぐさや言葉遣い、独特の髪型などハゲに関する態度こそを周囲の人は気にする。そしてそれが頭髪の不自然さをつくりだし、逆にそこに向かう他者の関心を誘発する行動となる。たとえば、「薄毛を隠そうする行動、当人のハゲを意識した行動（隠すための行為、言動の変化）が他者の特別な行動（視線、言及、嘲笑、からかい）」を導くということだ。この相互作用で成立するのがハゲ現象だとされる。

この過程には、男性研究の重要な環である男性同士の関係がある。女性にもてないとだめだという男性同士の集団的な自意識がハゲを気にするという意識をつくる。老化や加齢による身体変化への反応としての意識だけではなくて、「ままならない身体の経験」が意識され、しかも、もてないからとか、きまりわるいという感覚で意味づけされているのがハゲを気にすることだと分析される。

さらに、ハゲ現象のジェンダー論的分析が行われる。「男性が自らの外見のことで『ウジウジ』したり、悩んだりするのは、好ましくないこととして価値づけられている」ので、

ハゲた男性の男らしさ意識は複雑な様相を呈する。ハゲた自分にこだわればこだわるほど、「女々しく、うじうじしない」男になることを演出しなければならない。男らしく振舞うことが求められるのだ。これは男らしさの鎧と重なり合う。

しかし、男性研究には、男らしさから降りる、つまり「鎧を脱ごう」というメッセージが支配的である。男性同士の関係において「鎧」を脱げない男性がいる（ハゲの男性）。これは防衛としての男らしさであり、女性たちから批判の的となる「男らしさのメンツ」ではない。男性の社会的経験のなかには、メンツを守ろうとしているわけではないのに、結果として「男らしさの鎧」を身にまとわざるをえない状況があることに分け入った男性研究が求められるということになる。

男らしさの多様性については、ジェンダー研究と男性研究で活躍するシドニー大学のロバート・コンネルが男性性を、支配的、従属的、敗北的（傷ついた）、周辺的、抵抗的などという具合に類型化している。また、米国の男性研究では、ホワイト・マスキュリニティとブラック･マスキュリニティの差異という具合にも論議されている。ようするに「マスキュリニティーズ」と複数形で語る必要性である。著者も言うように、本書が扱ったハゲと機能的に等価なアイテムはたくさんある。オタク、ちび、デブ、母親依存などだ。さらに、障害のある男性、介護、看護、育児に携わる男性、離婚を経験した男性、くわえて、吃音、顔のアザなども含めて考えれば、ジェンダーとしての男性の分析もずいぶんと幅の広いものとなるだろう。こうして多様な社会的経験を語りながら、男性のジェンダー経験や女性との関係構造の布置連関が浮かび上がる。このような男性研究の動向にも即した意欲的な研究の成果である。男性研究の理論的座標軸をも整理し明確にした上でハゲ現象を位置づけるとさらに実りがあるだろう。

さて、ここでのハゲは記号の１つである。男性の経験を記述するためのテコのような視点となりうる。男性性が男性や女性を拘束し、ジレンマのようにして事態を困難にしていく。女性発のジェンダー論ではない男性の経験を語るジェンダー論であり、男性性のジレンマがよく把握できる主題がたくさんあることがわかる。老化する身体の影と闘いながらの姿である。他にもこうしたテーマはある。たとえばコミュニケーション問題。寡黙さと感情表現が苦手なことと、親密な関係性における葛藤や表現の不器用さ、行動化・身体化する傾向と男性文化等があり、独特な隘路をもつ男性の悲哀がみえてくる。

## Unlearn（脱学習）という言葉にであう

そのようなテーマの１つに攻撃性がある。この気づきは男性問題に取り組む仲間たちとの活動からみえてきた。男性問題の市民活動である。その一環として、1991 年頃に *Learning to Live without Violence*（ダニエル・ソンキン著・中野瑠美子訳『脱暴力のプログラムー男たちのためのハンドブック』青木書店）という英語の本の輪読会を始めた。この本は家庭内暴力加害者向けの脱暴力プログラムのテキストに使われているものだ。面白かった。テキストに書かれてあることを基にして話をした。男性としての振り返りをすると、暴力がずいぶんみえてきた。兄弟げんかは日常だった。私は長男で、弟とけんかをした。でもそれは、

兄弟げんかで終わってしまっている。勇ましくてよろしいってことで終わっている。けれども考えてみたら謝りもしないで終わってしまう。でもこれ、理不尽な暴力だ。その男たちの中に、兄に激しい暴力をうけた弟がいた。すごく根に持っているという話しをした。激しいケンカを友人としていたという話しをする男性もいる。いじめられていたけれど、「男の子でしょ！」といわれて我慢をしていた話しもでてくる。両親、とくに女性である母親への反抗も同じだ。もちろん金属バットは持たなかったけど、それに地続きのようなことはいっぱいしていたという。少年の世界には暴力が満ちあふれていることを男性たちが語り合った。男の子だからとこうした暴力は軽くみられてきた。周りもそう言う。振り返ってみれば、当時はそんなものだとやり過ごしていたことである。社会のなかの大きな暴力と自分の生育過程の小さな暴力が重なってきた。私の時代にもいじめはあったから、いじめている加害者をとめられなかった自分を罪深く思っていたことも話がでた。暴力や攻撃性を軸に半生をみつめた。いろんなことが思い出されてくる。自分に向かう暴力も意識されてきた。ハイリスクな行動のことだ。「家族のために・・」と思って健康を無視して働き続けることも同じだ。この健気な努力も、長期的に見れば自分に対する暴力だ。男の人生をジェンダーの視点で眺め直してみたほうがいいのではないかとなった。一種の男たちの意識覚醒 consciousness rising である。

後に Violence is learned. It can be unlearned.という脱暴力キャンペーンのことを知る。サンフランシスコ市のキャンペーンだった。バスのボディに大きく掲示してあった。ポスターもたくさんみた。そこで「unlearn」という言葉にであった。強いて訳せば「脱学習」であるが、学び直し、そぎ落とし、捨て去ること等が近い。実践するのは難しいなと思った。けれども救われた感じもした。「学習したものであれば脱学習できる」という希望のある言葉だからである。そして男性の社会化の過程で少なからずの男性たちが暴力やそれとの関係をとおして成長してきた経緯が確認できたので、それは個人の問題だけではないだろうし、逆に、同じ男性文化のなかにあっても暴力的でない男性も多いので、そこにはどんな分岐点があるのか、その際の暴力的ではない経路の規範はどこで学習できたのか等と思考が広がっていく言葉だった。この一言が何かを全部つなげてくれたように感じたのだ。

これは加害者臨床へとつながった。たとえば、大阪で虐待する父親のための脱暴力グループワークを実施しているが、そこでも焦点のひとつは男性の無表情さ male inexpressiveness の脱学習である。そのために感情と男性のかかわりをグループワークの素材にしている。二分法的ではあるが、女の子の表出能力や感受力に比べると男性や男の子のそれは劣ると思うからである。暴力は行動化なので、そうではない行動化を代位していく。半ば身体化され、感情面でもコントロールができない自分の暴力を脱学習させていく課題は時間がかかるし、認知的な面での暴力の乗り越えよりも手間がかかる。そのためのコミュニケーション練習をおこなう。たとえばグループワークで、顔の表情をいっぱい書いたものを小さなカードにしてたくさん並べる。「あなたが暴力を振るっているときの顔を取ってくだ

さい、それからあなたがいまこういうグループワークをして変化しているときの顔を取ってみてください」と指示する。その絵を選んだ理由を説明してもらう。そういう表現練習を繰り返す。絵に託して自分の感情を言葉にする。自分の気持ちを客観視していく。最初はカードがなかなか取れないこともある。どれが自分の顔なのかわからないという。慣れてくるとそれなりにいい具合になる。感情についてコミュニケーションしやすいエモーショナル・リテラシーの練習しながらグループワークをすすめている。

だからこの脱学習は知識の話だけではない。身体・行動、感情・感性、そして親密な関係性から社会的な関係性へと広がるなかでの脱学習としてデザインしている。脱暴力のグループワークは、論理や理屈で、暴力はいけないと教える場ではない。ジェンダーの話しも性差別の話しもこちらからはしない。だんだんと自ら気づいていく過程で必要な言葉と知識は伝えるようにしている。

## レポート・トークとラポート・トーク

加害者臨床でよく話をすることにラポート・トークとレポート・トークがある。古い話だが、かつて『讀賣新聞』に「あなたへ」という生活欄があり、そこで父親の子育て体験を掲載していたことがある。「ラポート・トークしてますか」と題したその一文が以下である（『讀賣新聞』1998 年 9 月 18 日付け）。

> 男のコミュニケーションの仕方は、やはり「男らしい」。言葉遣い、語彙や話題の選び方、話す時のしぐさなど、どれをとっても「男らしい」コミュニケーションがある。
>
> 事実を伝えるコミュニケーションを「レポート・トーク」、相手に共感し、関係をよりよいものにしようと気持ちを伝えるコミュニケーションを「ラポート・トーク」という。
>
> レポートとは記録し、報告すること。伝えるべき事実や数字が問題となる。言葉遣いやしぐさも感情的でなく冷静でなければならない。
>
> ラポートとは関係づけること。相手との信頼関係を築くことが何よりも大切だ。話の中身よりも、その人と話をすること自体に意味がある。
>
> 男のコミュニケーションは、このバランスがよくない。どちらかといえばレポート・トークが多い。聞き手の興味や関心に反応するというよりも、自分の伝えたいことに力点が置かれている。「そ　うね」とか「なるほど」とか相づちを打つことも少ない。
>
> 米国でプレスクールに通う娘がうまくやっているか心配で、電話をかける。どんなことをしたのか、授業はどうか、先生はおもしろいか、どんな友達ができたかなどと聞いてしまう。
>
> これはレポート・トークの典型。こんな質問にうまく答えられるはずがない。質問というより尋問に近い。
>
> そこでラポート・トーク。「通い始めたばかりのころの気分を色で表すとどんな感じ」と聞いてみた。
>
> 「うーん、そうね黄色かな」と娘。
>
> 「黄色ってどんな気分の色？」
>
> 「ちょっとドキドキの気持ち。信号の色と同じ」
>
> 「もっと学校に慣れて楽しくなると青になる？」
>
> 「ちょっと違うかな。楽しくなるともっと色が多いの。クレヨンの箱のような感じかな」
>
> 「思い出した。ねえねえ、今度もっといっぱいの色のクレヨン買って。どんどん気もちが変わるともっと色がいるかもしれないでしょ。」

「そうかもしれないね」

「ねえねえ、５０本くらいのクレヨンみつけたの。買ってね。」

話はどんどん広がり、学校が楽しいかどうかなんてことは、どうでもよくなってしまう。まあ娘の楽しそうな暮らし方が見えたので一安心。

親ばかな話であるが、子どもの感じる世界の色は自分で表現して塗ればいいので、それが何色かどうかは子どもが決める。黄色だから青になって欲しいという親の案じる気持ちは親の精神安定のためでしかない。こうした会話は娘に鍛えられたラポート・トークのおかげである。グループワークでいつも練習している。

それからもう一点、セルフケアを強調する。「自分のために花を買ったことがありますか」とアメリカの脱暴力グループワークで進行役が暴力男性たちに尋ねた。とても印象的なやりとりだった。「では今日はグループワークの帰りに、バラ一本でいいから自分のために花を買ってみてください」と彼はみんなにすすめた。これは自分をケアしてくださいというメッセージである。日本のグループワークでも男性たちに同じ事をすすめる。自分がケアできれば他人もケアできるはず、ケアする能力をもっと身につけて欲しいとグループワークでは話をする。子どものケア、自分の親のケア（介護）、色々な意味でのケア役割を男性も発揮しなければならない時代となった。他人のケアだけではなくて、自分のケアも含むことが重要なメッセージである。

**感情がないのではなく、それを表現することのほうへ**

こうしてみてくると、男性の無表現さ、コミュニケーション下手、寡黙さは精神医学でいうところの失感情症（失感情言語化症、感情言語化障害、Alexithymya アレキシサイミア）のようでもある。「シフニオス(Sifneos PE)が提唱した心身症患者の特徴的な性格の１つ。自分の内的な感情に気づくことと、その表現が制約された状態をいう。ギリシャ語の a=lack（欠如）、lexis=word（言語）、thymnos=emotion（感情）から造られた言葉である。・・・具体的には、空想的想像力に乏しく感情表現が下手で、面接では事実関係のみ描写し交流がとりにくい。精神生理学的には、情動の中枢である辺縁系と認知表現の中枢である大脳皮質との機能的な乖離と解釈されている。一方、器質的疾患で危機的状況（透析、癌、ICU など）の患者では、心理的防衛反応として失感情症がみられ、フライバーガー(Freyberger H)はこれを二次的失感情症と名づけている。」(『医学大事典』、医学書院)。もちろんラベルを貼ることが目的ではないが、こうした名づけがあるとその傾向性も含めて個人の問題ということだけではない側面が見えてくる。

この点をめぐる男性心理学の議論がある。ハーバード大学の Ron Levant は男性の感情表現の弱さが北米諸国では一般的に確認でき、それを「マイルドな失感情症」と名づけた。信頼できる稼ぎ手であることに答え、感情的にはストイックで、論理的で、問題解決思考に長け、攻撃的であることを期待する男性文化は男性個々人にある特性をもたらすとし、そう名づけた。それに対して Jason Thompson という心理学者が批判し、それは断定的であり、「トロント失感情症評価尺度 the Toronto Alexithymia

Scale (TAS-20)」を使ったフィンランドでの調査等を紹介し、そこから二つの要素をとりだし、男性は第２要素である「感情を表現することの困難」(difficulty in describing feelings)では女性より高いスコアとなるが、第１要素である「感情を同定することの困難」(difficulty in identifying feelings)では差異はないという研究を紹介している。つまり、感じていないのではなく、それを表現する点においての違いがあるので、一般に男性が失感情的あるいは無感情的なのではないと批判した（この研究は、*'Emotionally Dumb: An Overview of Alexithymia'*に詳しい。現在は Amazon の Kindle 版で購入できる。）

ここで述べてきた絵本の読み方練習、ラポート・トーク、セルフケア、土地と人間関係への感受性、エモーショナル・リテラシー等の一連の話はトンプソンのいう第２要素の課題を意識したものである。このマガジンでよく引用する映画も感情表現とかかわるのでそのかたちとして私にとっては大事だ。こうしたことは男性・男性性にとっての影としてみるといいのではないかとここでは書いてきた。それを可視化させるようにしていろんな試みを続けているし、実践の視点を大切にしているつもりである。

こうして、社会臨床の視界に入り込んだ影は私にとっては心地よい発見をもたらしてくれている。もちろん、そこにも既製品としてのファンタジーが文化産業によって構築されており、なかでもエロスをめぐっては安易な性産業が膨大に横たわっているので、それらに取り込まれぬような注意もいるが、身体感覚、生の光景や原風景、多様な表象、映像によるファンタジー等をとおして、男性と男性性をめぐるその影の世界を渉猟してみると、すべて第２要素の手がかりとなり、創造性が増していく。こうした意味で、自由な想像の世界に遊ぶことは、私にとっては、既製品のファンタジーや男性文化に溺れないという意味でも精神の健康を保たせてくれるよい機会となっている。

なかむら　ただし
（社会臨床学・社会病理学）
2011 年 5 月 28 日脱稿

# ケアマネの出会った家族たち

# 5

**木村晃子**

**居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ**

## 地域で支える認知症ケア

### 家族と地域をつなぐ

私たちの日常には殊更意識する必要もなく、地域とつながる機会というのは組み込まれています。町内会の役割や行事、子供を通しての学校活動などつながる場面はあります。近年、町内会機能は脆弱化しているといわれることもありますが、この田舎町ではまだその機能は比較的保たれています。それは時に煩わしさもあり、時に人とつながる温かみもあるでしょう。けれども、昔のそれとは違い各家庭のありようや抱える悩みごとなどが、そのようなコミュニティにおいて露呈されることは極めて少ないし「個人情報」という名の下においてはむしろ包み隠されることが近頃の傾向なのかもしれません。個人と地域とのつながりとは残念ながら表面的以上には形成されていないのでしょう。

社会システムが変化し家族機能も変化している。人と人とのつながりの弱さを指摘される今だからこそ求められるのは、やはり自分の周りの出来事に対する興味関心、思いやり、そんなありきたりのことなのかもしれません。

本来、人は自分の生活は誰かにとやかく言われるのではなく、自分で考え決め行動していきたいと願っているはずです。例え他者の手助けが必要な状況であっても、誰かの助けを受けることへの遠慮も含め躊躇は持っているのではないでしょうか。そんな時に上手なお節介があるとずいぶんと暮らしやすくなるのだと思います。最近は上手なお節介ができる人も少なく、何か手助けが必要な人を見つけても、それは地域の方のお節介よりも「専門機関」への通報となって、専門家たちが何気なく介入し、フォーマルサービスにつながり、個人の家庭では困りごとなどなかったかのように暮らしが続きます。周囲も何となく事情を知り

つつも知らないふりをして当たらず障らず関係が続いていることもあります。そんな関係からは地域の助け合いやつながりなどはできにくいだろうなと感じます。例えフォーマルサービスにつながったとしても、専門家が介入しているからこそ、もう一度地域とのつながりを作っていきたいと思います。

## 二人暮らし

サキさんは９０歳。５０代の娘蝶子さんとの二人暮らしです。これまではお元気だったサキさんは７０代の半ば過ぎまで農作業の手伝いにでかけるなど活動的に過ごしていました。住み慣れた住居も古くなり、立ち退きを迫られたのを機に、お二人は近くの一軒家に暮らしを移すことにしました。引っ越しを機に農家への手伝いをやめ自宅でのんびり過ごすことになりました。その頃からでしょうか、サキさんの物忘れがありました。年齢的なものだと思っていた蝶子さんは特に気にすることなく、仕事に出かけていました。けれども、３年ほど前から、近所へ散歩に出掛けたサキさんが自宅に戻れなくなり、警察に探してもらうことも出てきました。夕方になると「帰る」と言っては外へ出て行こうとするのです。もう目が離せません。蝶子さんは勤めを辞め、サキさんの介護に専念します。まだ若く家のこともサキさんの介護も難なくこなす蝶子さんの様子に近所の方が何か関わるという場面はありませんでした。けれども今、蝶子さんは片時もサキさんから目が離せない状況になっていました。蝶子さんは介護保険サービスの利用を考え相談は、蝶子さんからケアマネへとつながりました。

### 家族の外へつながっていく

初回面接のために、お二人の自宅にやってきたケアマネです。新興住宅街ではお二人の年齢構成よりも若い世代の家族が居住しています。昼間は静かな住宅街です。ケアマネがインターフォンを鳴らすと元気な声の蝶子さんが対応してくれました。招き入れられた部屋の中には、歴史を感じる家具がシンプルに配置されています。長く大切に使いこまれたものでしょう。見渡すと部屋にはサキさんの姿はありません。尋ねると「話しがほとんど通じません。こちらの言っていることも意味が理解できずに、知らない人の顔を見るとストレスになるようです。」と蝶子さんから言葉がありました。ご挨拶だけでも、とお願いし、居間に続く和室に室内犬とともに座っているサキさんに声をかけました。「こんにちは。」サキさんは首をかしげ蝶子さんの方をみます。「ケアマネジャーさんだよ。これから色々相談にのってくれるから」そう言うと和室のふすまを静かに閉めました。

蝶子さんから、サキさんの様子を伺います。体の動きは良いが、全てに声かけや誘導、動作補助が必要な状況で、一日を通して蝶子さんがサキさんと離れることができる時間はほとんどないようです。運動不足だと夜になっても眠らないので、日中はなるべく散歩にでかけ体を疲れさせ良眠できるように工夫をしています。家事はできないけれど、家事をしたがるので、一緒にやります。時間がかかるので蝶子さんは自分一人でやりたいけれど、本人と一緒にした方が本人のためだと思うので、なるべく一緒にしています。それは認知症介護のお手本のような、とても丁寧に介護されている事が伝わってきました。

ケアマネは、介護の状態が重いサキさんをきちんと介護されている蝶子さんの様子に心配が走りました。それはあまりにもお一人で頑張り過ぎているように映ったから

です。蝶子さんからは、週１回でもディサービスに通ってもらいその間自分が家庭内の用事を足すことさえできればいいので、週１回のディサービスの利用をお願いします、という希望でした。

蝶子さんの意向を聞いた上で、一通りの介護保険サービスについての説明をしました。お一人での介護の負担を減らせるように介護サービスの利用の仕方の提案などもしてみました。けれども、蝶子さんは、数ある介護保険サービスについても、あまり必要性を感じていない。とりあえず、週 1 回だけディサービスに通う事が出来れば十分です、と介護についてはっきりとした意見を持っていました。

ケアマネの提案を受け入れる姿勢があまりないことや、ご自身の考えた事以外の選択肢についてはやや頑な姿勢が感じられます。これまでのお二人はどんな生活をされてきたのか気になりました。

サキさんは３人の子供を出産。末っ子である、蝶子さんを出産して間もなく御主人をなくしています。サキさんは三人の子供を女手一つで育てあげました。それぞれを社会人として巣立たせ、蝶子さんが高校を卒業し就職すると二人の生活が続きました。それぞれに、仕事に精を出し、自分たちのことは自分たちで何でもこなしてしまいます。数年前の引っ越しの際も、引っ越し業者の利用などはせず、少しずつ自分たちで荷物を運び出し、引っ越しを完了したそうです。

これまでの生活はほとんどの事が、お二人で考えてお二人の手で事を成し遂げてきたようです。介護の手助けが必要となった今後についても、自分たちでデザインした生活をしていきたいのは当然でしょう。介護が必要だからといって急に何もかも介護サービスに頼っていこうとは思わないのが自然です。

ケアマネは、蝶子さんの意向を尊重し、この二人だけの暮らしに介護サービスが導入されたことによる何らかの変化を見ながら今後の支援体制を考えていこうと思いました。支援体制を急いで作らないということです。ケアマネの見立てでは、恐らくサキさんの認知症はこれからも進む。その時に介護サービスだけで在宅生活を支えるのは難しいと判断したのです。少しずつ、地域の方に認知症であるサキさんを理解し、サキさんと蝶子さんお二人の生活を理解し関心を向けていただけること、そのような地域の方々の助けを受けながら在宅生活の支援体制を作っていくことが、お二人の暮らしには必要だと思ったのです。

蝶子さんが二人の生活に初めて他者の介入を求めたことに対して、その背後にある葛藤も含めた思いを理解しながら関わろうと考えました。

その後、まずは蝶子さんから希望のあったディサービスの利用について事業所の選定や見学を蝶子さん、サキさん、ケアマネの三者で行いました。いよいよ第一回目のディサービス利用です。サキさんはやや緊張した様子もありましたが、自宅以外の時間を過ごすことに大きな抵抗はありませんでした。2 回ほどのサービス利用の後、蝶子さんからはディサービスの利用回数を増やしたいとの意向が示されました。実際にサキさんがディサービスへの参加ができていること、そのことにより蝶子さん自身が時間を有意義に使えたという実感を得たのでしょう。ディサービスはわずかな期間で週３回の利用という形になりました。蝶子さん以外の人との交流機会が持てるようになったことで、サキさんの表情の豊かさが増えたことや、自発語がほとんどなかった最初の頃とは違いずいぶん言葉が出るよう

になりました。しかし、その一方で歩行機能は低下していて、歩いていると、段差でつまずいたり、転んだりすることもありました。外で転び膝を骨折してしまった事がありました。受診先ではギプス固定。ところが、ギプスで固定された自分の足をどうしても受け入れることができないサキさんは､なんとかしてギプスを壊そうとします。不穏状態は極まりなくなります。仕方無くギプスを外してもらうことにしました。骨折でギプスをはずす、言いかえると治療方針に応じないということです。これでは受診先の医師も手だてはありません。あとは自宅で経過をみるしかないのです。やや時間はかかりながらも、膝の状態は改善し歩けるようになりましたが、やはり転倒リスクは大きくある歩行状態です。蝶子さんが少しでもサキさんの前から姿をみえなくすると、サキさんの不安は増して蝶子さんを探し歩きます。室内での転倒も十分あり得る状況です。四六時中目を離せない蝶子さんの疲労を気にして、ケアマネはショートステイ（短期間の宿泊サービス）を提案します。けれども蝶子さんはショートステイの利用を躊躇します。施設では介護の必要性の高いサキさんはもてあまされてしまうのではないか、という不安や、宿泊から帰宅した後、環境変化でさらに認知症状が悪化してしまうのではないか、そんな不安がありました。まだ、ディサービス利用だけで頑張って自宅で介護していきたい、と蝶子さんの一人介護は続きました。

**地域の応援者・認知症サポーター**

それにしても、毎日の介護では、週３回のディサービス利用があったとしても、圧倒的に蝶子さんが一人で介護をする時間の方が長いのです。なんとか、蝶子さんの身体的精神的負担を軽減したいものです。ここで役に立つのは、教科書に書いてあるような、認知症介護のコツや、傾聴などということではないのです。必要なのは時間。蝶子さんだけの時間です。そして、介護を一人で担いきらなくても済むように信頼できる人に頼る状況を作り出していくことが必要なのです。

これまでの、ディサービス利用の他に、地域の認知症サポーター有志による訪問ボランティアの活用を提案しました｡短時間、サキさんの元へ訪問し、蝶子さんが犬の散歩や買い物などの用事が足せるように、というのが狙いです。この地域で認知症サポーターが無償ボランティアで活動することはこれまでありませんでした。初の試みなのです。ですから、サキさんを一方的に支援する、ということではなく、サポーターさんの活動に協力していただくという側面も持ち合わせていました。蝶子さんへはその理解をしていただく必要がありました。一人でサキさんを支えるには無理があると感じ始めていた蝶子さんはサポーターさんの受け入れに協力してくれることになりました。

さっそく地域の認知症サポーター有志にボランティア協力を要請しました。初回では４名のサポーターがサキさんのサポートに入ってくれることになりました。３０分から１時間。サキさんの自宅を訪問し蝶子さんが不在の間の見守りをするのです。始めはサキさんも蝶子さんの姿が見えなくなると不安そうに探し始めましたが、程なくサポーターさんとの時間には慣れていきました。サポーターさんの顔や名前などは覚えていません。けれども毎日誰かが自宅へきて優しい笑顔で微笑みかけてくれることに、いつしかサキさんは、人が訪ねてくることを楽しみに待つようになりました。

サポーターさんが蝶子さんやサキさんの

自宅に訪問することは、サキさんにだけ変化が起こったわけではありません。毎日の介護の大変さを、わずかな時間でもサポーターさんが共有することで、蝶子さんへのねぎらいの言葉がかけられます。蝶子さんにとっても、わずかな時間、自分が介護している母親を一人で見守ってくれるサポーターさんには同じ思いを抱けるのです。サポーターさんにその時々の想いを話すことができるようになっていました。この地域は雪が多く、冬になると道幅も狭まり車を止めるスペースもほとんどなくなってしまう状況です。そんなこともあって、サポーターさんは徒歩で通える距離の方が来てくれていました。頻繁に、介護サービスの送迎車が来たり、サポーターさんの出入りがあるサキさん、蝶子さんの家の様子をお隣の方は目にしていたのでしょう。雪かきをしていた時に、隣りの若いご一家の奥さんが蝶子さんに声をかけました。「もしお母さんの調子が悪いのであれば、何かお手伝いできることがあれば声をかけてください。必要な物があれば買い物などのお手伝いもできますよ。」車を運転しない蝶子さんを気遣っての声です。「ありがとうございます。でも、声をかけるために母から目を離すことさえできないんですよ」そんな会話のやりとりがありました。その後、郵便受けに隣の奥さんから、電話番号が書かれたメモが入っていました。「何かあれば電話してください。」実際には、蝶子さんがお隣の奥さんに頼ることはありませんが、隣の方が蝶子さんとサキさんの生活状況を知ってくれているというのは大きな支えです。そしてこんな声かけがあれば何かの時には頼りやすいものです。サキさんと蝶子さんはサポーターさんに慣れてくると、その後訪問看護やショートスティのサービス利用を開始することになりました。ディサービスも一か所から二か所を利用することにしました。サキさんの表情の豊かさは一層増し、言葉がずいぶんと出るようになりました。訪れる人に笑顔で対応し、蝶子さんの姿がなくても介護者と一緒に過ごせるようになっています。決して認知症が改善された訳ではないのです。夜間の不眠が続き、蝶子さんも憔悴しきってしまうこともあります。それでも、あと、一日、あと一時間頑張れば、サービスにつながる、サポーターさんが来てくれる、そんな少し先が見えるから今なお介護が頑張れるのでしょう。今、蝶子さんは、サキさんの老人ホーム入所の手続きを終えました。これから順番が回ってサキさんが入所できるその日まで、介護サービスや地域の人の手を借りながら自宅での介護を続けていく決意を持っています。

助けを受け入れるにも力がいるのです。助けてもらうことに慣れていないと、助けられることに躊躇してしまいます。一歩一歩試しながら蝶子さんの手を離れた時間にもサキさんの笑顔があるのだということを、蝶子さん自身が理解できたことで、人の手を借りていくことが順次できていったのでしょう。そして、大きいのは、サービス事業者ではなく、地域の人の休日問わずにサポートしてくれる、優しい気持ちと時間の提供がサキさんと蝶子の生活を大きく支えているのだと思います。

サポーターさんは、認知症で発語もままならないサキさんの見守りに戸惑いを持ちながらスタートしました。何を話したら、何をしてあげたら、そんな不安もつかの間、ただただ時間を共にすること、例え言葉がなくても同じ時間を共有すること、その静かな時間が意味する人と人とのつながり。

サポーターさん自身がサキさんと時間を共にすることで、認知症の方への対応方法を具体的に学び、最初に持っていた不安は

減っていったのです。サキさんによって、サポーターさんの力も引き出されたのだと思います。

今、この地域では少しずつサポーターさんの活動が広がろうとしています。そこには、サポーターさん自身が蝶子さんやサキさんから学んだあれこれが大きな原動力となっているのです。

３・１１の大きな震災の後、福祉関係者の集まりでは、「災害を意識した地域のネットワーク作り」というような話題が出ています。防災意識や、そのような状況に対する備えは必要です。その考えは否定すべくものでもないでしょう。けれども、どことなく違和感があります。人は何かの時のため、という目的をもってつながっているのでしょうか。ありふれた日常の、ちょっとした気づかいや時にお節介、そんなやりとりが土台となって、何かあった時に地域の力が発揮されるのではないでしょうか。意識するのは、災害ではないのです。私たちの日常生活なのです。

お互い様・・・って素敵な言葉です。誰かが誰かを一方向に助けるのではない。お互いに影響し合って、お互いが支え合っている、力を引き出し合っている、そう思うのです。こんなお互い様が少しずつ広がることで、何かあった時に大きく支え合える地域の力になるのではないでしょうか。

サキさん蝶子さんを中心に地域の支え合いが広がっています。

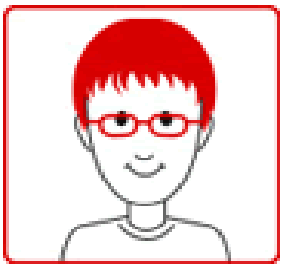
＊プライバシー保護の観点から事例は事実情報を加工しています。

# 街場の就活論

## Vol. 5

### ―新卒採用に今、何が起こっているのか―

団　遊（だん　あそぶ）



## 打倒！就活必勝法

キャリアの授業をしていて、力不足を感じるのは「相変わらずシューカツを勝ち抜く方法やその周辺事情」に学生が過反応する姿を目の当たりにすることです。たとえば今年は震災の影響や大学からの要請、経団連の申し合わせの影響で、就職サイトのオープンが 12 月に変更になりました。これまでは 10 月でしたから、２ヵ月後ろに倒れるわけです。

これに付随して起こる（であろう）変化が、周辺ではさまざま囁かれています。学生が参加できる企業説明会の数が減るだろうという話。企業の選考フローはそれでも不変だという話。インターンシップの位置づけを見直す企業も増えています。ちなみに、そのインターンシップも 1day 型と呼ばれる、学生の名簿集めを目的とした実務を伴わないものは、メディアを通じて公募できなくなりました。

学生にしてみると、シューカツは目前に控えた大イベントですから関心が高いことは理解できます。ただ、心のどこかで「そんな目先のイベント情報はどうでもいいから、もうちょっと骨のある話をしてよ」と言われることを期待する自分もいます。

例えるなら、就職サイトのオープン時期変更などロックフェスティバルの日程変更程度のことで、知ってさえいれば、大した影響はありません。フェスに間に合ったからといって、イベントを楽しめるかどうかは別問題です。

ところが学生は「ロックフェスティバルの楽しみ方」や「どのアーティストのファンになるのが得か」あるいは「休憩時間は何をすればいいか？」まで知りたがります。そして、その情報を、さも勿体ぶって意味ありげに語っている就職コンサルタントが山ほどいて、彼らの主宰する「絶対内定就職塾」が大人気講座にな

ります。

ロックフェスティバルの楽しみ方なんて、誰かに手ほどきされるものでもないだろうに……。そんなの楽しくないだろうに……。就職フェスティバルだって同じだろうと思うのですが、なかなかそうは思えないようです。

こちらがフジロックフェスティバルで、

こちらが就職フェスティバル

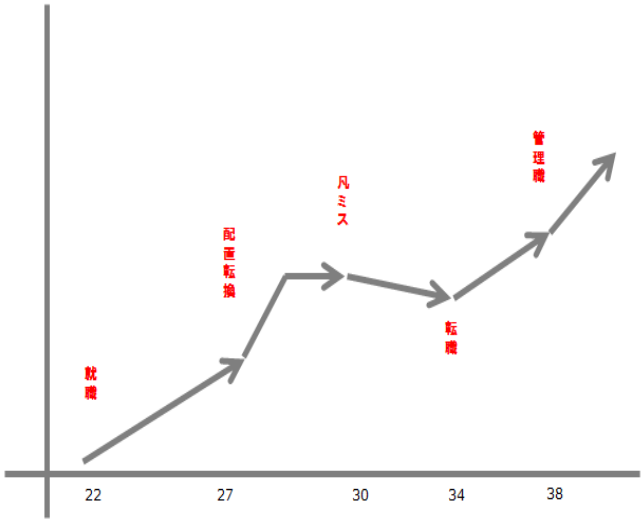
絵的にも、そう変わらないでしょ!?

## もうちょっと<br>普通に考えようよ

なんとかしてノウハウ論ではないアプローチで学生が楽しめる授業にしたいなあ……。そんな試行錯誤の中でやってきたことの一つが最近、学生に好評なのでご紹介します。それは、自己評価によるスキルチャートをもとに、その変化点で何が起こったのかを想像して話し合うという授業です。

ある日、僕は友人のMを居酒屋に呼びつけ、食事をおごりながら「Mの 37 歳までのキャリアの伸び具合をここに記してくれ」と頼みました。大学時代の友人である彼の職歴は、なんとなく知っています。ただ、そこに書いてもらったのは周知の事実ではなく、内面的に自己認識しているキャリア曲線です。隣で見ていると「そこで何があったんや！」と思わず突っ込みたくなる急激な上昇も見られ、誰に頼んでも、それなりに興味深い曲線になります。

こんな感じです




書き終えると、次にその曲線に沿って、曲がり角で何があったのかを教わります。大半は「そういうことあるな」ということですが、中には思いもよらないことで上下するケースもあります。言い換えれば、「そんなことで！」と私なら思うようなことが、彼にとっては転機になっていたりするのです。

## 気付き合いの中で<br>キャリアがスタートする

転職、昇進、ボーナス、大きな責任……、これらはある程度わかりやすい転換点です。上がるか下がるかは別として、きっかけになることは容易に想像ができます。ところが、恋愛や趣味などがこれに絡むこともあるし、より細かいことで言うと、社内での席替えで変化が起こることもあります。私はサラリーマン経験がないためイメージができませんが、上司の資質もキ

ャリア構築にかなり影響を与えるとみな口を揃えます。

そんな情報を集め、授業では、学生に曲線だけを見せ「転換点で何があったと思うか」を話し合わせます。これを繰り返させていると、学生は「何かしらの目的や目標を持たなければスキルは伸びにくいようだ」という事実に気付きます。「そんなこと当たり前」という声が聞こえてきそうですが、文系の学部生がこれを持ち合わせるケースは、学校を問わず多くありません。

余談ですが、日本でも有数のミュージカル劇団にダンサーとして所属する私の妹の最近の悩み事が「新人の動機付けをいかに作り、前向きに取り組ませるか」だというので笑ってしまいました。あれだけ方向性が示された中に集まる若手すらそうなのですから、何にも考えず偏差値に合った大学に進学した学部生に何かを求めるのは酷というのが実態です。

授業の中で、それぞれが探り合った可能性を発表してもらうと、本当に色々なアイデアが出てきます。曲線が急に下がるシーンでは「犯罪を犯し刑務所に入ったはずだ！」というアイデアが飛び出ます。

こんな？→→
アホな！

ピントがいい子は、ワークに取り組む初期から「結婚」もキャリアに大きな影響を与える転換点だと知っていますが、半数以上は、その出来事に「結婚」を思いつきません。それは、誰かがその可能性を指摘した際に、「お～（その手があったか）」という声が上がることからわかります。大事なことは、正解を当てることではなく、可能性に思いを巡らせておくこと。その可能性は自分にも起こるかもしれないということを知っておくことです。

## 心構えが
## 結果をつくる

「他人の人生に起こる悲劇は、自分には起こらない」。文面だけ見ると「そんなアホな」と突っ込みたくなりますが、キャリアにおいて大半の学生はそう考えています。だから実際に人から尋ねた 32 歳転落人生の曲線を見せると、学生は「ここをこうすればよかった」と批評家に早変わりするものの、それが自分に起こるかもしれないとは考えません。だから私は最後に「この男性も、大学を卒業するときにはこうなるとは露にも思っていなかったはずだ」と付け加えます。さらに「この男性の大学生時代と、今のキミたちの大学生時代に、何か差があるだろうか？」と言い添えます。

果たしてキャリアとは何だろう？　良いキャリアが導く豊かな人生とは何だろう？　このネタに学生が興味を示し始めるのは「ようやくこの後」といったところです。

団遊（だん・あそぶ）
アソブロック株式会社代表、有現会社 ea 代表、ホンブロック発行人、立命館アジア太平洋大学非常勤教師（キャリア教育）等、“環境に変化と刺激を起こすモノづくり・コトづくり”をモットーに幅広くプロデュース活動をしている。最近は地域活性の種作りに注力中。
東京を会場に「団士郎家族理解ワークショップ」も隔月開催中（偶数月第二土曜日）。
http://danasobu.com

# 心理療法が始まるまで

## (5)

## ーコミュニティと病院でー

藤 信子

3月11日の東日本大震災から2ヶ月間の報道や所属学会や知人などからの情報を見ると、災害に際しての支援を、非被災地の行政や団体が組織的に行っているという感じを持つ。被災された方々は、支援が遅い、足りないと思われると思うが、阪神・淡路大震災、中越地震とその後の経験から、そのような体制が作られているということを実感する。

阪神･淡路大震災のときからメンタル･ヘルスの領域では、「心的外傷性ストレス（以下PTSD とする)」という概念が広まったと言えるだろう。PTSD 概念の特徴として、災害が起きた時にまず、PTSD の予防をまず考えようというのが、大きなポイントだと私は思う。生命を脅かされるような大きなストレスに遭った時、身体的、心理的に不調が起きるのは普通のことだから、その経験を周りの人を話すことで分かち合ってみることを勧める。その不調が1ヶ月以上続くようなら、受診を勧める、という方針で阪神・淡路大震災の時は、24 時間電話相談や避難所訪問を実施した。だから災害直後の「こころのケア」という予防という観点が出てきたのが、その頃は、防災とは、国土や財産を守ることはあっても、人を守るというのが入っていなかったところに、精神的な病気の予防ということが入ったことは、災害への対応の進歩（こういうことば自体が、今回の原発事故のあとではむなしい感じがする）だと思っていた。それにストレスで精神的な病気になる、ということをや

っと日本の精神医療で多くの人が認めることになるのだと思うと、精神医療も変わるのではないかと期待を抱いた面もある。前号に書いたように、精神病は脳の病気だから対人関係やその他のストレスと関係なく、自生的に病気が起こる、と考えているのではないかという印象を、私が持ってしまう精神医療従事者を見かけることが多かったから、これからは、酷いストレスによって精神的な病気が起こるということを経験したので、もっと患者さんに起きたことに対して、関心を持って話を聞くようになるのではないか、とかすかな期待を感じたのである。

その後地下鉄サリン事件が起き、またabuseの問題などから、トラウマということばを目にすることが多くなった。トラウマに関する治療が多く語られるようになったけれど、精神病に関しては私の期待するようにはなっていない。そして今回の災害である。被災地のこころのケアに出かけた精神医療チームの体験を聞いて考えた。話を聞いてくれることを待っていたように話す人もいれば、こころのケアというと「いらない」と言われる場合もあるという。こころのケアというのは、阪神・淡路大震災の時は、それだけでいくと「私は病気ではないから」と断られることがあるので、炊き出しや健康相談のイベントの中で、話せる雰囲気づくりをしたり、いろんな工夫をした。そういう中で、こころのケアという考えが定着していき、災害が発生すると、心のケアについての要請があるようになったのだろう、と思う。しかし必ずしもどこにでも定着しているわけではないのだろうか。地域の事情などもあるのか、また訪れる側の準備や技術の問題だろうか。

そう考えながら、私が釈然としないことについて考えてみた。PTSDという観点から見られるようになった事態は、患者さんの受けたストレスと精神病の関係を見るようにはなっていないように感じる。心理療法をしている側からすると、もう少し患者さんの体験している状況や気持を、精神科医は聞いてもよいのではないだろうか、と首を傾げることが時々ある。診断基準（DSMやICD）に沿って考えるということが、その人の日常の具体的な事実を聞くことをかえってしなくさせているような気もする。辛い思いがどのような時に、なぜ起きるのかということへの関心は医学にはないのだろうか。PTSDやトラウマに関しても、診断や有効な治療法に関する知見は重ねられているようだ。しかし、やはり精神病に対しての自生的に起こるような、という考えはなかなか変わらないようだ。何かこのあたりに、私の考え方がずれている事態があるのかも知れない。医学は診断を厳密に行い、治療法を見つけることで、なんとなく精神病がストレスと関連している、などというような世間話には関係ない、と言われるかもしれない。PTSDの治療に携わっている人から、科学的に進めてきているのに、なんと

いう情緒的なことをいうのだろう、と思われるかも知れない。ただ私は人が病気について自分で考えたり、他の人のことも考えてみて、十分ではないにせよ、気持をわかるような感じを持つことは、自分も他の人についても病気なった場合も大事だと思う。「わからない病気」と遠ざけて差別につながる傾向を作ったりするより、そのような状況なら病気になるだろうと思う人が増えるほうが、生きやすい社会なのではないかと思う。

この震災に関しては、PTSD についての治療法で何が有効か、などマスメディアでもウェブ上でもいくつかの情報が流れた。確かに研究が進み、エビデンスに基づくと有効だと言えるのはこの治療法だと、現時点ではいうことになるのかも知れない。しかし話を聞き、対応するのは人である。そのケアをする人には十分安定した気持で、被災者に向きあえる情報が一番大事なのではないだろうか。相手の話を聞くこと、理解したいという気持を伝えること、その関係をどのように作れるのかを支援したいと私は思っている。

（注：4 号の記事に統合失調症は「100 人に 8 人」としていますが、これは「1000 人に 8 人」の誤りです。訂正します。）

# 誌上ひとりワークショップ

# （前編）

## ～家族援助は街のアパレル～

岡田　隆介

広島市子ども療育センター精神科

私は、聴衆の反応を取り入れたり織り込んだりしながら話すのが好きです。ワークショップも基本的に変わらないと思うのですが、こっちは大の苦手です。おそらく、参加者がディスカッションをしている時間帯に自分のリズムが途切れてしまうせいでしょう。

そんなわけで、今回、誌上で一人ワークショップをしてみようと思い立ちました。ケース提出も進行も講師も参加者も、すべてひとりでやります。ワークショップというよりはアンテナショップでしょうか。では、早速始めたいと思います。

### 1．仕立て屋的家族援助

「はじめに、わたしが家族援助をどのように考えているかを説明しておきたいと思います。本日のワークはそれに基づいたものになりますので、ちょっと我慢して聞いてください。

解決に向けて効果的な手立てを考えると言う意味において、身体的な援助も心の援助も基本的に同じです。それまでの解決策では期待した成果が得られなかったわけで、援助は新たな解決策を考えるという方向にすすみます。

とはいえ、それまでの解決策はその人なりの問題の理解・仮説を根拠に組み立てられていますから、そう簡単に変えられるものではありません。さらにこの仮説は、そのひとなりの人生観・信念によって支えられています。これは生きる枠組みそのものであって、各論に対する総論、家族の憲法みたいなものです。そんなものまで家族援助に含まれるのだろうかと考えると、とても気（荷）が重くなってしまいます。さて、そんな家族援助とかけて街のアパレル・仕立て屋と説きます。そのこころは、以下の通りです。

まず憲法、つまり生きる枠組みですが、これは援助対象の家族が肌身離さず付けていて、他人に見せびらかしたりしないものです。つまり、下着（アンダーウェア）です。仕立て屋は、下着にまで口を出しません。個人的なものですから。

その上に着るシャツ（ブラウス）、これが問題の理解・仮説です。仕立て屋からすると、全体を損なわせているのはこのシャツです。それこそが、仕立て屋が腕を振るう場所になります。ですが、家族はシャツの上にいろいろ着ていて、それらを脱いでもらわないとうまく仕立てられません。

一番上にまとっているのは、問題にまつわる不安のコートです。援助対象の家族は例外なくコートを着ています。コートの裏地は怒りですが、なかには裏表が反対の方もいます。表が怒りという派手目のコートです。以前は児童相談所でしかみることはなかったのですが、最近はけっこう流行しているようです。

大方の仕立て屋は、共感的に接しながらこのコートを脱がせます。ここでうっかり裏地を見逃すと、怒りに火がつくこともあります。怒りだけを扱うのは至難の業で、これはあくまで不安と一体にして受け止めるのがいいでしょう。

仕立て屋の腕に信頼を寄せると、家族はコートを脱ぎます。ここでジャケットの登場です。ジャケットは、問題を解決するために重ねてきた努力です。実際似合っていないにもかかわらず、ずっと同じものを着続けています。それは、先述のようにジャケット（解決努力）はシャツ（仮説）と一体だからです。

ジャケットを脱いでもらうには、この解決努力に敬意を表しねぎらわねばなりません。成果を得られなかったにせよ、家族が良かれと思ってやってきた努力なのですから。虐待だって、非行だって、不登校だって、素性は解決努力です。いっこうに楽にならなくても、他の策には目がいかず、問題が長引いたり大きくなったりしています。それを変えようと提案する以上、なにはともあれしっかりねぎらいましょう。その上で代替案を用意します。

ジャケットを脱ぐと、やっとシャツが露わになります。ここで、家族なりの問題の理解・仮説が語られるのです。「そもそも」と振り返り「～が問題だ」と訴えるストーリーが深ければ深いほど、それを支える人生観も一緒に伝わってきます。ここが、大切なところです。

そして、シャツを見立てます。基本は、いま着用しているシャツを脱いでもらって新しいものをすすめるか、そのシャツを生かす方向でいくかです。ただ、これは仕立て屋が勝手に決めるのではありません。家族との間合いで、自然に決まっていくものです。

前者では、替わりの説明を用意します。“専門家”として「そうではなくて、問題は～だと考えられます。ですから、～をやってみませんか」と具体的に示すのです。家族の問題理解を置き換えるのですから、当然、場の緊張が高まります。

その際、替わりの説明が相手の腑に落ちなければまったく意味がありません。そのためには、それ以前にていねいに不安・怒りを受け止め、しっかり解決努力をねぎらっておかねばなりません。またセットである新・解決策が具体的で、実行可能と思ってもらえることも大切です。

提案されたのが魅力的なシャツなら、家族はためらうことなく自分のシャツを脱いでそれを身につけるでしょう。魅力的とは、①原因を考えないでいい（自分を責めない）、②予想していなかった新鮮さ（新しい視点）、③実行可能に思えるプランがある、ということです　つまり、実現可能な明日をデザインしたシャツ、ということになります。

後者は、家族の仮説を否定しません。だからといって、受け入れるわけでもありません。全体としては賛成できないけど、部分的に生かせるところはたくさんあるといったリフォーム的なスタンスです。

「いま、ここで」くりひろげられている仮説と解決努力をひっくるめて、比較的うまくいってるところを探します。結果がでていない解決努力にも、いつもとの些細な「違い」を見つけます。無くても、創造的に探します。

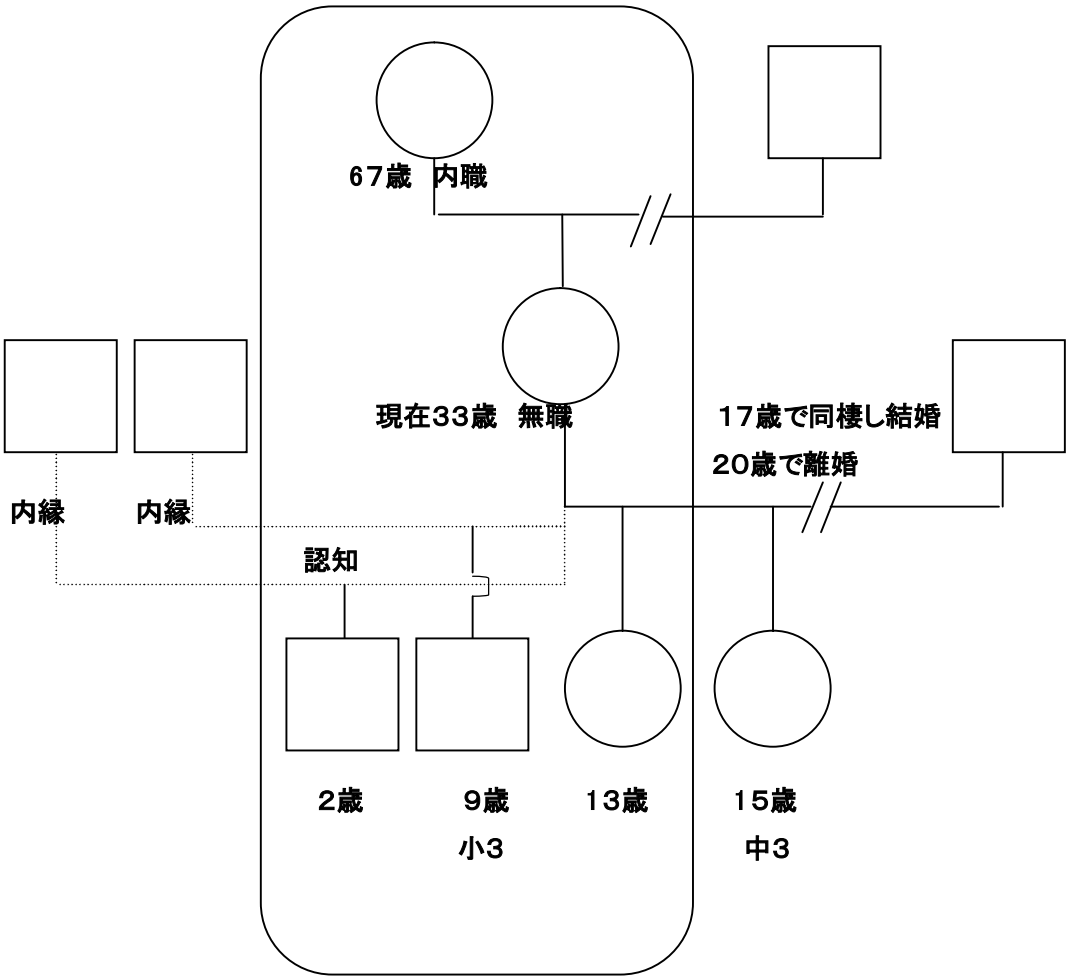
そして「ここのところは実によかった。是非、続けてほしい」とか、「どうやってそんなことを思いついたのか、教えてほしい」と解決志向的に接します。前者が明日を描いて見せる形だとすると、こちらは現在進行中のものに教わる形といえるかもしれません。

説明はこのくらいにして、いまから演習事例をもとに、不安・怒り・解決努力を探りながら家族の仮説にたどりつくプロセスを一緒に経験しましょう。

それでは４人ひと組になって自己紹介をし、書記と司会を選んでください。決まったら、班で家族図を見ながら、そこにある不自然さ，無理を話し合います。司会担当の方は発表者を選んでおいてください。書記の人は記録をお願いします」。

## 2. 家族を読む

演習事例の家族関係図（図1）




「では、演習事例のジェノグラムを見てください（図1）。ご覧のように、ごく限られた情報しかありません。そこから自由にこの家族をイメージしてみてください。どんな家族だろう、どんな問題を抱えていそうか、と想像します。わたしは、この手順を教えてくれた人たちの名前をとって、勝手に「団・早樫式」と呼んでおります。まとめるとこんな感じになります。

① 家族関係図をながめ、ここにある情報だけで、家族のライフスタイル（仕事・配偶者・住居等の選択の流儀、子どもの養育と生活維持の仕方、人との繋がり方等）を想像する。
② 不調和や無理の匂いがあるなら、どこか？
③ こうした作業を通して家族への興味が深まり、尋ねたいことや確かめたいことが明確になっていく。

誰でも行動するにあたり、いくつかの候補から選択しますね。ここに登場する母親だって、結婚や離婚の際に、あるいは子どもを誰が育てるかというときに、ある選択をしています。人生の節目における行動選択の仕方は、その人の人生観と密接につながっているはずです。そういった行動選択の流儀・くせも、ジェノグラムから見てくるでしょう。

*（各班の家族イメージの報告を聞く）*

「ずいぶんいろんな意見がでました。なかには、知ってるの？みたいなのもありましたですが、当たっているかどうかはまったく関係がありません。少ない情報だからこそ見えてくるものがある、情報に縛られないからこそ気がつくとこ

ろがある、そういうことを実感してもらいたいわけです。

さらに、ここまでの作業で、この家族にいい意味での好奇心、関心が持てたと思います。誰かが提出した知らないケースから、もう自分の関わっている事例になった気がしませんか。ここは、このやり方のすごいところです。

そして、もっともっと聞いてみたいことが生まれたと思います。そういう“聞いてみたいこと”も大事にしてほしいと思います。

では、みなさんが報告してくださったものは、ホワイトボードにまとめました。こちらのパーポイントにまとめたのは、わたしの感じたことです。大部分はみなさんの意見とかぶっていますね。

1）母は、男性との距離感（親密になり方，別れ方，別れた後の関係）や子どもとの距離感（細やかな愛情表現はしない、完全なる拒否もしない）が独特な人だろう。原型は、母と祖母との関係ではないか。
2）男と知り合い、子どもをつくって別れ、引き取って祖母にゆだねるという一連の行動選択を支える家族システムがあると思う。
3）15歳女児が相談の対象で、暗黙の家族ルールに反発して家を飛び出したのだろうが、力関係だけでなく得体の知れない引力があって苦しんでいるだろう。
4）父の違う子どもたち同士、とりわけ同性間のかっとうは大きいだろう。
5）男性からすると、明確な拒否も親密さもない三世代家族の結びつきが理解しがたいだろう。
6）生活保護と母親のウラの稼ぎで支えられている母親優位の家族ではないか。
7）不調和な家族構成のしわ寄せは、長女の異性交遊と家出徘徊、次女の弟たちや学校での乱暴行為として表れているだろう。

みなさんから、はやくケースの詳細を聴きたいという雰囲気が伝わってきます。これも、この方式のすごいところだと思います。では、演習事例の詳細を説明します」。

## 3. こんな家族だった

「主役は、シンナーを28歳の男性Aの部屋で二人で吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女児です。Aとは結婚の約束をしているといいます。本児はやせていておとなしく、影が薄い感じ。頭痛や不眠を訴えるも幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小 1 のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。妹を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通です。

翌年、母は二番目の男性と付き合うようになり、毎日足繁く通います。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしました。本児は、この男性が父親だと思っていたようです。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはありません。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったようです。やがて二番目の男性との間に男児が生まれるも認知してもらえず、男とは疎遠になりました。母は異父弟を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となり、小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。母はあいかわらずふらふらと家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が

住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。母はその男性とは同居せず，近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする生活で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを極端に避け、母親が不在の夜には夜遅くまで徘徊しました。家出・リストカット・怠学等により、神奈川県の児童相談所に一時保護されこともあります。しかし、児童相談所ではほとんど胸の内を語っていません。このときは、母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて第4子（男児）を産みましたが、男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわらず母はふらふらと落ち着かず、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態です。なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっていました。あるとき、本児が男性と別れてほしいとんだところ、『そんなことを言うならあんたの面倒見ない』と言われ諦めたとのことです。

本児は弟たちにきつくあたることはしませんが、面倒を見ることもほとんどありません。それに対し次女は、言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたりますが、面倒はよくみます。次女には補導歴はありません。本児と次女の関係は悪く、いつもいがみあっています。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり，Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAとのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児は一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張ってとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死を努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとしつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後初めて、本児は三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました」。

## 4．家族を知る（不安と怒り）

「演習事例ではありますが、質問があればどうぞ」。

*（質疑応答の後）*

「ここからは、お手元にお配りしてある私版フォーマットに従って家族を知り、援助をすすめていきます。まずコートですね、家族の抱えている不安と怒りを知ります。それらが整理されて頭に入っていると、援助対象者のちょっとした心の動きとか言葉からそれを感じることができます。

次いでジャケットです。家族の解決努力をきちんとねぎらうためには欠かせません。そしてシャツです。家族の仮説を知ったうえで、自分たちの仮説を考えます。もしかしたら、アンダーウェアについてもちょこっと話し合うかも知れません。

ちょうどきりがいいし、皆さんお疲れのようですのでひと休みしましょうか。では、そうですね、ゆっくりコーヒーブレイクをしていただいて、3ヵ月後に続きをしたいと思います。やっと岡田版というところで終了というのはいかにも怪しい感じがしますが、よろしければ今秋、また誌上でお会いしましょう」。　　（中編に続く）

# 第5回「八日目の蝉」

－生い立ちを受け入れる旅－

**川﨑　二三彦**

**今年は何度か「MET ライブビューイング」に出かけた。ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場(MET)での最新オペラ公演を、年間 10 本あまり上映する企画だ。幕間の休憩もちゃんとある上、その時間帯に客席や舞台裏の様子を映したり、指揮者や演出家、出演者等にインタビューするサービスもあって、時には珍しい話が飛び出すこともある。この前見た「オリー伯爵」のタイトルロール、フローレスは「いやあ、さっき妻が出産したんです。昨日から全然寝てません。ベビーの顔見てから楽屋に飛び込んだんです」と言うのでびっくり。料金は 3,500 円、映画にしてはとやや高いが、オペラの疑似体験に裏方ウォッチングを足したような楽しさはなかなか得難いものだ。などと言う間本編開始のベルが鳴る……。**

---

この映画、ほんまは観る気なかったんよね。予告編で「誘拐犯に育てられたとかって、特殊すぎて」なんて台詞を聞かされるたび、「これって集客用のあざとい宣伝じゃないの？」と勘ぐってたから。

確かに「八日目の蝉」とはよくも閃いたもんや。蝉は羽化して 1 週間で死んでしまう。それが八日目も生きてたら、他(ほか)の蝉が見ない光景を見るって意味らしいけど、心憎いタイトルですわな。けど、「父の愛人だった誘拐犯に、これ以上ないほど心優しく育てられる」なんて、八日ぐらいじゃとても起こらん。ホントは「十日目の蝉」ぐらいがいいとこじゃないやろか。どだい設定に無理があるんですよ。

とまあ愚図愚図言いつつ……、

＊

「お母さん、お星さまの歌をうたって」

「いいわよ！」

犯人が逮捕され、4 歳になった娘をようやく我が手に取り返した母なら、精一杯「キラキラ星」とか歌いますよ、そりゃあ。ところがこっちは早くもため息。次の展開が読めますからね。

「それじゃないの！」

完ペキ想定内でしょ。ご丁寧に後で謎解きもしてくれたけど、娘が望んだのは犯人、すなわち養母がよく歌った「見上げてごらん夜の星を」だった。

そやから母の感情が決壊するのも必然やろね。大暴れですわ。父が必死で止めるけど、もとはと言えばこの人の不倫が発端なんやから収まるものも収まらへん。そこへだめ押し。

「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」

泣きじゃくりながら、ただただ謝罪の言葉を繰り返す娘。

「わかった、もうわかったから次のシーンへ進もうよ」

こっちは耐えかねて先を急ぎたいのにこの台詞、永遠に続くかのように感じられましたなあ。ふう、思い出すのも息苦しいけど、それはまあ、ある意味すごい現実感があったから。児童虐待なんかで

も、家族誰もが行き場をなくして追い詰められることって、なんぼでももあるわけやからね。子どもの必死の形相に、母親がますます激高するんはようわかります。それにしても、映画館に来てまでこんなシーンを見なくちゃならんのかねえ……。

＊

ところでこの作品、楽しいとこもありますな。追われる身の犯人が子どもと一緒に匿まわれる現代風駆け込み寺「エンジェルホーム」のエピソードですわ。余貴美子演じるホーム代表の一挙手一投足に思わず吹き出したけど、いかがわしくて現実離れしているところが、かえってこの映画にはふさわしいんやろね。こういう場面があると、ホント 2 時間半の上映時間もあっという間。まあ、うまいこと作ってるんでしょう。

それに、突然現れ「事件のことを本にしたい」と無遠慮に持ちかけるルポライターも、なかなかよくできていましたな。本作のテーマの一つは、“特殊すぎ”る生い立ちをいかにして受け入れるんか、ということなんやろと思うけど、もしもこんなことが実際にあったら、大流行(おおはや)りの心のケアなんかを標榜しつつ、したり顔で出てくる専門家が必ずいるはずや。ところが彼女（小池栄子扮するルポライターのことです）は真逆(まぎやく)。突然待ち伏せして声をかけ、自分本意の関心で突っ走り、アパートに入り込んでは勝手に冷蔵庫を開けてムシャムシャ食べ始める。でもまあ、観客を誘(いざな)い物語を進めていくには、多分こういう人物が必要なんやろし、誘拐犯に育てられた主人公恵理菜（井上真央）が、自身が育った土地と自らの生い立ちそのものを旅するためには、きっとこんな役回りの人間がいるんやね。あっ、これって現実でも同じかな？

＊

要するに本作は、「誘拐したのは父の愛人だから…」とか「誘拐犯に育てられた人間は…」なんぞという興味で覗き見たってあかんのです。そんな不自然さを横に置いてああやこうやと理屈をこねる者(もん)もいるみたいやけど、そんな話には乗れまへんなあ。

だってそうやろ。観客はラストシーンで恵理菜が下した決断に救いを感じると思うけど、そんな思いは何も、特殊な人生を歩んだ彼女だけに起こることじゃないんやから。

とはいえ、やはり奇をてらった、売らんがためのあざとい小説なんや、原作は。

「こんな本、絶対買わん」

と呟いてふと鞄を開けてみたら、アレ、いつの間にか文庫本が…。

鑑賞データ：2011//05/11 横浜ブルク 13

＊公式 HP　http://www.youkame.com/index.html

＊Twitter への投稿　http://coco.to/movie/8793

# 子どもと家族と学校と

⑤

# 『姉 13 歳と弟 3 歳のきょうだい』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

◇

## ひきつけられる情報

さまざまな家族に出会って面接をしていると、なんとなく気にかかる話題や珍しいなぁとひきつけられる情報があったりする。

たとえば、年齢差もそのひとつだ。

年齢の離れている親子、夫婦、きょうだいなど、年齢差に注目することで、家族のことをより理解できることがある。

そのことばかりに注目するわけではないが、ジェノグラムを作成してみると、この家族は日々どんなドラマがあるのかなと、いろいろ想像して面接をする。

時には、そのひきつけられた情報が、面接回数を重ねていく中で、大きな意味を持つことがある。

◇

## 父、母、姉、弟

ユリエは私立中学の一年生。長期欠席状態になり、家族カウンセリングにやってきた。

父は自営業。母はパートタイムで働いていた。

母・父・ユリエの順番で椅子に腰かける。母と娘は、父を挟んで、離れて座り、セラピストは家族の正面に座っている

ユリエは入室してからずっと不機嫌だ。喜んでカウンセリング来る子どもはいないが、それにしても目つきは鋭く、荒々しいしぐさが気になった。

それぞれのあいさつのあとで、

「もうひとり弟がいますので、四人家族です」

と、母が説明した。

もう一人の家族、弟は 3 歳。ユリエが 13 歳なので、10 歳離れていることになる。保育所に行っている弟は、面接当日は、祖母に預けて、カウンセリングには三人でやってきた。

母と離れて座っているユリエは、高い鼻がお母さんにそっくり、だれがみてもすぐに親子だとわかった。

セラピストが話しかけるとすんなり応えるが、母がセラピストにユリエの家での様子を話していると、その発言内容によっては、何度か母をにらんでいることがあった。

家族の話をまとめると、これまでのユリエの事情はこんな感じだ。

受験をして、希望の私立中学に入学した

ものの、長期欠席になった。特に目立った理由があったわけではない。最近、外に出かけることもなくずっと家にいると、イライラがたまるようで、学校をやめると大声で叫び、弟にあたりちらして、蹴ることもある。

母は、不登校のユリエのことだけでなく、弟への影響も心配していた。

◇

## 初孫だったユリエ

ユリエは、両親が働いていることもあって、近くに住む祖父母から大切にされてきたが、弟が生まれてからは、みなの関心は、ごく自然に弟にうつっていった。『ケンちゃん』とケンタのことをみんなが呼び、愛想の良いケンタは、可愛がられていた。

そのころから、「弟ばっかり」とユリエは言うようになっていった。

初孫だったユリエにとって弟ができてみんながちやほやする、だからこの子は、問題を抱えてしまった、これが原因でしょうか、と母が深刻に話す。

たしかに、十三歳と三歳は年齢の差があるので、弟のケンタが生まれてからの生活は、家族にとって大きな変化もたらし、まだそのさなかにあるのかもしれない。両親も小さな子どもと思春期の子どもを同時に育てる中で、苦労も多かっただろう。これが全ての原因だと思えないが、ライフステージの変化による影響はこの家族の課題の一つと考えられる。

ユリエは、口をとがらして話す。

「弟が生まれてからは、ケンタのいうことばかりみんなきいて、ケンタには優しい声で話しかけるのに、私には、お姉ちゃんだから我慢しなさいってお母さんはいう。不公平！」

母は、

「ユリエは、初孫だったからみんながうれしくて、甘やかして育てたので、ケンタが生まれて、お姉ちゃんになったのだから、これからは、しっかりさせなくてはと思っていました。なので、多くの用事をいいつけていたのかもしれません」

年齢が離れて弟や妹が誕生すると、きょうだいの反応はまちまちで、極端に世話を焼きたがり、母きどりの場合もあれば、まったくかかわりたくない場合もある、ユリエは、ケンタにたいしてお姉さんのようなかかわりはあまりしなかったようだ。

一方、ケンタは姉にあまりなついていなかった。お姉ちゃんのことを怖がり、その様子がかえってユリエを刺激し、ケンタに「この子は可愛くない！」とあたっていた。

不登校状態になったユリエの家族は、これまでのことをふりかえり、何が良くなかったのか、何が問題なのかを家族なりに話している。なんとかしたいと取り組んでいる姿勢がとても伝わってきた。

そんな中で、父の考えはこうだ。

両親とも忙しくしている時に限って、ユリエの機嫌が悪いようだという。季節によっては、父は夜中まで仕事におわれることもあり、そんな時に母は、弟が病気で熱を出したりするとかかりっきりになっていた。どうしても弟中心の生活になっていった。

不器用なところの多いユリエは、ものを出しっぱなしにしたり、壊したりして、母によく叱られた。だまって祖母の家に出かけるというか逃げ込むことが多かった。祖母は、ユリエの気持ちを受け入れていて、よく話をきき、彼女をささえていた。

「おばあちゃんのところに行って、家での不満をしゃべっているようです」

どうも母はそれも気に食わないようだった。

家族のそれぞれが精いっぱいのことをやっているのが、理解できたし、それぞれの不満もわかってきた。

◇

## 「ユリエの家出？」

父からオフィスに電話が入る。

「娘がいなくなりました、もしかしてそちらに連絡はありませんでしたか？」

父があわてている。

「おばあちゃんのところにも行ってないのですか」

と聞き返すが行方がわからない。

「もしも連絡がありましたら、ご自宅に電話いれますね」

父はあちこち探し回っていた。

母は、心配しているというよりも、どうしてこの子はこんなに人に迷惑をかけるのか、わがままなのかと、腹だたしい思いでいっぱいになっていた。

その日、夜遅くになって、父から連絡があった。近くのお店にいるところを父が探し出した。ユリエはコンビニや近所のスーパー、駅前のショッピングモールで過ごしていたことがわかった。

◇

## 怒鳴らないで、話し合いをする

父は、捜している最中に、もしも見つかったときには、怒鳴ることはしないで、ユリエの話をきこうと母に、提案していた。

無事に見つかって、家にもどってきたけれど、母は、気持ちがおさまらず、

「なんで人に迷惑ばかりかけるのか」

ときつく、ユリエに接した。

ユリエは母をにらみつけている。

一方的に話し続ける母は、なかなか落ち着けない。いかに心配していたかをユリエに話すが、話せば話すほどヒートアップしていった。

父が、会話に入り、三人で話をしようと語りかけた。

◇

## 10 歳までひとりっ子

ユリエがいうには、自分だけ叱られて、ケンタは甘やかされ、母親がだんだんきつくなっていると思っていた。

確かにユリエは、同級生と比べても、かたづけはできないし、いつもプリントをなくして、常にさがしものをしている状態だった。しっかりしているとは感じられず、無駄なく行動する母からみると

だらしなさが許せなかった。そのために何かと叱られていた。

「お姉さんでしょとかいわれても、なりたくてお姉さんになったんじゃない！無理！ひとりっ子が長かったのやから、仕方がないってお祖母ちゃんが言ってた！」

その時、母は

「一人っ子だったと改めて思い出しました。良く考えると、十歳までひとりっこだったのですね。ハッとしました。」

そのときの様子を神妙に話す。

ユリエをお姉さんらしく、しっかりさせることばかり考えていたけれど、全然それはユリエには伝わらず、かえって苦手意識を感じさせていたのかもしれない。

◇

## ひとりっ子を二人育てる

父は、母の態度に対して、

「やっぱり、上には厳しくして、下には甘いよだから、ユリエのいうこと、僕はわかるよ、相当怒っていると思う」

ユリエとケンタ、一人っ子を二回育てていると思うと、良いのかもしれない、少し異なった見方でユリエに接してみようと母が気付いた。

母と娘はいつもお互いを責めていたが、本当は、お母さんといっしょにおしゃべりするのが一番楽しいというユリエ。似たもの同士だからこそぶつかり合うのかもしれない。いがみあっているようだが、カウンセリングの帰り道に前回は、ドーナツ屋に行った。

いつも弟が一緒だと、好きな場所に行けないからちょっとうれしかったという。

ユリエの気持ちが少しずつほぐれてきている。

◇

## 学校よりもまずは塾？

学校についての話をしていくと、新学期にもう一度登校することができるようにと両親は考えていた。が、ユリエは、再登校について具体的に考えられる余裕はまだなかった。ただ、勉強が必要であることはよくわかっていた。

父から、小学生のときに通っていた塾の先生に勉強を見てもらおうという話になる。するとあまりユリエは嫌な顔はしなかった。

変化の兆しが見えてきた。塾に通う話が進みそうだ。

ユリエの通う学校は、熱心な進学校のため、いろいろと息がつまることがあるかもしれないが、それよりも、家族内の息苦しさを和らげることがポイントのようだ。

幸い、在籍している中学は、長期欠席になったとしても、退学勧告などはなく、本人の意思を十分尊重してくれることがわかり、両親の焦りは減っていった。

一人っ子を二人育てる方式で、しばらく両親は、やってみることになった。

# 蟷螂の斧

（とうろうのおの）

## 社会システム変化への介入　part　1

### 1990年 京都児童相談所 内外事情　第五回

団　士郎

仕事場D･A･N／立命館大学大学院

現場を離れた児童相談所の元実力者の話す中味が、二、三年で急速に古くさくなっていって･･･と聞かされた。一般論として「私の若い頃は・・・」とか、「私がいた頃の組織では・・・」というのが、懐古自慢話になりがちなのは分かっているはずのことだ。自制も利くはずのテーマだ。しかしそれでも・・・なのだと改めて、過去の人間が今を語ることの危うさを思う。私がここに書いているものはそうではないと強弁したところで、誰かがそう読めると言ったらそうなる運命にある。ＯＢに情報は入って来にくくなるし、直接責任もなくなった仕事についてあれこれ言うのは、あまり勝算のある業ではない。それを承知で、だからこそ書き始めた連載である。

「いくら、自分が熱意を込めて関わった仕事でも、時と共に変化してゆくのだから･･･」、こういう言い方をしてしまえば話は簡単である。「今のことは今の人が考えて、取り組んだらいいことで、老兵は消え去るのみ」、こんな態度が潔いことだと語る言い回しがある。しかし、こういう言葉の背後にある冷たさには用心が必要だ。では、どうすれば懐古趣味にならないで、現在と互角に話し合えるのだろう。

それは結局、テーマ（哲学、理念、原則）なのだと思う。その時々の現象ではなく、底流にある原理のようなものが反映されているかどうかが分岐点ではないかと思う。それが様々な具体事象の中に強く反映されることではじめて、風化、老化を押しとどめ、普遍に至ることができるのではないかと思う。

児童相談所を離れてから五年あまり、知的障害者更生相談所にいた。そこで取り組んだのは、知的障害への取り組みでも、療育手帳判定制度の見直しでもなかった。知的障害者自身と共に暮らす家族の抱える課題への援助だった。まだ、そんな視点から知的障害者行政に取り組む体勢は少なかった時代だったが、テーマとしてははっきりと成立していた。

児童相談所の仕事とは違って、知的障害一点集中だったが、その人を取り巻く家族が抱える課題は、児童相談所で関わった家族のそれとさほど違いはなかった。そしてこの発想は後に、公務員職を離れ、児童福祉、障害者福祉の枠組みを離れても、引き続き「家族」はテーマの中心であり続けることになった。

今、全国十三カ所で継続開催している家族理解ワークショップの参加者は、母子保健の保健師、発達障害に関わる幼児教育現場職員、義務教育の中の教師達、高校、大学の教員。カップルや離婚調停に携わる人や弁護士。高齢者介護の現場と社会システム作りに奔走する人々。小児医療従事者、看護職、助産師、精神障害者の地域生活支援に関わる人など、多岐にわたっている。その理由は当然で、だれも家族なしには存在できなかったからである。家族焦点の仕事は限りなく普遍性を持っていた。

# １９９０年５月

**5/1　TUE　今月 28 日に京都府教育総合センターで開かれる教育相談講座・課題別の講師として話すことに関する打ち合わせにＫ研究主事来所。午後は児童福祉司三人と受付相談員といっしょに、業務統計について協議。夜、出版の企画（結果的にミネルヴァ書房「家族の居心地シリーズ」三部作になったもの）について、第二回目の話し合い。川崎君、柴田君、川畑君、早樫君と私。いろいろ出て、少し形らしきものが見える。**

他所から依頼される仕事が増えてきていた。当然、業務に対する評判や、結果を出している事への外部からの評価なのだが、私の所属する組織はこういう事にほとんど関心がなかった。他府県への出張が目に付くと、牽制されるくらいだった。もっともこの京都府教委の研修依頼は、身内にタダで使える職員がいるからと、渡りに船の感じも否定できなかった。

自分の職場や仕事をおろそかにしていた気は全くない。それどころか、この時期に働いていた人たちみんなに、その人に合わせたエールが送れていたと思っている。その仲間もみんな定年退職を迎えた。部下であった人たちも京都府には少なくなった。

公務員組織の人物評価に関して、昔から持論は変わらない。何も努力しない人間に給料をだらだら支払うことを、納税者が同意するわけがない。何かする人間を牽制するより、何も新しいことをしない人間にハッパをかけろ！

組織に愛着の持てる構成員からタレントが輩出するのは素晴らしいことだ。その人達と、きちんとルーティンワークをこなす人がチームワークできたら、きっと良いゲームができる。

ただ、こういう理屈も、私だから放置されていたところがあったようだ。私の退職後には、同じ事をしていた元同僚は処分を受けた。私にはノーペナルティだったのにである。彼のその後に著しい害があったわけではないが、こういう事しかできない組織管理者が、事なかれ主義以外の方針を持っているとは思えなかった。

**5/2　WED　ある人から「Ｋ大のＳさんが団さんってどんな人か?と聞いていたが、どんなつながりがあるの？」と問われた。それからいろいろと妄想してしまって、まんざら悪い気がしなかった。**

**実は３月にもＨ先生からＳ大学の学生相談室でカウンセラーを何時間か引き受けてくれないかと言われて断っていた。**

**その時、俺もなかなかの者になってきたかな・・と嬉しい気がしたのだった。そして、さぁ今度はどんな用件だろうと、勝手に妄想を楽しんだ。**

**帰宅すると、連休中だけ貸してもらってきたファミコン（長年、我が家は禁止だった）に狂っている挑(次男)が「にいちゃん、急に耳が聞こえんようになって、医者へ行った。おかあさんもついていった」という。11 時近くなって、「中耳炎やって、痛かったぁー」と言って帰ってきた。**

**夜中、ＤＶＤ「その男、凶暴につき」、「早春物語」の二本をみて、その後、原稿書きにワープロをさわっていたら朝になった。７時半過ぎに娘が起きだしてきたので、膝に抱えて茶の間で話した。そのまま「荻野目洋子の部屋で映画監督が自殺した事件」をやかましく喋っているレポーターの声を聞きながら眠ってしまった。**

この頃の日常である。まだまだ他者評価は頭の中で駆けめぐっていた。誰かに認めてもらうなんてうっとうしい気がしているのに、認めさせたい気は大いにあるという矛盾。でも、それが原動力だったかもしれない。

児童相談所からの学会発表がほとんどなかった時期に、心理臨床学会で数年発表し続けたのも、ある時点で納得して止めてしまったのも同じ事だ。

三人の子の父親役割を十分に果たせている時間は多くなかったが、八歳（女児）と一四歳（次男）、一六歳（長男）の父であることは、当たり前のように私を充たしていて、公私ともの安定を与えてくれていた。

**5/7　MON　１５年以上の付き合いになる年下の友人竹中尚文くんが、ずっと以前から欲しいと思っていたものが届くように手配してくれた。**
**「NATIONAL GEOGRAPHIC」アメリカの雑誌だ。１９９０年の年間契約ということで、１月号から４月号までがシンガポールから送られてきたが、その写真のすばらしさに惚れ惚れしてしまう。付録の地図が嬉しい。英語の部分をとばしてしまう僕にも十分楽しめる。**

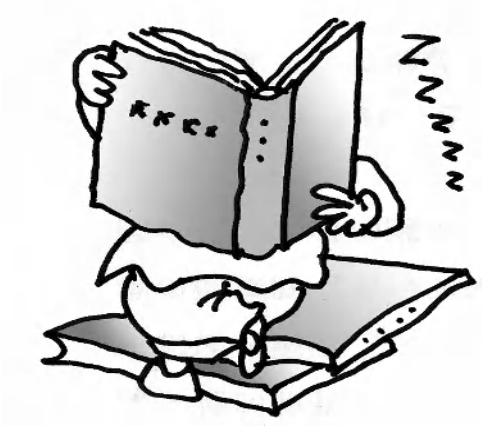
本誌に「お寺の社会学」を連載中の竹中君である。この時点でもう十五年つきあいだったことに驚く。以前も書いたが、彼が龍大の学生だったときに、シルクロードの旅というツアーでたまたま一緒になったのがきっかけだ。

そしてナショナル・ジオグラフィックは今、日経ビジネス社から月刊誌として日本語版が発行されている。あの頃は、考えられないことだった。そして、だから輝いていたところもあって、定期的に日本版が届くようになった十年後、定期購読は止めてしまった。

**5/8　TUE　決めておかないとなかなか面倒な専門書は読めない。持ち歩くのも重いし、ついつい買ったのに読めていないという事態が発生する。それで火曜日の夜は、できるだけ仕事関係の読書をすることに決めた。そういえば昔、受験生の頃、こういうことをしょっちゅうやって、挫折ばかりしていたなぁ。**

当然のことながら、こんな記述の後に、定期的に専門書を読み続けた記録も記憶もない。読書に関して、いわば無駄読みが多く、情報や知識を取り込む読み方は本当に苦手だ。

直ぐには役に立ちそうにないことと、永久に役に立たないだろう知識への好奇心なら、右に出る者は居ないのではないかと思う。まぁ、誰も右に出たいなんて思わないだろうけど。いったいいつまで、役にも立ちそうにない事への好奇心を持ち続けるのだろう、私は。（答は多分、死ぬまでだ）



**5/9　WED　桂南光さんのＡＢＣラジオ・パノラマ大放送におじゃまする日。月一度の出演だし、そこであまり相談の回答のようなことはやりたくないので、一寸いい話くらいの中味で喋っているのだが、それでも聞いていて、ハガキをくれるリスナーがある。感謝である。**
**夜は４月から通い始めた編集者講座・講師は「広告批評」誌の島森路子さん。インタビュー（後藤久美子の事）の話で、いくつかうんうんと共感するところがあった。**

この編集者講座通年クラスの受講は、私の生活のエンターテインメント部門だった。公務員であることと、こういう動きが自分の中では矛盾しない。むしろ、こういう事が大事なんだと確信さえあった。

世間は公務員だけで構築されているわけではないことを強く意識していた。親族に一人も公務員がいなかったせいもあるかもしれない。

今に至るまで世間は、官僚・公務員についていろいろ言うが、霞ヶ関だけではない、地方公務員のライフスタイルの社会的な限定が、問題解決能力を硬直化させてきたのだ。

民間に！などと小泉純一郎に叫ばせていないで、公務員自身がもっと権限の主体性を駆使して、結果に責任を取る構えになればいい。させられていないで、自分が面白いと思うことをやればいいのだ

**5/10 THU　Ｎ児童相談所に居たＹさんから、転勤の挨拶状。それに一時保護所統廃合に向けて、三児相の組合分会長が転勤させられたとある。**
**こういう文言を目にするとき、いつもある種の飲み込めなさを感じてしまう。ひょっとすると自分が置かれている状況が恵まれていて分からないのかもしれないが、とにかくなんか変な感じがある。結果だけ書くと、こんな事になるのかもしれないが、具体的な取組経過が持てて、そもそもの目的をそれぞれが考えていたら、これほどただの被害者的表現をしなくていいように思えてならない。**
**一時保護所の統廃合が、必ずしも合理化したことにはならないのは既に証明されている。事実や人材を大切にできない組織が栄えたためしはないし、人の育たない組織もまたそうだ。**
**「着眼大局着手小局」が、実行であるならば、残念ながらこのグチの出るところは「着眼小局無着手」ではないのかと言いたくなる。**
**統廃合問題がそれとして議論になりきらず、最後は時間切れで個々人の人事異動問題になってしまいがちだという不幸を、当局・組合両者が噛みしめなければならないのだと思う。**

繰り返し経験してきたことだが、公務員組織の様々な課題が、最後の最後には人事異動（一身上の都合）という個人の問題になって決着がつく。いよいよそうなった時には、どれほどの積み重ね経過が水泡に帰すことになっていても誰も構わない。ここに親方日の丸という長年の批判が集約されている。こういうものこそ、談合というのだと私は思う。

**5/17-18　府三児相児童福祉司会議。三所の相談判定課長も出席して二日間。しかしどうも内容が感心しない。発言や提案が生き生きしていない。サイド・ブレーキを引いたまま運転しているような議論の仕方に思える。**

**そのベースが私に言わせると「相互不可侵条約」、暗黙の密約である。誰が何を言っても批判をしない、そのかわり自分の発言についても誰かに何か言われることは好まない。**

**この傾向は、特に中年を迎えた女性職員に多いように思う。そして迎合するように、何も言わない事なかれ主義の中年男性職員がいる。こんなことは続けていて良いものではない。カツを入れなくてはならない。**

厳しいことを書いているなぁと、今読んで思う。しかしこれは日誌の中の独り言だったわけではない。日常や会議でここに至る十年くらい、ずっとこうだったような気がする。

いわゆる大人の発言、大人の対応をしていると、その場は丸く収まって、和気藹々。でも、そんなことが目的だったのか？と振り返るとおかしいところに行き着くことになる。職業が個人の人生選択の一つである事は認める。しかしその仕事の持つミッションは、個人の見解とは無関係に存在する。

業務がますますハードになってきて、一方で児童福祉司の経験年数が浅くなってきたりすると、お互いを気遣うという美辞麗句にコーティングされた「いたわり合い(馴れ合い)」ディスカッションが始まる。そして対外的な防衛心だけで連帯したりすることになる。

それは児相や児童福祉司の話だけではなく、昨今の大災害における政府の混乱にも見て取れる。情緒的には分からないでもないが、そんなことで仕事を語ってしまうようになった自分たち自身を、弱体化していると自覚する必要があるのだと思う。

随分以前のことだ。近畿地方の同職者が集まる持ち回り会議で、他府県の若い女性心理職が、理屈の通らない話で、自分の上司を護ろうとするのを目の当たりにした。そのあまりにも人間関係だけに焦点化された若い職員の態度に、怒鳴りつけたことがある。それじゃ、身内ホステスじゃないかと思ったのだ。

住民ではなく、たまたま、そのときの上司である者のために、この人は何を言っているのだろうと許せなかった。その場では、私が顰蹙を買ったのだったが、こういう若者の意識の寄せ集めで未来が作られていくのはうんざりだった。

**5/19　SAT　「発禁・カタルーニャ現代史」セスク著という大版のヒトコマ漫画本購入。筆者はスペインの風刺漫画家。ここに掲載された作品の多くが、検閲で×を付けられて発表できなかったものだという。それらの作品が大きな×印とともに掲載されている。**

**自分も漫画を描く身として、何とも言いようがない気持ちになるのは、原稿に直接×印を検閲者が書き込んでいる作品だ。自分の作品が、意見が違う者の手で、掲載を拒否されるのみならず、大きく×印を書き込まれて戻ってくるなんて考えられない気がする。**

**しかし振り返ってみると逆に、自分は誰かが×印を付けたくなるような作品の一枚も描けていないなぁと情けなくなる。**

風刺とか批評は、自分があからさまに前面に出る。そうでない評論風のものは、慣

用句や慣用感覚の使い回しで、時流に乗っかっているだけだ。

その場、その時期に、世渡り上手が駆使する言語や態度は、見える人には見えている。しかしその人達はたいてい優しい。

だから「彼にも事情があるんだろうから･･･」などとかばう。しかし、こういう妥協が産んだものの結末の一つが、フクシマ（原発問題）だったりしたのだと思う。

あの頃の私は、「団さん、こうした方が得ですよ。いや、そうしないと損をしますよ！」と忠告されても、「損しても構わないから、思うように選びます」と言っていたように思う。だからといって、自己犠牲の精神などであったわけではない。欲しいと思わなかったから、要らないと言えていたのだと思う。この経過にも、それなりの自己満足はあった。そして引き受けた結果の一つが５０歳の退職だったかもしれない。

しかし今、それでは弱いのだと、今回の原発事故のことでつくづく思った。間違ったからといって責任をとれない人に、責任を取らせようとするのは間違いだ。責任のとれない人に、そんな権限を与えていることに気づいている者が傍観するのは悪である。

「何が正しいかなんて分からない･･･、正義なんて言う輩には、要注意だ！」等と、何も言っていないのと同じ事を繰り返していないで、その時々で、責任を取るか、責任を取らせるか、どちらかにしっかり立ち位置を定めなければならない。傍観者は基本、利己主義である。

**5/22　TUE　家族療法訓練講座第３期が始まった。１２人のいろいろな現場の人達と１年間付き合うことになる。さっそく金沢から毎週京都に通う男性に、健康な一般家族と面接をしてもらった。複数の人達と面接する大変さを十分味わい尽くしたような展開だった。**

この京都国際社会福祉センター（ＫＩＳＷＥＣ）家族療法訓練（通年コース）は現在まで、受講人数の揃わなかった２回を除いて、延々続いている。初期は団、早樫、木村の三人で、その後、早樫と私の二人で担当して今に至る。

家族療法家を育成・訓練しているというより、家族療法訓練を受けることで、様々な分野に、家族を理解する人が増えることを目指している。

ここで通年コースや、短期集中ＷＳコース（step１，２　夏・冬）を受講した人たちが、それぞれの出身地に戻って、地元で家族療法の継続訓練プログラムを開講してほしいと言い始めたのが10年以上前。その第一号が1990年代後半の青森県・弘前だ。

**5/25　FRI　久しぶりの亀岡教師勉強会。参加者は９人と少なかったが、具体的ケースの処遇方針を一緒に考えた。原則にのっとった仮説をどう立てるか、主に川畑くんとキャッチボールした。**

児童相談所に来談するのは、基本的に保護者の意向。それ以外に警察のように、１４歳未満の触法通告というルートもある。

（近年では虐待通告）。連携する機関ルートの仕事は、保健所との三歳児健診、１歳半健診などが主なものだった。

他に京都府北部の児相では、学校に出向いて実施していた「学校教育相談」があったが、管内全ての学校から相談があったわけではなかった。管理者の意向や地域の習慣で、伝統的にケースのある学校とない学校に分かれていた。不登校は山のようにある時代に入っていたが、義務教育年齢の子ども達は学校が囲い込んでいた。

そんな中で教員個人の判断で、正式な相談というより、学級運営上の教員の困り事相談を、非公式に受けられる窓口を意識して設定したのがこれだった。

保護者や学校管理者には内緒でも、ここで一緒に考えてみて、教師自身が現場でよい結果が出せればいいじゃないかと考えていた。

**5/29　午前中はヤセ症の子の両親と面接。ボディ・ワーク、体の力を抜く練習をしてもらった。夫婦ともなかなか抜けない。次の面接まで、週一回家族全員でその練習時間を決めてすること。**

いろんな事を試していた。結果の出そうなことであれば、流儀も何も、構わなかった。身体への関心は、心身症状と呼ばれるものが話題になったとき、どこからのアプローチにチャンスがあるだろうかと考えて、早くに頭の中にあった。

竹内敏晴さんの名著「ことばがひらかれるとき」に心酔したのは、舞鶴児童相談所に勤務していた時代。発達相談でいろんな偏りやこだわりのある子達に会っていた時のことだ。これがきっかけでボディ・ワークのプログラムに参加し、目から鱗の体験連発に遭遇する事になる。（この顛末は、拙著「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版に書いた。

その頃からずっと、身体をテーマの援助実践には関心がある。体は結構大きなテーマであり、みんなの中に潜む弱さも引きずり出す。

**5/31　受理判定措置会議。一時保護中の盗難事件のことを話し合う。ぼんやりしている人間の欠点が現われてしまった。彼の資質を全否定するわけではないのだから、どうか要所は押さえてもらいたいと思う。**

スタッフの誰もがしっかりした人であることなど求めてはいなかった。いろんな人が来談するところが、一色の人間集団では、不十分だと思っていた。だから気の付かない人も、下世話な欲望の人も、裏表のある人も、臆病な人も皆、チームの一員だった。

ただ、この時のように、うっかりした人のせいで、預かっている子供が事件当事者になるのは勘弁してもらいたかった。

一時保護所での事件の記憶といったら、その昔、保護中の子どもの他児への暴力を止めようと手を挙げた職員があった。

これに激昂したその子（逆ギレだ）は、調理場から包丁を持ち出した。慌てて庁舎を飛び出した職員を彼は包丁を振りかざして追いかけ、それを見た町内の住民が警察に通報する騒ぎになった。

この事態を収束させるのに必要だったのは、この子に対する恐怖心のない者だった。怖がっている者が無理矢理、包丁を取り上げようとしたり、押さえ込もうとしたら更に事件が起きる可能性があっただろう。

みんな外に出た事務所で担当児童福祉司と二人、包丁で事務椅子を突き刺し続ける彼に、話しかけていたときのことは鮮明に思い出せる。彼にこれ以上のことをさせたくなかった気持ちは届いた。

# 「ののさん」のこと

## ―京都に関西初の子どもシェルター開設準備中―

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

「学校臨床の新展開」として、スクールソーシャルワークについて数回書かせていただきましたが、今回は京都で現在、開設準備中の子どもシェルターについて少し書かせていただきます。

## 「ののさん」って。

「ののさん」というのは京ことばで、太陽や月、神様や仏様をあらわすことばだそうです。「のんのんさん」ともいうらしいです。京都では親が子どもに「のんのんさんにお参りしいや」などとよくいうそうです。大阪生まれの私は「ののさん」や「のんのんさん」よりも「まんまんちゃん、あーん」というほうが親しみありますが、その類のことばでしょうか。

さて、今回、突然「ののさん」を取り上げさせていただいたのは、京都に関西では初めて「子どものためのシェルター」ができるというお話をしたかったからです。そして、そのシェルターの名前がこの「ののさん」なのです。「ののさん」という名前には、子どもシェルターが子どもたちを包みこむ陽だまりのような存在であるようにという思いや、子どもたちがかけがえのない命や人生を大切にしてほしいという願いが込められています。

## 子どもシェルターとは

さて、子どもシェルターとは一体何か？と思われる方もたくさんおられるかと思います。日本で最初の子どもシェルター「カリヨン子どもの家」が東京に設立されたのが、2004 年です。「カリヨン子どもの家」は坪井節子弁護士らが、人権相談や少年事件の付添人として出会う子どもたちから、「家に帰りたくても帰れない」「今晩安心して眠る場所がない」と訴えられたことが契機であったといわれています。坪井氏は『居場所を失った子どもを守る　子どものシェ

ルターの挑戦』（明石書店　2009 年）のなかで「弁護士が相談にのるという場面は、曲がりなりにも、相談者には寝るところ、食べるところがあって、相談が終われば帰るところがあるという前提のもとで、成り立っている。」と述べられています。そのあたり前の構造が 10 代後半の帰るべき場所を失い夜の街で犯罪に巻き込まれる危険性のある子どもたちとの出会いのなかで、この子どもたちを何とかしたいという思いに、そして、その思いがさまざまな人々からの物心両面での支援に繋がり、子どもシェルター建設にまで至ったのです。

児童養護施設などの児童福祉施設では基本的に満 18 歳になれば施設を退所しなければなりません。あるいは満 18 歳に至らずとも、高校に通わない場合は基本的に施設を退所せざるを得ない場合も少なくはありません。

これまで不運の連続や挫折の繰り返しのなか自己肯定感が低く、すぐに自暴自棄になったり、あるいは人間関係の構築に課題のある子どもたちが少なくありませんから、些細なことで挫けやすい傾向にあります。そんな子どもたちは、例えば施設退所後、住み込みの仕事を抜け出し、さまざまな事情から（本人が拒否したり、施設が拒否せざるを得なかったり）元いた施設にも帰れず、ましてや家にも当然ながら帰れずといったことが生じます。親身な施設職員が自宅などで一時的に面倒をみたりということがこれまでもありましたが、自ら援助を求め、適切な支援を受けない限り、ホームレスとして路上へ出るしかありません。支援上の選択肢のなかに自立援助ホームの利用もありますが、大変数が少ないのが現状です。

また、非行ケースなどで保護者が身元の引き受けを拒否し行き場が見つからない子どもたちも同様です。今すぐ、保護が必要にもかかわらず、制度の間に落ち込んでしまう子どもたちがいるのです。

児童相談所では、今日帰るところがないという子どものケースや子どもを帰せないというケースも想定して一時保護機能があるわけですが、相談援助の対象は基本的には満 18 歳未満ということになっていまし、現在の一時保護所の状況というものが各地により違いはあるものの、体制自体が相当な困難を抱えていることが安部計彦編著『一時保護所の子どもと支援』（明石書店 2009 年）からもよくわかります。（東京では児童相談所とシェルターが提携を結び、一時保護委託が行いやすいように工夫がされています。）

このようななか、子どもシェルターは孤立した子どもたちの社会資源のひとつとして、衣食住を提供し、１人ひとりに担当弁護士がつき、あらゆる状況に応じて、子どもの権利を守って活動をします。

居場所を失い路上でさまよう子どもたちを待ち受けるのは、甘い言葉をかける一見やさしい大人たちです。こころ寂しい子どもたちは自分自身も気づかないうちに、いとも簡単に犯罪に巻き込まれてしまうことも少なくありません。

東京の「カリヨン子どもの家」はその後、2008 年に社会福祉法人格を取得し、自立援助ホームの運営や通所なども行っています。その後、神奈川、愛知、岡山、そして 2011 年４月には広島で子どもシェルターが開設

されています。京都では、長年子どもの権利擁護を訴えてこられた弁護士の安保千秋氏や子どもの貧困問題などにも取り組む吉田雄大氏が中心となり、いよいよ今秋の開設にむけて本格的に動き始めています。

私もご縁があり微力ながら関わらせていただいております。全て手作りのボランティア仕事です。たまたま私が芸大にいるということもあり「子どもセンターののさん」のロゴマークのデザインを梅田美代子氏（京都造形芸大教授）に、シンポジウムやリーフレットのデザインを同学生の伯田早奈恵さんにお願いしました。アートやデザインの力はすごい！とつくづく感じます。

さて、いよいよ始動する子どもシェルター。ご興味のある方は、ぜひ、６月２５日（土）京都河原町五条下ル、「ひとまち交流館」で行われる「子どもセンターののさん設立記念シンポジウム」へお越しください。坪井節子先生の熱い講演が待っています。

対人援助マガジンという媒体を通じて勝手に私が少しかかわる団体の宣伝をさせていただきました。編集長に許可を取ったわけではありません。きっとお許しをいただけると勝手に思って今回は書かせていただきました。「浦田くん、ええやん書いたら、好きなこと書いたらええやん」と私のこころで編集長の声が聞えてきます。

皆さま、どうぞ、京都子どもセンターののさんへのご支援をよろしくお願いいたします。

子どもセンターののさん

# 子どもセンター ののさん
# 設立記念シンポジウム

**日時：2011年6月25日（土）**
**会場：ひと・まち交流館２階大会議室**
**定員：300名　参加無料・申込不要**
**主催：京都子どもシェルター設立準備会**

子どもセンターののさん

## すべての子どもたちをつつむ陽だまりに
## 子どもシェルターの挑戦

**基調講演**

### 「子どもたちに寄り添う～子どもシェルターの現場から～」

**講師：坪井節子**

弁護士・社会福祉法人カリヨン子どもシェルター理事長
早稲田大学第一文学部哲学科卒業、1980年弁護士登録。
日本弁護士連合会子どもの権利委員会幹事など。
『子どもたちに寄り添う』（いのちのことば社 、2007年５月）ほか著書多数。

**特別公演**

### 創作新日本舞踊

**特別ゲスト：佳卓**

創作新日本舞踊佳卓流宗家　２歳で初舞台。

2003年MBS毎日放送ドキュメンタリー番組 ( 映像03)『舞に狂うて～万作と佳卓～』
2006年イタリア・ジェノヴァ・グスターヴォモデナ劇場にて劇作家・泉鏡花の「山吹」という作品をモデルにした前衛作品「水鏡」を現地活動中の舞踏家・声楽家・コンテンポラリーダンサー・パーカッショニストの方々と上演。賞賛を得る。
2007年 正月映画　東映『大奥』<女優・仲間由紀恵 主演>娘道成寺を踊る役者として出演。
各地で舞踊指導、公演多数。

**ライブペイント**　アーティスト：TOMOE・U・＆ smilepainter Cha-ta

# ポストモダンな学びのスケッチ（５）

## 繋がりの中で見えてくるもの

北村真也+中村正

これは筆者である北村が、かつて大学院に学び、そこでたまたま指導教員であった中村先生に出会ってしまったことで描き始められた学びのスケッチである。論文課題を抱えていた筆者は、毎週のように中村先生と2時間の対話の時間を重ねていた。それはいつの時もほぼ正確なリズムをそれぞれの生活世界の中に刻むかたちで行われた。金曜日の夜、場所は衣笠キャンパスの研究室、もしくは朱雀キャンパスのカフェ。そしてこの対話の時間は、いつしかそれぞれの生活世界全体にある特有の意味を構成することになっていった・・・。

と、本来ならこの「まえがき」が続くはずなのですが、今回は少し趣が違います。実は筆者は今年３月に無事学位論文『ポストモダンな学びの構築－私塾におけるその理論と実践－』を書き上げ、どうにか修士課程を終えることになったのです。そしてそれにともなって筆者と中村先生とのこの対話の時間も一旦終了することとなったわけです。

この間に書いてきた修士論文に向かうための対話の記録は、全部で27編。そのうちみなさんに御紹介できたのは5編のみですが、筆者と中村先生とのライブな学び、この場のこの瞬間にしか生まれ得ない気づき、変容の様子を垣間見ていただけたのではないかと思っております。

では、今後の連載の内容はどうなっていくのか？って・・・。それは、次回からのお楽しみ。今の私にもまだわかりません。ただ一つ言えることは、修士課程が終わっても、私自身の学びのスケッチは、今、この瞬間も終わることがなく継続されているということです。それは決して、同じことの繰り返しではない新しい地平を私に見せてくれているのです。

それでは、今回が一応の最終回となりました「北村真也+中村正」のライブ感あふれる世界を最後までお楽しみください。

## エピソード〈他者性〉の本質に迫る

今回の先生との対話は、先生の専門領域である社会病理学の話から始まりました。どうも先生は、私が先生の研究活動に今まで興味を示さなかったことに不満があるらしく、前回、10 冊程度の先生の著作を渡されました。私が先生の研究に触手を伸ばさなかったことにはとりわけ理由があったわけではなく、たまたまそうだっただけなのですが、今回先生の研究の軌跡をその著作を通して知ることで、より中村先生を知ることができたように思いました。

私にとって興味があったのは、社会病理学というものを私の指導教授である中村先生がどのように編集し、またそれが長年の研究活動の過程の中でどのように変容してきたかということであり、それが今私の目の前にいる中村先生とどうつながり、そして私自身とどうかかわっているのかというその文脈を知りたいということでした。

以前も述べましたが、私の学習者としてのスタンスは、常に先生のギリギリのところで出会いたいのです。そのためには、学習者である私自身に問題提起が必要なのです。今回私は、先生の研究活動の文脈を私なりに捉えたうえで、私なりの問題提起を先生にぶつけ、そこから生まれる新たな思考を互いに共有していったのです。

*「ベトナムに先生からいただいた先生の本、全部持って行って飛行機の中で読みましたよ」*

*「で、何で今まで関心を持ってくれなかったの？」*

*「社会病理学ですか、きっと私のフレームの外にあったんだと思います」*

*「でも、一応指導教員ですよ、それは…、それは…」*

*「そうそう、先生と最初あった時、立命館のパンフレットとかを渡されて、何か大学改革の話をしたじゃないですか、社会病理学ではなくて…。きっとそれが入り口だったからですよ」*

*「それは、一応職責上のことですから…。私の中では切り離されているわけではないんですがね…。ただ私は教育学が専門じゃないし、専門知識を元にやっているわけではないしね。直観的といえば直観的だし…。大学経営なんて定型的なモデルがあるわけではないしね。ただ指針は要りますよね。でも自分勝手にやってるんではないかと、不安にはなりますよね。だから、大学経営、教学経営をやってる人たちと学習会をやったりするんですが、でもどれもピンとこないんですよ。それに青年期だって揺れているわけですからね…。私は教育の対象化というよりも、学生が学習主体としてどう変化していくかということに関心があるわけですよ。だから、ベイトソン的な学習理論、コミュニュケーション理論に関心があって、その話を最初からしてるわけですから…」*

*「そうそう、だから私はそんな人やと、思ってるわけですよ」*

*「それはそれであるんですが、特に研究論文を書いているわけではないし、ひたすら直観的に、でも結構楽しんでるところもあるんだけれども…」*

*「でも、先生が書いた〈臨床社会学構想〉、これって従来の〈社会病理学〉の定型的な捉え方を超えたいという文脈で書いたでしょ？」*

*「そうそう。〈社会病理学〉って解釈なんですよ*

ね。だからどうしても問題解決するためのあれじゃないんでね。かといって〈臨床心理〉みたいに狭くとらえたくない。あるいは、〈社会福祉〉や〈社会政策〉や〈社会改良〉というコトバだけでも陳腐なものだから…、もう少し個と全体がせめぎ合う場で、もう少し臨床性もあって共に変容していくのがいいかなあと思って、たまたまそういう言い方をしている」

「まあ、そこらへんは、教育的だと言えますよね…」

「『京都発ＮＰＯ最前線』という本があったでしょ。あれは近いかな。あの本を書いた時は、ちょうど阪神淡路大震災があったんですよ。“災害ユートピア”というコトバがあって、何か大きな災害があると、社会の共同性が非常に高まるんですよ。社会全体が“感電した状態”になるんですよ。特に青年期の若者は、その揺れが大きい。そのことがあって、その後ＮＰＯやＮＧＯの活動が社会に浸透し、定着していくことになったんですよ。あの震災が起こった時に、ちょうど大学の試験中だったんですよ。当時の学生たちは、“こんな時に試験をしてる場合じゃないからレポートに変えてくれ”って言って、ボランティアに大勢出かけていくわけですよ。そこで感動を覚えて、そのごこうしたＮＰＯ活動で飯を食いたいって言いだして、それで京都ＮＰＯセンターを立ち上げたんですよ。彼らは、今30代になってるんですが、まさに震災世代ですよね。感電したんですよ。彼らは連帯が強い」

「そうですか」

「それで、当時これらの非営利団体を第3セクターと呼んだんですよ。第1セクターが国家、第2セクターが企業、そして第3セクターが非営利。でも私はこの言い方が大嫌いなんです」

「何でなんですか？」

「何で3番目なんですか。非営利なんていうのは、0セクターなんですよ。どこでもあるもとなんですよ。人間の歴史以降、あるいは動物もそうなんですが、何とか生きようとして共同性を高めてきたわけですから、生き延びるための手段が社会ですからね。それが残念ながら、喧嘩したり戦争したりしてるわけですがね。だから、0セクターなんですよね。“Commons”なんですよ。だから国境も超えてしまう。No boarderなんですよ。そういう共同の形がずれたり、ねじれたりすると、個人が生きにくくなって、ある逸脱性を持ってくる。それを一応社会病理とするんだけれども、解釈の問題とするわけです。逸脱性というのは、ある種の先端なんです。〈カナリヤ理論〉というのがあるわけですよ。生きづらさを持っている人たちは、まさにカナリヤなんですよ。先端に生きる人たちかもしれない…」

「先生にいただいた10冊の本、それのは大きく1990年代のＤＶもしくは、男性性の研究と2000年代の臨床社会学へと導かれていく研究の大きな2つの流れがあったでしょ」

「そうですね」

「そこでの私の論点は、自分を他者と切り離してみない視野というか、例えば妻に暴力をふるうバタラーの研究、その暴力性を先生は自分自身の暴力性とのつながりの中で捉えようとしている」

「エピソードに書いてましたね。そこなんですよ」

「その視野があったから、先生の2つの研究はつながっている。つまり、ＤＶの研究からＮＰＯの活動へとつながって言ったんじゃないかと思うんです」

「まあ、最も関係性が作りやすのは、加害者なんですよ。被害者は比較的関係性を作りやすいんですよ。加害者は、ラベルを張ってしまいますからね。ラベルを張ってしまうと捉えやすくなる側面と関係が切れてしまう側面がある。これは佐々

*木さんのラベリング理論もそうだけど、ラベルを張った段階で関係が切れてしまうんです」*

*「自分から関係を切ってしまう」*

*「そうそう、関係が切れてしまうんです。発達障害もそうだけど…、加害者はもっともその傾向が強いんですよ。“善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや”という親鸞のコトバがあるように、悪とされている人たちとの関係を切ってしまってはいけないと思うんです。それは私自身に悪があるからなんですがね。たまたま今は、何かの条件で悪が大きくならないようになっていますけど…。天使だけで生きているというのも偽善だしね。自分の中にも悪魔性があるしね。でも悪魔性が見えている人たちっておもしろいんですよ。まあそれをわかりやすく表現したのは芸術ですからね。芸術は悪魔性をうまく昇華させるしくみを持っている。フレームがあるから…。スポーツもそうかもしれませんしね。お祭りもあるいはセックスもそうかもしれない…。だから、そういう世界に私も生きているわけだし…。男性性も持っているし、女性性だって悪魔性をもっている。だから私が加害者に注目するというのはそういう意味があるんですよ。」*

*「よくわかる」*

*「犯罪は、〈反社会性〉の典型なんですよ。ところが、逸脱性とか病理性とかをおくと必ずしも〈反社会性〉だけじゃなくて〈非社会性〉とか〈脱社会性〉とかコトバが出てくるんですよ。〈非社会性〉の典型はひきもこり、〈脱社会性〉の典型はカルトですよ。〈反社会性〉〈非社会性〉〈脱社会性〉これらのコトバをマトリックスにおくと、いかに自分は社会に適応して生きているかが見えてくると同時に、いかに陳腐な人間であるが見えてくるんですよ」*

中村先生に社会病理学を語らせることができて、私は大変満足していました。先生が社会病理学そのものをどのように切り取って見ているのか、その輪郭が私にも共有できたように思います。話は、ここから他者性のことへと進展していきます。加害者を理解しようとする中村先生の姿勢と生徒を理解しようとする私の姿勢が、ここでつながっていくのです。

*「私が生徒、だけではなくて、いろんな人と関係を作っていく、あるいは相手を理解しようとするためには、何かを共有しないと理解できないと思うわけです。そして共有される部分が見つかれば、例えば私と中村先生のことに関しても、一旦共有できれば、それは中村先生のものであると同時に私のものでもあるわけです。そしたら、その共有されたものを支えている思考や感情を今度は自分の中で探ることができるじゃないですか。そうすると今度は、こうかもしれないという見当がたつ。私の問いはたいていこうして返していることがおおいじゃないですか…」*

*「そりゃ、これだけオフィスアワーを入れるくらいですからね。当然そうなるわね」*

*「大事なことは、“中村先生の中にあるものが、私の中にもある”これが前提なんですよね」*

*「それはそうですよね」*

*「だから、多少私の書いたものを読まなくても、後追いでもいいのかなって思うんですが…」*

*「だから、あらためて先生の本を読んで、先生の捉え方を確認できたわけですよ」*

*「でもなかなか、こんな加害者研究なんかは理*

*解されないんですよ。世の中は厳罰主義に走っていますから…。なかなか一筋縄ではいかないんですよ…」*

*「でもそんなふうに切ったりラベルを張ったりする社会のあり方から、”Commons”は決して生まれてこない…」*

*「そうなんですよ。“村八分”は、“村十分”ではないんですよ。二分の関係を残しているんです」*

*「そうやね」*

*「だから、どこかで私とつながっているんですよ」*

*「そうですね。でもよかったですよ。この機会に先生の本が読めて…。一気に読みましたよ。飛行機の中で…」*

*「ありがとうございます。あの時、目についたものしかあげられてないですから、もっとあげますよ。でもよく読んでくれていますよ。大したものですよ、この読書量。ベイトソン読んだ時もそう思ったけど、すごい読む力ですね」*

*「それは、中村先生だって、ベイトソンだって、つながりたいと思うからですよ。それだけです。その動機が、自然と深い世界に導いていくだけのことです」*

私は、ここで他者とのつながりを議論するにおいて、今この瞬間に展開されている私と中村先生との関係をその題材として取り上げます。ベイトソンに言わせれば、これはメタローグということになるのですが、議論の内容が同時に今この瞬間に展開している議論と交差するのです。つまり、議論の内容が今とつながっているため、より深い理解をこの瞬間に双方にもたらしていくのです。この手法は、私は生徒との関係においてもよく使います。

*「あと“Global Citizenship”のことだけど、私にとっては“他者とともにある感性”っていうのがとても大事なんですよ。ということは、自分の中の“他者性”に気がつかないといけない。悪魔性ですよね。自分の中の差別性とか…」*

*「自分の陰の部分ですよね。陽のあたっている部分は、知っているからね。知らない部分…」*

*「そうですね」*

*「“他者性”ね…。実は私は、94年にバンクーバーに少し住んだことがあるんですよ。その時、カナダ人は私にとって宇宙人だったんですよ。私と違った世界に生きる人たち。でもホストマザーが、なぜかわからないけど、私に小児糖尿病で苦しんできた娘さんの話を涙ながらに語ってくれたんですよ。その時初めて、私はカナダ人を同じ人間として認識するんです。“この人たちも私と同じ感情を持っているんだ”と…。もちろん頭では理解できているわけですが、どこか受け入れていない。でもある瞬間から、“私と一緒なんや”という感覚が持てるようになって、そこから新しい関係が始まる。これって“他者性”っていうのかなあ…。“一緒なんや”という感覚が大切なんです。“一緒なんや”という感覚が見いだせるまで、自分の意識を探っていく…」*

*「まあそういう“うごめき”をさせてくれるんですよ。他者性の強い人は…」*

*「“探らないかんなあ”って、探りたくなるんですよ。たぐりよせたり、理解したり、“何か一緒やなあ”って思わせてくれたり、ざわめかせる人たちなんで、私にとって他者性の強い人たちは…。ものすごく大事なんですよ…」*

*「“他者性”の強い人たちって、どういう人なんですか？」*

*「私にとっては、子どもなんかもそうですし、*

*女性なんかもそうなんです」*

*「簡単にわからない人？」*

*「そうです。縁に行かないとわからない」*

*「なるほど、そこもうばっちり私と一緒じゃないですか？」*

*「縁に行かないと…」*

*「でも私の表現でいくと、縁ではなくて、意識を深く探るってことになるんですが…」*

*「それは両方ある、広く深く探るんです」*

私と中村先生は、ほとんど同じ意識の使い方をしているのだろうか。もちろん違いがあるとは思うのだけれど、こんな風に議論を続けていくと、ますます似てくるかもしれない。これがまた面白い。

*「さっき話に出た“Global Citizenship”についてですが、私の連れ合いが中村さんに聞いてきてほしいというわけですよ。というのは、立命館学園は小学校から大学院まで経営してるでしょ。だから当然この“Global Citizenship”について何らかの見識を持っているはずだというんです。だから教学責任者である中村さんに聞いてきてくれって」*

*「そうですか…」*

*「この“Global Citizenship”というトピックは、たまたま私と連れ合いがベトナムの学校を訪問した時、私がアイデンティティーの問題を質問したんですよ。ベトナムのエリートたちは、小さい頃からアメリカの教科書で学び、英語を習得し、アメリカの大学へ進学しベトナムへは戻ってこないんです。前に私が訪れた台湾も同じでした。アメリカの社会はよくてドメスティックはよくないんです。彼らにとっては…」*

*「そうですね」*

*「優秀な人がみんな流出していくんですよね。こういう状況では、文化なんてあっという間に喪失してしまう。何千年もかけて構築された文化が、ほんの数十年の間に消え去ってしまうことが私には忍びないんですよ」*

*「つらいよね」*

*「つらいです。だからこの“Global Citizenship”は、ドメスティックを否定して他者化していくんではなく、ドメスティックにありながら、他者を受け入れる形にならないといけない。そしてこの問題を先の“他者性”の問題と重ね合わせてみると、他者を理解し他者とつながっていくためには、自分の意識を探りながら共有領域を見出さないといけないという論点にぶつかるわけです。これまさに教育の問題。そういう人間をどう育てるかという問題につながっていくんです。だからこれを、立命館ではどう考えているのかということなんです。この間、大学のエクステンションの話をしたじゃないですか。大学も安直な方向に走ろうとしてる話。アウラに立命館小学校の生徒がいるんです。立命館小学校では、5年生が全員英検3級をめざすんですって、これって今話してる論点と全然違うじゃないですか…」*

*「違いますね。だから、そこが制度上の矛盾なんですよ。これだけ大きな制度ですから…。確かに北村さんの言う通りなんです。でも、まあ同化と異化という側面があるので、我々は革命の戦士を育てているのではありませんから…。社会に同化しながらも異を唱えられる人が必要なんです。異化する理念ばかり出しても支持されないと思うから…。ただ今は、社会化が少し表に出過ぎているのかもしれない…」*

*「中村先生が、例えばバタラーの研究で自分の*

*暴力性を持ちだしてきて、それを彼らとつなげようとしているわけですよ。それを読んで、私はすごいなあと思うわけですよ。でも考えてみれば、私がすごいなあと思うのには、世の多くの研究者が自分のことと切り離して研究活動をおこなっているという前提があるからです。中村先生は、そういう意味ではマイノリティーの研究者として私の中で認識されたわけです」*

*「そうかもしれません」*

*「私もマイノリティーの教育者です。なかなか学校の先生とは論点が合わないですから…。で、私の質問は、どうしたら先生のような他者性を共有できる人が育つかです。もともと先生はそういう人間であったのか、つまり他者性が個人の資質に還元される問題なのか、あるいは教育の課題として捉えることのできる問題なのかということなんです」*

*「……」*

*「私の言っている意味がわかりますか？これ、とても大切なことなんです。そういった子どもたちって育てたいじゃないですか？」*

*「私をこんな風に育ててくれたのは佐々木さんだからね。でもどうしたらそうなるのか、わかんないですよね…。でも育てなくちゃ、いかんでしょうね。育つものなのか、花開くものなのか…。まあ土とか肥しとかはいるんでしょうがね…」*

*「まあ、私にとっては、アウラがその土壌のようなものなんです」*

*「そうやね」*

*「アウラの土壌に、私が私自身をしみこませていく。アフォーダンスですね。それで私は個々の生徒に関わりながら、彼らの見えない世界とつながっていく。そしてそこに揺さぶりをかけていき、彼らはやがてそれに気が付いていく。アウラは、そんな仕掛けなんです。見えないものを扱おうと思うと、必ずそこには何かの媒体がいる。見えないものだけを扱おうとすると抽象性が高すぎて自分と切り離されてしまう。だから具体的に共有される経験とか作業とかがそこにいる」*

*「そやね…。まあ大学では、ゼミナールとか…、佐々木さんのゼミでは長時間やりましたよ。とにかく何らかの場がいりますよね。場が、その年齢にふさわしい…」*

*「そうそうそう、場がいるんです。場が…」*

*「まあ、我々の若い頃には、そういう場が京都の中にもいっぱいあったからね」*

*「出町のジャルダンとか…」*

*「そうそうそう、ジャルダンね。まあ、あふれかえってましたよね。今はそういう場がないからね。お仕着せの教育になってしまったり、至れり尽くせりの教育だったり、何か履き違えてますよね」*

*「モノも情報もね。でもやっぱり多くの情報をみんなが持ってしまったことは、いい意味でも悪い意味でも大きなことですよ。簡単にわかった気になってしまう。上滑ってしまう。情報と自分が切り離されてしまう」*

〈他者性〉を備えた学習者をどう育てるか。そのためには、以前に取り上げた省察的思考、あるいはメタな思考が必要となってきます。そのような思考を自由に使いながら自分の意識を多面的に観察し、他者と共有できる領域を探る必要があるようです。そして他者の存在を自分の内面に見出すことで、Global な意識を獲得することができるのです。このことは〈共同性〉ということを考える上にも、大変重要なことかもしれません。

「エピソードの中に最初のクラスターの時の話があったでしょ。あれずっと引っかかってたんすよ。“何かやったから子どもが変わるってことではない”っていうこと。でもあの場では、“いやそんなことはない。北村さんはなにかやっているはずや。だからビデオでも撮ってみたら…”なんてこと言われたでしょ。あの時、“そうかなあ”って、何も言えなかったんですよ」

「それ村本さんだ」

「そう、村本さんもやし、尾上さんも…」

「いや、それは、アウラの場を知らないからですよ。場というものがある。場作りっていうこと…。一度見せた方がいいですよ。それはアフォーダンスといえば、アフォーダンスなんだけど、まったく北村さんが、何もやってないということではないと思うんですが…」

「いや、だからあのエピソードは、前に十分に言えなかったことを、書いてみたかったんですよ。私なりに言語化できて嬉しかったんです。ただ、村本さんや尾上さんの思考には、人は自分が何かやらないと変わらないという考え方があるように思ったんです。〈操作する意図〉そこが少し引っかかるんですよね」

「あるかも知れんね。ただ、北村さんは、何もやってないわけではないんですよ。アフォーダンスを形成すると同時に、何かやってる可能性がある。通例の教育的営みのようなものではなく、伝統的で力学的なものでもないんだけれども…。もうちょっと作用としてあるのは…、脱学習ということ。〈Unlearn〉 をやっているんだと思う。〈Unlearn〉 を仕掛けているんですよ」

「〈Unlearn〉?」

「〈Unlearn〉は、鶴見俊輔がかなり言ってるんですが、鶴見俊輔はヘレンケラーから聞いたと言ってるんですよ。〈Unlearn〉というのは、一旦編み上がった毛糸のセーターをもう一回ほぐして別のものを自分で作り上げていく作業だと言ってるんですよ。だから鶴見俊輔は、これを“学びほぐし”と呼んでるんですよ」

「例えば私の話では、具体的にどんなエピソードが、この〈Unlearn〉に該当します？」

「数学の先生の話ね。凝り固まってるでしょ。それを北村さんが〈Unlearn〉させてるんですよ。それからK君の話もそう…。これものすごく、ディープな作業だと思うんですよ。これもアフォーダンスといえばアフォーダンスなんだけど、そういうコミュニケーションをしているなと思うんですよ」

「なるほどね」

「〈Unlearn〉って難しいんですよ。バタラーの教育なんかもそうなんです。妻に暴力をふるわなければいいと思ってるんですが、それは表面的なことなんです。何かパワーとかあるいは自分の持っているリソースで人をコントロールしようと思った時にもうすでに暴力が始まっているんですよ。だからそれは難しいんですよ。そういう人に対して脱暴力を仕掛けられないと社会は本当に脱暴力する力を持てないんですよ。戦争反対なんて、嘘っぽい言い方なんで、まず目の前のバタラーをどうするかという力を持たないと、なかなか平和構築なんて難しいんですよ。だから〈臨床性〉というのがとても大切なんですよ。有形力とまでいかなくても、何か力を行使して相手に何かをさせるというモードって、一般的にみんな持ってるんです。まあそれが経済的報酬に移っただけですよね、企業というのは…。しかし、我々はそういう世界を生きているわけですから〈Unlearn〉っていうのは、とても難しいんですよ。でも北村さんは、それをアウラの中で見事に仕掛けているんですよ。これはビデオにとっても見えてこない」

「でもそれは、私自身が常に〈Unlearn〉しながら生きているということでしょ？」

「まあ、そうですけどね」

「私にとっては、ごく普通のことなんです。作り上げてはまた壊し、また作り上げる。これごく当たり前のことなんです」

「〈脱学習〉というのは、〈脱中心化〉であるといったのは、ピアジェなんですがね。そうそう、だから縁に行かなければならないんです。私、ピアジェから学んだことも多いんです」

「ジャン・ピアジェね」

「〈中心化〉というのは、アイデンティティーの求心力なんですが、それに凝り固まっていくと他者が見えなくなっていくんで、〈脱中心化〉というのが必要になってくると、彼は言っている。社会には絶えずまとまろうとする圧力があって、おまえは誰だとか、やりたいことは何だとか…」

「でもね、私も日々いろんなことやらなあかんのですよ。先生の顔もあるし、塾長の顔もある。経営者の顔もある。それにアウラは家と一緒になっているから、生活者の顔もある。学生の顔もあるし、面談をするカウンセラーの顔もある。行政の会議でのアイデアをプロデュースする顔もある。本当に日々いろんなことをしないといけないんです。それで気を緩めると、すぐにやらないといけないことの山ができる。仕掛状態のことが山になる」

「そんなの私は、いつもですよ」

「先生はいいかもしれないけど、私はいやなんです。ひとつひとつきれいに片づけたい」

「そんなの無理ですよ」

「いや、私はそうしたいんですよ。散らかっているのが嫌いなんです。こじんまりとまとまりたいんです」

「そんなことはないでしょう。そうな風には絶対見えない」

「いや、本当はそうなんです。でもこじんまり収まるかと思えば、それはそれでまた壊したくなる」

「でも、こじんまりは違うでしょ」

「だって修士論文だって、最初はレイブの正統的周辺参加論とノールズの自律学習理論、それとメジローの変容学習理論を適当に組み合わせて書こうと思ってたんですから…。私一人だったら、適当に起承転結をつくって50枚くらいでまとめようとしてたと思うんです」

「ダメだよ、そんなの！」

「私一人ならそうなるって…」

「それは〈Unlearn〉してないですよ」

「だからこんなどこで終わるかわからんような作業は、私にとってはチャレンジングなんですよ」

「いいじゃないですか、答えてくれてるんですから…。こじんまりまとまってないんですから…」

「そういう意味では、私を〈Unlearn〉させてくれてるんですから…」

「いいじゃないですか。修論だって終わらないですよ、一つの通過点ですからね。こうやって出会ったからには、ずーっと続けてくださいね」

「どうなんのかね…」

「これだけたまれば、財産じゃないですか。ただ修論の時は編集しないといけない。ただそれがこじんまりかどうかは、わからない。こじんまりにならなくてもいいんじゃないですか」

というあたりで、今回のオフィスアワーは終わりました。このオフィスアワーも回を重ねるごとに、その内容が濃くなってきている気がします。録音した内容を原稿に起こす量も確実に増えています。でも考えてみれば当たり前のことで、それだけ私と中村先生との共有された領域が増えてきているのですから…。それにしても、二人で時間を忘れて対話を続け、互いにインスパイヤーされながら対話を楽しんでいる中年のおっさんたち。周りから見ると結構、滑稽に映っているのかもしれません。

# 幼稚園の現場から

# V

鶴谷主一

**原町幼稚園（静岡県沼津市） 園長**

◆原町幼稚園では、昨年2010年にはじめて９月に採用試験を行いました。翌年の教員を採用するためです。2009年の採用試験は10月、数年前は12月でしたので、年々時期が早くなってきています。早くしないと先生がいなくなってしまうからです。昨年はとくにひどかったようで、「先生がいない･･･誰かいない？」とぼやく園長に何人も会いました。世間では「就活」に苦労する若者が大勢いるというニュースを横目に、私たち幼稚園経営者は、求人活動「求活！」で苦労していたのです。

以前から、介護や看護などヒューマンサービス系の職種は慢性的な人手不足が伝えられていましたが、私の住む静岡県では、少なくとも幼稚園にも同じように人材不足の波が押し寄せてきているのです。

なぜ少なくなってきたかという推測はあとで述べるとして、私共の教員採用の状況について具体的に書いてみたいと思います。

原町幼稚園では、2001年から計画的な採用試験を始めました。それ以前はのんびりしたもので、教育実習をした学生さんが希望してきたり、知り合いから頼まれたり、いわゆるコネがまだ通用していた時代です。

「ちょっとピアノ弾いてもらえるかな？」ぐらいの実技は行っていましたが、その出来よりも

「あの家の娘さんだからしっかり躾けられているよ、大丈夫。」という古くからの人づきあいの中で、園長が大きな決定権を持っていたのです。

それも悪くなかったんですが、広く募集してより良い人材を採用するには、採用試験を実施することが不可欠です。

◆採用試験の項目

①面接

②楽器演奏

③絵本の読み聞かせ

④リズム

⑤軽いグループディスカッション。

以前は作文や製作も入れていましたが、あまりハードルを設けると最近は敬遠されがちになるため、このところ外してあります。

《5月の園庭を泳ぐこいのぼり・一人１匹作りました》

## ◆採用の手順

ファミリー法人である原町幼稚園と原町保育園では、合同で採用試験を行って採用を決めています。学生には予めどちらを希望するか、あるいは両方エントリーするのか、その場合の第一、第二希望を聞いておきます。それぞれの試験項目で担当教員が評価ポイントを付け、合計したポイントの良かった順に採用を決めていきます。（最終的な決定は園長が行いますが、ポイントはほぼ間違いなく、集まった学生の中から最適な人を選び出してくれます。）

## ◆幼稚園離れのきざし

採用試験を導入してわずか5年後の2005年頃を境に様相がちょっと変わってきました。いま思えば、この頃からなんとなく幼稚園離れが始まったのでしょう。

受験者の人数でみてみると、以前は、２人の採用枠に対して20人以上が受験するという10倍の受験者がいましたが、その数も年々減り、最近は半数くらいになってきています。

幼保の比率を較べても、2005年以前は幼稚園希望者が圧倒的に多く、成績の良い人から幼稚園が採用し、保育園は幼稚園の採用枠から漏れた幼稚園第一希望の学生を採用してきました。この方法は、保育園としても優秀な人材を確保できる良いシステムだったのです。なぜなら、保育園を第一希望にしていた学生のほとんどの人がポイントを取ることができなかったからです。乱暴な言い方をしますと、成績のいい学生は幼稚園、芳しくない学生は保育園、というようなイメージがあったのもこの頃です。

ところが、2006年以降からは、保育園を第一希望に挙げる学生が少しずつ増え始め、成績も良い人が出てきたのです。ただ、全体的に見て受験する学生の力量もじわっと落ちてきているような、そんな印象を受け始めたのもこの頃です。

選べる状況ではないくらい受験生が少なかった年もあり、人材確保に危機感を感じてどんどんと採用試験の日程が前倒しになっていきました。

あまり前倒しになると、次年度の幼稚園入園者数も把握できないうちに教員だけ確保することになり、下手すると、内定取り消しなど倫理上困ったことも今後起きてくるのではないかと思うのです。

しかし、全国で一斉に修正しない限り流れは止められないでしょう。少しでも良い人材を得るためにはこの流れを先取りしていくしかないのです。

## ◆要因を考えてみます

さて、なぜ幼稚園離れか、保育園と比較して見てみるとわかりやすいです。

**要因１：長い勤務時間？**

よく言われているのは、労働条件の悪さ。

給料が安いのはどちらも同じようなものですが、幼稚園は残業が多いというイメージです。

保育園の園児は一日8時間～12時間いるのに対して保育士は８時間勤務で交代シフトがきちんとできているので、わりと定時に帰れます。幼稚園は近年やることが増えてきて、保育準備をしていると、ついつい帰宅時間が遅くなりがちです。園によって違いはあるものの、熱心に教育活動を行っている幼稚園にはたいてい当てはまります。

休日にしても、交代勤務で平日に有給休暇がとれる保育園に対して、幼稚園はほとんど無理です。以前は夏休みなどの長期休暇で年間の有給休暇日数以上の休みを取ることができましたが、最近は夏休みでも預かり保育を行うため、その特典も消えつつあります。（それでも、保育園に比べればまだ休みは多いのですが･･･）

**要因２：気楽に仕事したい？**

次に、仕事の重圧という面でみると、

一クラス20～30人の園児を一人の担任が責任を受け持つ学級担任制の幼稚園に対して、保育園は複数担任制になることが多いものです。たとえば０歳児３人に保育士１人と法律で決められていますので、とくに乳児クラスはチームで担当することがほとんどですし、保育時間が長いのでローテーションで仕事をすることになります。当然新人保育士の責任は軽くなり、精神的な重圧も軽くなるように見えます。

学生が「どちらが気が楽か」という視点で選んだら保育園になるでしょう。実は保育園だって勤めてみれば責任も重圧も感じる仕事だとわかるのでしょうが、人前に出て話したり、自分自身を表現したりという「パフォーマンス」が必要な場面が幼稚園ほど目立たないため、選びやすいのではないでしょうか。

**要因３：ピアノがネック**

最後にピアノについてひと言。日本の幼稚園では必ずと言っていいほどピアノなどの鍵盤楽器を必須としています。「幼稚園の先生はピアノが上手に弾けなくてはならない。」本当か？と言われれば、本当だ、と言わざるを得ません。私の幼稚園でもピアノもしくはギターなどの伴奏楽器は必須です。幼児教育に音楽は不可欠ですし、音楽はある程度技術がないと表現できません。子どもたちに豊かな表現力を身に付けてもらいたい、そう思うと弾けない先生より弾ける先生のほうがいいのです。

ピアノの授業が苦手な学生は、採用試験に難しいピアノ曲が課題に出されていたら最初から幼稚園を希望しないでしょう。

現実問題として、ピアノの苦手な先生が増えています。採用試験にピアノを入れないという園も出てきています。これは、幼児の音楽体験において、あまりよい環境とはいえませんが、教授方法や練習量だけの問題ではなく、子どものお稽古が多様化し、幼少期から鍵盤楽器に触れる人が減ったことも一因であると私は考えています。

《いろんなこいのぼりが楽しいでしょう！》

主に３つの要因について書いてきましたが、不運にも新卒の教員採用ができなかった園ではどうするのか、ついでに考えてみましょう。

ＯＢに声をかけたり、ハローワークに駆け込んだり、それでも教員がいない場合、人材派遣会社のお世話になります。

私は頼んだことはありませんが、残念なことに派遣がジワジワとシェアを伸ばしてきているようです。私は派遣教員を担任として採用することには賛成できません。なぜなら教員の仕事は責任感だけでは不十分だからです。仕事は順調にいくことばかりではありませんので、失敗したり低迷したり、そんなときにも子どもや親と向き合い、途中で放り出さない**覚悟**、１年の終わりにはゼッタイ喜びで締め括る**決心**が必要です。この２つのことだけを取り上げても、派遣の教員にはそこまで要求できないのが賛成できない理由です。

### ◆報酬について

仕事を考えるとき、労働の対価としての報酬が大きな位置を占めるでしょう。普通は要因として最初にあげるべきところかもしれません。しかし、あえて最後に書かせて頂きました。

全日本私立幼稚園連合会が発行している「2010年度　要覧」によりますと、短大卒の幼稚園教諭2種免許所有者の教員初任給（手当含む）は、全国平均月額168,045円。賞与も含めた年収で2,525,368円です。他の職種と比較してもあまり意味のないことだと思いますが、20歳で社会に出て手にする報酬として、それほど劣悪とも言えないのではないかと思っています。（もちろん人を育てるという仕事の重要性からすれば、もっと出すべきだとは思います。）

この金額をどう見るかは、個々の価値観で左右されるところですが、実際に私の幼稚園で働く教職員を見ていると、労働時間や報酬といった数字も目には入るけど、さほど気にしない。そんな感じを受けます。もちろん「少ないなあ、もっと上げてほしいなあ」とは常に感じているでしょうけど、報酬を理由に転職したり、退職した人はいませんでした。(教職員の大半が女性ということも大いに関係があると思います）

報酬のために仕事を選ぶということを第一目的としない人種、それが幼稚園や保育園の保育者であると、わたしは経験上断言できます。

（これをお読みの福祉職の人々も同様だろうと想像しています。）

### ◆イキイキ仕事をする職員たち

私たちの幼稚園でも、仕事は嫌になるぐらいたくさんあって毎日大忙しです。そんな中で一日に何度も笑いが起こり、子どもたちとの関わりで発見や喜びがあり、教員自身も日々成長していきます。

30人の子どもを受け持つ重圧は、自分が30人の子どもを育てられるという喜びに変え、自己表現の場を得てやり甲斐を感じ、楽しそうにイキイキと仕事をしています。

子どもがケガをしたり、ケンカをしたり、泣いて登園を嫌がったり、保護者からの意見にへこまされたりといった悩みのタネもありますが、どんな仕事にもつきもののですから幼稚園に限ったことではないでしょう。

モンスターペアレンツという言葉が使われ始めてから、保護者との対応に恐れをなして教員という仕事を敬遠する傾向もありますが、それもホンの一部。私の園ではほとんどありませんし、トラブルには一

教員が抱え込むのではなく、園長以下全員で対応するというバックアップ体制もとっています。

《年少組はタンポで色をつけました》

## ◆幼稚園教員の魅力を伝えねば！

学生たちにもう一度幼稚園に目を向けてもらうためには、経営的な努力が必要です。

①やり甲斐や喜び、仕事の楽しさ、すばらしさといった表面上に見えてこないものを見えるようにすること。

②新人教員をフォローする体制を提示して安心感を持たせること。

③技術的なバックアップも含めてどんな仕事をしてもらうのか見通しを持たせること。この３つはシステムと情報の出し方を見直せば、ある程度改善できると思います。

難しいのが、

①仕事を効率良く行って勤務時間を適正にする改善。

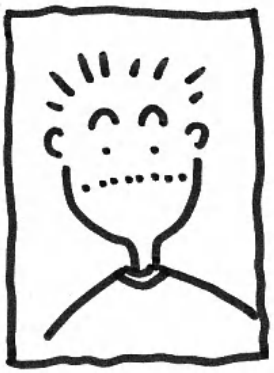
②直接的な報酬や待遇を向上していくこと、の２つですが、園そのものの経営基盤を固めていくことが、根本的な改善につながるのはいうまでもありません。

この解決はなかなか難しいため、教職員に我慢してもらおう、ということになりがちです。

しかし、子どものために献身的に働くことに躊躇ない心意気、いわば「教育者魂」を持った人に支えられている職場だということを忘れてはなりません。

経営者はその気持ちに甘えないように職場環境の改善に努力し、教職員を大切にすること。それが「この職場に就職したい」という思いにつながっていく求活の基本の基本！という結論となりました。あまりにも、あたり前のことですが･･･。

学校法人松濤学園　原町幼稚園
園児約 200 名　６クラス
幼稚園歴 28 年（内園長歴９年）
http://www.haramachi-ki.jp



ツルヤシュイチ

# 福祉系対人援助職養成の現場から⑤

西川 友理

社会福祉士養成教育の必修科目の中に、『現場実習指導』という科目があります。これは、福祉施設・機関における相談援助実習の前後に行われ、実習前には実習計画を立てるなどの準備をし、実習後には経験してきたことを概念化・理論化することで、相談援助の知識と技術を身につけることをねらいとした授業です。この授業の中で、実習中に体験したことについて他者と議論させることにより、学生が一人で考えるよりも深い理解と、広い分野にわたる情報を得られるようにしています。

学生それぞれの実習先での経験を、社会福祉における自立とは何かというテーマで、議論をさせていた時のことです。

「経済的自立とか、身体的自立とか、精神的自立とか、自立っていう状態はいろいろあるけど、自分の事について、何かの形で自分の意思を表明出来ていて、まわりの環境や人がその意見を尊重する状態やったら、自立しているって言ってええと思う。」

この学生は、その人の意見表明権が保障出来ているのならば、たとえその人の着替えや食事に手助けが必要でも自立している、という意見でした。この意見に対し、一人の学生が考え考え言いました。

「…でも、自分で働いてお金を稼げるって大事やよ、やっぱり。お金があれば自由になることって、実際、多いもの。重度障害者や認知症の人でも、何か働いて、自分で稼ぐことができるということは、やっぱり大事や。」

…他の学生達は、考え込みました。

この発言を踏まえて、学生達の議論はさらに進みます。

「認知症の人が経済的自立をするための手段にはどのようなものがあるか。」

「経済的自立の手段を支援することが他の支援と比べて少ないのではないか。」

「そもそも一般的に良いこととして法律に書かれている“自立”って、本当に良いことなのか。」

…等々。疑問は増えていきます。

全ての学生がそうだとは言いませんが、昨今の不況から来る経済的な苦しさが学生達の生活に大きく影響を与えています。

親がなんとか捻出してくれた学費で学んでいるのだから、出来るだけ吸収してやろうと喰らい付くように授業を受ける学生。

親に負担をかけられないからと、一所懸命アルバイトをして、学費や生活費を自分で賄っている学生。

深夜に及ぶ過度のアルバイトで睡眠時間が削られ、睡魔と闘いながら授業を受けている学生。

学生達がこのような状況にある今の社会情勢において、社会福祉の専門教育の場では“自立”と言う概念が最も重視され、“自立支援”という言葉があらゆる場面で登場します。障害者、低所得者、ひとり親家庭、高齢者、要養護児童…。どのような分野でも、自立を目指した支援が大切と説かれます。当然、経済的な自立も重視されています。

また、2 年前、社会福祉士養成カリキュラムの改正により、『福祉サービスの組織と経営』という科目が社会福祉士の国家試験の科目に追加されました。これはその名の通り、福祉サービスを行う団体、社会福祉法人やＮＰＯ等の組織構成や、経営、人事管理などについて学ぶ科目です。

『福祉サービスの組織と経営』の具体的な内容が厚生労働省から発表された当初、福祉系専門職養成の教員の中には、「これからの専門職教育として必要だってのはわかるけど、こんなことまで教えなきゃいけないのか！」と驚いた人が多くいました。しかし学生達は、私達が驚いたというエピソードを話しても「将来施設に就職するとしたら、こういう事を勉強するのは当たり前やん。なんで先生達は驚いたん？」と、きょとんとしています。

「だって十数年前、私が学生の頃は、福祉の授業では、お金、特に経営に関する話なんて、ほとんど教えてもらってなかったし、そんなん聞けへんかったもの。」と、言い訳をしたくなります。

## ■私が学生時代に受けた授業にて

十数年前、当時の福祉専門教育でも、社会保障制度や財政についての勉強はありましたが、職員の給与体系や、措置費・事業費、障害者の収入等について詳しく勉強する機会は、それを専門とする研究者の集まり等以外にはありませんでした。そのくせ社会福祉職は低賃金であるという事や、障害者の収入の低さについての認識は、誰もが持っていたと思います。

当時、学生であった私が授業でよく聞いた言葉は「地域」です。地域において、地域の力を活用し、地域住民の協力を得ながら、在宅福祉などを展開していくことが大切と、授業中何度も聞かされました。

当時ならば、重度障害者や認知症の人の経済的な自立について、先ほどのような議論をした場合、

「経済的な自立が出来るかどうかなんていうことより、地域において、その人らしい生活ができるかどうか、という事こそが大切だ！」

というあいまいな結論でうやむやに終わっていました。たとえ福祉サービスの利用者が経済的に豊かになる必要性に気付いたとしても、経済的に豊かになることが必要、と学生が口に出すことは、何だか少しためらわれる事でした。福祉に関わる事で、お金にこだわるのは、はしたない事、ちょっと気が引ける事、という認識が当時の学生達にはあったためです。

さらには、福祉系の専門職の方の中にも、

「社会福祉の現場で働く人間はお金に疎くていい、むしろそんなことを気にする奴は、社会福祉分野に来ないでほしい。」というようなことを言う人もいました。

「別にお金が欲しくてやりたいわけではないんです。」「お金よりもやりがいに賭けて、私は福祉の仕事をしたいんです。」福祉職に就職を希望する学生はこのように言っていました。

あの時代、確かに「不況だ」「就職氷河期だ」とは言われていましたが、現在と比較すると、それほど社会全体が経済的に深刻な状況ではありませんでしたし、学生が「お金がないよ」と言う時の多くは、遊ぶお金がないという状況を指して言う時でした。

だからこそ、「そうは言っても、自分で働いてお金を稼げるって大事やよ。」というような意見を出す学生が出てくることはめったにありませんでした。

私が学生だった頃と、現在とでは、何が一番違うのか。それは、社会の経済状況です。社会から、社会福祉に配分されるお金の状況が変化したため、社会福祉にかかわる人も、社会福祉に対する考え方も、社会福祉制度も、福祉系の学生も変化しました。一般的に、物事を始める時には、ヒト・モノ・カネが必要と言われますが、カネの変化がヒトやモノまでも変化させたのです。

## ■社会情勢への対応

太平洋戦争が終わり、国民のほぼ全てが生活苦にある状況でした。

1950 年代半ばまでは、社会福祉分野には、福祉政策というより“救貧施策”といった活動の仕方が求められていました。

1960 年代の高度経済成長期には税収が増え、国民皆年金・皆保険体制といった現在まで続く基本的な社会保障システムの整備がなされました。一方で高度経済成長の波に乗り切れない人たちへの対応が喫緊に求められ、社会福祉への財投資金の絶対量が増加し、多くの福祉施設が作られました[注1)]。当時の社会福祉は“とにかく施設や事業を作って、対応すること”が重要であったようです。

1970 年代には、オイルショックが日本の社会福祉を大きく転換させました。これにより「個人の自助努力や家庭・近隣・職場・地域社会等の連帯を基礎とし，効率のよい政府が適正な負担のもとに公的福祉を推進する」“日本型福祉社会論”が生まれました[注2)]。

1980 年代には、高度経済成長のひずみとして生まれた地縁の崩壊への対応として、また日本型福祉社会の形として、“地域福祉・コミュニティの活用”が注目されるようになりました。

1990 年には在宅福祉サービスが法制化されて、地域福祉がより具現化されるようになりました。介護保険法成立前後には、“地域における在宅福祉サービス”をどのように実施するか、という話が社会福祉の現場では一番注目されていました。

1990 年代半ばにはバブル崩壊による不況が浸透し、この時期、社会福祉基礎構造改革にむけての準備が進みました。

2000 年代には、社会福祉事業法が社会福祉法へ改正され、基礎構造改革の具体的な姿が現れます。福祉サービスの質の向上や地域福祉の重視といった点に加え、改革の大きな柱として“自立支援”が掲げられ、以後の社会福祉施策には、ほとんどこの概念が入っていきます。国全体の動きを見ると、地方分権一括法の成立や三位一体の改

革などが行われ、とにかく“できるだけ小さい単位で自助努力し、自立を目指す、どうしても無理な時にはセーフティネットを活用する”というシステムが作られていきます。

バブル崩壊からの長引く不況の中、社会保障費は削られ、社会全体的にかなり疲弊しつつも、こつこつと国力を回復させてきていた日本でしたが、2008年のリーマンショックや、政権交代による政策の混乱などにより、先行きが不透明になっています。そこに追い討ちをかけるような、東日本大震災と福島の原発事故です。日本経済の復興は、さらに暗中模索の状態にあり、これから先どうなるのという不安が付きまといます。

現在、社会福祉専門職は、従来の高齢・子ども・障害・低所得といった分野だけではなく、更生保護や労働問題、教育といった分野にまで進出するようになり、どの分野でもやはり自立のための支援という考え方が中心になっています。平たく言えば“社会人として税金を納められる国民を一人でも増やす”という事が、社会福祉に求められているように思います。

このように、制度上必要と訴えられる社会福祉の支援は、社会情勢によって変化します。これらに対応し、私たちが学生に行う教育も変化していくのです。

## ■専門職教育で大切にしたいと思う事

最近、高齢者の施設にお勤めの方と話をしていると、経済の視点から物事を見た話をすることがずいぶん増えてきているのを感じます。障害者の就労継続支援事業所[注3)]の職員の方々からは、販売するものを作っている所が多いことから、なおさらお金に関わる話を聞かせていただけます。１円にこだわって、収益にこだわって…。[注4)]

「毎日企業や町工場に営業してますわ。これが『福祉の現場かよ』って思いながらね。」

「でも、うちがなくなったら、利用者さんの日中の生活の場がなくなりますやん。それだけは避けなあかんでしょ。」

と苦笑いをする就労継続支援事業所の職員さんにもお会いしたことがあります。

社会情勢に対応して、柔軟に変化するためには、確かな理念がないと、支援の方向を見失ってしまいがちです。この事業所にとって、利用者さんの日中の生活の場を確保する、という思いは、時流が変わっても、大切にしなければならないのだと思います。

社会情勢に対応することも大切ですが、理想とする福祉は何だったか、理念は何か、何を目指すべきなのか。それらを今の時流に合わせて、どのように現実の支援につなげるのか。これらを考えあわせる力が必要になるかと思います。

福祉の支援のあり方を木に例えて考えてみます。まず“要望”という種があります。種からは“根拠”という根っこが生えて、その木全体を支えます。木の幹は“理論”であり、枝葉は“援助技術”です。やがてそれらを元に“理想”という花が咲き、このプロセスを経てやっと、きちんと利用できる“支援”に結実します。その実の中には、新たな“要望”があります。これを繰り返して、徐々に大きな森へと繋げていくイメージです。木に根がなければ幹はありえませんし、花が咲かなければ実は出来ません。どれが欠けても、支援は出来ません。

いい福祉職になりたい、早く支援が出来るようになりたいという学生は、とにかく一足飛びに支援の実を得たいという思いが

強いようです。また、実際の社会情勢と理想の間に大きな隔たりを感じ、要望や理想から支援が生み出されることは難しいのではないかと考える学生もいます。

そこにあるのは今の時代に適合した実だけに見えても、その背後には、しっかりと種も根も幹も枝葉も花もあるのだという事。逆に、種も根も幹も枝葉も花もあるのなら、どんな社会情勢にあったとしても、結実させる手段はあるのだという事。これらを教えることで、夢をしっかり描いて、社会情勢にあわせた支援ができる専門職を養成していきたいと考えています。

## ■私はといえば…

十数年前、社会福祉現場に就職が決まった矢先の私は、社会福祉分野に関わるお金について、ほとんど何も考えていませんでした。

家族で私の就職先について話している最中、給与のことを聞かれ、

「福祉の現場ではお金の話はあまりしないみたいやからねぇ…。」

すると、福祉分野とは全く縁のない仕事をしている父から、

「お金の話をせえへんのやったら、なんでお給料もらって働いてるの。ボランティアでやったらええんちゃうの。仕事として“ええこと”をする人は、その辺どう思ってるの。」

と、不思議そうに言われました。

私はなぜか急に恥ずかしくなり、父の質問に応えられませんでした。

その時は何が恥ずかしい事なのか解らなかったのですが、今振り返ってみると、父の言葉によって、

「あ、そうか。お給料をもらってやる“仕事”なんだ。」

と、初めて気付かされたのです。

給料が労働の対価であるという意識がないままに仕事を始めようとしていた自分の無責任さに気付かされたのだと思います。生活にかかるお金について心配せずに生きて来れたからこそ、考えずにいられたのですから、その境遇を支えていただいた父には感謝することだと思います。

我ながらなんと世間知らずかと思うと、本当に恥ずかしいと感じたのでしょう。

“労働に対する責任と義務。対価として給与を得るという権利”

“理想としてだけではなく、実態ある仕事として社会福祉を捉える”

こういった事柄を考えるきっかけになりました。

このような気付きを、学生にも与えられたら、と思います。

何かの拍子に今でもふと思い出す父の言葉です。

注１）厚生白書（昭和 46 年）

注２）新経済社会 7 ヵ年戦略（昭和 5４年）

注３）就労継続支援事業所：就労の機会を通じ生産活動にかかる知識及び能力の向上や維持を目指す、就労継続支援という事業を行っている事業所の事です。障害者自立支援法に規定されており、利用者との雇用契約があるＡ型と、利用者と雇用契約を結ばないＢ型があります。

注４）そういえば、このマガジンの編集者である千葉さんの連載も、『１工程・１Ｙｅｎ』というメインタイトルですね。

# 我流子育て支援論

# ～ 学 童 期 ～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

桜の季節になると思い出す歌がある。「桜咲いたら一年生～」の歌である。

子どもの入学は、小学校でも中学校でも新しい緊張感があり、不安と期待が綯交ぜになるのが一般的な親の反応であろう。特に小学校は、幼稚園とは違い、勉強をしたり、自分で登下校するなど、成長感を感じられる。しかし、昨日まで、園バスで送迎され、園によっては余り強制されることもなく、自由な空間で遊び中心の生活をしていた子どもたちが、いきなり変われるはずはない。いわゆる小１ギャップの問題である。

学校が始まった直後は給食もないので幼稚園より早く帰宅する。殆どの子が幼稚園や保育所で給食や弁当を経験している中で、学校に慣れるまでは給食が無いというのも、前時代的な感じがしないでもない。保育所でも入学に向け午睡をなくすなど、適応力を付けさせているのに、何故給食を最初から出さないのかと、保護者の中には不満をもたれる方も多いと思う。しかししばらく経って給食指導が始まったところで、クラスに入ってみると、それはもう戦争状態である。

エプロンやキャップが付けられない、お盆にものを乗せて運べない、じっと座って待てない、こぼす、ひっくり返す、ぶつかる・・・。給食の配膳が出来て、「いただきます」をするまでに時間がかかりすぎて、食べる時間が足りない。そのため最初はカップなどに入れる量を加減して、少なくしている。それでも大変である。

毎日の指導効果で、１週間、２週間経つ内には、整然と配膳作業が出来るようになってくる。この指導を学校が始まって直ぐ実行するのはやはり難しい。

第一、授業時間の４５分間をじっと座っていられる子が少ない。集中力はせいぜい１０分、１５分。テレビのコマーシャルが入るまでの時間程度しかもたない。先生方も一生懸命工夫して、間に歌を入れたり、体を動かしたり、何とか集中が続くようにしている。それでも、以前に比べ、落ち着いて生活できるようになっているのは、小１ギャップを意識しての取り組みが、幼稚園や保育所でなされているからであろう。

さて、小学校に入って直ぐ問題になるのは、登校しぶりである。母親が一緒なら登校できるからというので、一緒に登校するが、結局離れられず、一日中母親にいてもらうケースも結構ある。

このタイプは決して目新しいわけではなく、昔からある。特に小さい弟や妹が家にいて、自分だけが学校に行かなければならない場合や、甘え足りない場合などでは起こりやすい。

しかし最近見られるのは、やけに不安が強く、環境の変化になじめず、小学校入学から２-３年生まで母子分離が出来ないなど、長引くケースである。もちろん発達障がいの要素も否めないし、実際に診断を受けたケースもある。ただ、発達障がいがある無しよりも、母親の大変さを受け止めながら、少しずつ分離に向けどのように支援したらよいかの方が大事であろう。

毎日学校に付き添わねばならないことは、下に弟や妹がいる場合など、本当に大変である。仕事も辞めなければならないこともある。母親は最初は頑張るものの、段々疲れてくるし、ちょっと様子が良くなると、もう大丈夫なのではと母親の方が離れようとして、以前より悪い状態にしてしまったりする。

また、このタイプでは、長期の休みの後など、戻ってしまうことが多く、母親はその度にがっかりしてしまう。

そんな母親の気持ちに共感しつつも、「あと少し」と繋げて行くには、定期的に面接をして、頑張りを認め、小さな変化を共に喜び合うことが必要になる。子どもは着実に変化し、成長していくことを分かっていれば、支援者は、母親の焦りを抑え、どんと構えて、支えることが出来るだろう。

小学校入学後で次に相談が多いのが、友達関係のトラブルである。

友達が出来ない、意地悪される、乱暴だと言われるなど。我が子の発達障がいを疑う親もいる。

初めて子どもを学校に入れた母親は、学校から帰ってきた我が子に「学校どうだった？嫌な事されなかった？意地悪されなかった？」等と矢継ぎ早に質問する。子どもはその都度、何かしら答えなければならない。ちょっとしたことも報告してしまうことになる。大事な我が子のこととなれば、過敏に反応するだろう。それが更にエスカレートして、保護者同士のトラブルになることもある。保護者が心配なのは分かるが、過保護、過干渉の弊害を伝え、聞きすぎないようにすることが大切である。

また、冒頭に挙げた歌の続きに「友達百人できるかな？」という部分があるが、１年生の子が、筆者の所に「ともだち百人できない。」と半べそで来たことがあった。百人も友達が出来るはずがない。その「友達」の定義は一体何なのか？「２

０世紀少年」の「ともだち」と重なる気持ち悪さを感じてしまうのは筆者だけか？

「ともだち」は数人できれば十分。クラスの単なる同級生と「ともだち」は違うからと小学校１年生の相談者には伝えたが、こういう細かいことまで伝えていかなければいけない時代なのだ。

乱暴の問題も同様だ。ちょっと小突いただけでも、言語表現の未熟な子どもでは、「突き飛ばされた」となってしまうこともある。わざとぶつかったわけでなくても、「わざとやられたの？」という質問に「うん」と頷いてしまったりもする。勿論、本当に乱暴な子もいるので、よくよく状況を確認しなければいけないが、「乱暴な子」とレッテルを貼られた子は、相手が先にしかけてきても、手を出してしまうために「悪い子」にされてしまい、その悪循環で益々「悪い子化、乱暴な子化」して行くのである。例を挙げてみよう。

先日、クラスの子が「A 君がいて、乱暴で怖いから学校に行きたくない。」と言ったからと、「乱暴な A 君」が問題児扱いされ、一方的に保護者が責められ、困って相談に来た。

本当に「A 君が一方的に乱暴なことをして居る」のだろうか？A 君とその保護者の面談をしてみると、確かに A 君は言葉での表現が下手で、手が出てしまう子だが、それ以前に、A 君にとって嫌なことを言われたり、されたりということがあって、その結果として、手が出たということが多いとわかった。低学年では、周りの子に様子を聞いてもはっきりした状況が確認できることは少ない。したがって、先生方は、手を出してしまった A 君の方が悪いと言うことにしてしまう。事情を上手に説明できないために、上手く説明できる相手の言い分が通ってしまう。そんなことが度々ある様に思う。

こうして、「乱暴者」の烙印を押された A 君は、益々乱暴を働き、保護者は呼び出されたり、電話で報告を受けることが繰り返され、「電話恐怖症」のようになってしまった。更に悪いことに、保護者も A 君を叱るようになり、悪い循環に入ってしまったのである。

保護者の関りを叱るより褒めるように変え、ちょっと母子密着型にしてもらい、本児と筆者との話し合いで問題の外在化を図って、本児はあっという間に変わった。集団での問題行動もほとんどなくなったのである。この子には発達障がいがあったが、そんなことは関係ないのである。

この様に、ちょっとした大人の対応で、子どもは大きく変わるということを支援者は知って置くべきである。当たり前のことなのに、大人である支援者や保護者が誤った関わりをしてしまい、困った子を作り上げてしまうことに気をつけねばならない。

小学校で次に問題になるのは、やはり発達障がいの問題であろう。

発達障がいについては、文献も沢山出ているし、研修も繰り返し行われているので改めて言うまでもないと思っていたが、未だに、「発達障がいって？」という先生がいらっしゃるのには参る。ある生徒指導の先生は発達障がいの子ども達の行動を「甘え」と表現し、「厳しくしつければよい」と怒鳴りつけ、二次障害を起

こしても気付いていなかった。こんな先生は滅多にいない。むしろ、「良くここまでやってくれる」と感心するような、きめ細かに見てくれる先生が増えてきた。大変だろうが、こうした先生のお蔭で、多くの発達障がいを持った子どもが楽しく学校生活をおくれている。

幼児期から発達障がいの診断を受けている子はともかく、学校に入ってから、発達障がいが疑われるようになった場合、保護者にその理解をしてもらうのは一苦労である。そのまま「お子さんには発達障がいの疑いが・・。」と言おう物なら、一気に「うちの子が馬鹿だって言うんですか？」と攻撃されてしまうだろう。そんなことは言っていなくても、そういう風にとられてしまうことは多い。

そこで、筆者の場合は、まず、子どもの様子を見せてもらったり、担任等から状況を聞いてから、保護者面接を行う。じっくり子どもの家での様子などを保護者から聞き取り、ちょっとでも困っているところが出されるのを、気長に待ったり、或いは学校の先生と連携して、子どもの困った行動を少しずつ保護者に伝えていくことで、困っていただき、「子どもの発達にはバランスの悪さがあることがままある」と説明する。もし、家では困った行動が無いというのであれば、「どういう風に関わったら良いのか教えて欲しい」と言うのも良いだろう。保護者が一番子どものことを理解していると言ってあげることも、保護者のガードを剥ぐには大切である。

関係性がうまく出来たら、最後に、「子どもの全体の様子を確認することで、子どもにどのような支援が必要かを知りたい」と言うことで、保護者に納得して貰う様にしている。保護者の頑張りを認め、保護者のせいではなく、子ども本人の性格であると言うスタンスで伝えることがミソかもしれない。とにかく、「保護者と仲良くなる」「保護者の味方になる」ことが第一なのである。そうすれば、ずばり言っても関係性は保てる。

時には「父親がそっくりで」などと母親が語ることがある。そういう場合は申し訳ないが、お父さんに悪者になってもらい、「お父さんと関わるの難しくないですか？」「お母さん大変ですねえ」などというと、母親とスクラムを組める。

更に虐待問題がある。

学校で多いのは暴力とネグレクトであろう。暴力には言葉の暴力と身体的暴力があるが、身体的暴力については、痣ややけど痕や切り傷などで気がつく。証拠の写真を撮ったり記録を細かく記載するなど、その際の手順は決まっている。保護者が「多少の暴力は躾で、自分も子どもの頃殴られて育った、だから虐待ではない」と主張することも想定内。こちらがいくら「それは虐待」と言っても受け入れてはくれない。そんな時は、「お母さん（お父さん）も叩かれ、虐待されてたんですね、嫌だったでしょう？辛かったですね。」と言うと、比較的こっちのペースに乗せやすい。

虐待通告は義務付けられているので、学校で明らかな身体的虐待が放置される例は少なくなった。しかし、言葉の暴力や心理的虐待、性的虐待については、立証も対応も難しい。慎重に、子どもが語る言葉を積み上げて、記録をとっていくことが通告前に必要であろう。

又、ネグレクトでも、保護者に能力がない場合のネグレクトと意識的なネグレクトは違う。保護者に能力がない場合は、保護者に一つ一つ丁寧に教えていかねばならない。意識的なネグレクトは当然虐待として通告せねばならない。

ただ、まだ日本では、虐待に関するプログラムが十分出来ていないし、法的効力も余りにも弱い。被虐待児をどう支援するか、虐待者をどう再教育するかなど、早急にしっかりした法的効力のあるプログラムを作成する必要があるだろう。それまでは、我々支援者が子どもの立場で、子どもを守るための最大限の努力をするしかない。それには、学校、行政、児童相談所等、関係機関の連携が大事である。情報共有をしながら、子どもをいつ、どの様に保護するか、或いは、保護者に誰が、話をしていくか、早急に且つしっかりと検討し、実行していく必要がある。

虐待については、あちこちでリーフレットが配られ、要保護児童対策連絡協議会などで学ばれているので、此処ではこの程度にしておきたい。

今回最後に書きたい、小学校前半での大きな問題が「ゲーム」である。

ちょっと前はテレビの問題が大きかった。見せっぱなしとか、テレビに子守をさせるとかである。勿論今もこの問題がないわけではないが、それより大きな問題となっているのが「ゲーム」である。

今子ども達の殆どが DS（任天堂で出している携帯型のゲーム機）を持っている。学校から帰ると、公園にゲームを持ち寄って遊ぶ。ゲームを持っていない子は入れない。ゲームを使って通信をし、データを交換するなどしているからである。

そればかりではなく、家でも、WII や PS な　ど、ゲーム機は多く、小学 1 年生でもゲーム脳になっている子を見かける。姿勢も背中が丸まり、正中線を真っ直ぐ保つことができない。ゲームをするとき以外は、ボーっとしている。ゲームに使う時間を保護者が制限している家も多く、大体が３０分から２時間の範囲であるが、一方で、やりたい放題の家もある。保護者も、子どものことをそっちのけでゲームにのめりこんでいる場合もある。そんな保護者では話にならないが、それでも支援者としては、「保護者がゲームをするときは子どもが居ない時間や寝ている間に」と伝えるべきだろう。

ゲームは、楽しめるように、のめりこむ様に作られている。そのゲームの誘惑に勝つのは並大抵のことではない。相当な意志の強さが要求される。そんな強さを子ども達につけるためには、まずは保護者たちに子どもの声に負けない強さを身に付けて貰わねばならない。

子ども達は、あの手この手で保護者に取り入り、何とかゲームをできる様にしようと頑張る。「お手伝いしたら、ゲーム時間 30 分伸ばして」「テストで 100 点取ったから、今日は 1 時間いいよね？」などなど。子どもも必死だから色々と思いつくし、親の痛いところをついてくる。こういう駆け引きには長けており、「延ばしてくれないなら、もう勉強しないよ」とか「手伝いしない」などと脅して、保護者に何とか OK を出させようとさえする。

小学校低学年の子どもの言いなりになるような保護者では、この先の思春期の

子どもと向き合えない。子どもの言葉に乗せられない様に、ゲーム以外のことにすりかえるしかない。

「鉄は熱いうちに打て」という言葉どおり、低学年のうちにきちんとルールを守らせねばならない。ゲームを与える時点で、ルールを決め、例外を作らないことが大切であり、そのことを、保護者にしっかりと伝えることが支援者の使命だと思う。

次回は小学校後半期の子育て支援について書いてみようと思う。

## 不妊治療現場の過去・現在・未来

連載5

# ～顧みてみつけたもの～

荒木　晃子

### 「いま、あなたにきいてほしい」

苦しそうに顔をゆがめ、答えにくそうに「う～ん・・」と唸るＢ子さん。自責の念を覚えた筆者は、問いかけた質問を撤回するつもりで､｢もし､話しにくいことならば､無理をしないでくださいね。話すことが辛いと感じるならば、この辺で終わりにしましょうか？」あわててそう尋ねた。彼女はこたえた。

**「（前略）もし、あなたからみて、私が辛そうに見えるならば、それは、その頃の私の姿だと思って頂戴ね。私は、いま、あなたにきいてほしいと思ってるの。だれも聞こうとしてくれなかった話を。それは、私が一生懸命、母になろうとしていた頃の話だから」**

うかつだった。彼女は聴いてほしかったのだ。目の前に映る彼女の笑顔がくもり、快活な語りが止んだことに戸惑いを覚え、その真意を汲み取ることができなかった。苦しそうな表情と、ことばに詰まり、話すことが辛そうに見えた目の前のＢ子さんは、過去を振り返り、その頃の自分の気持ちを探していたのだ。視覚にまどわされた自分の力量不足が、いまさらながら悔やまれた。Ｂ子さんにとって、不妊体験を語るということは、母になろうとしていた頃の自分を語ること。母になれず、妻でいることもできなかった自身の体験を、彼女はこれまで、だれにも語らずに生きてきたのだ。

**「私は、いま、あなたに聴いてほしいと思ってるの」**

このことばが筆者の背中を押した。いまこの瞬間、Ｂ子さんと共有するこの空間に根を下ろし、こころあらたに向き合わねば、そんな気持ちでわが身を正す。その時、ふ

たりの間に降りていた幕があがり、あらたなステージが広がったと感じた。

## 聞き手と話し手の関係

生殖革命とは「だれの福音か」を再三問うておきながら、聞き手として自分が未熟であったことを恥じた。生殖医療に不妊の解決を求めるという心情の根底には、母になりたい女性の切なるおもいが込められていることを知らない自分ではなかったはずだ。本連載２号「生殖革命の物語エピソード①」以降、福音を聞いた女性として語り続けるＢ子さんが、冒頭語っていたことを思い出す。

**「50 歳になり、子どもを産むことも育てることももう悩む必要がなくなったわ。不妊に悩むことがなくなる日が来るなんて、今まで考えたこともなかった」**

そうなのだ。Ｂ子さんが時折みせる苦しそうな表情は、かつて経験した不妊体験を振り返るとよみがえる追体験によるものだったのだ。

**「確かに、その頃の私にとっては辛かった。ことばにできないくらい苦しかった。でも、今の私は、もう苦しくない。」**

目の前の彼女は知っていた。その頃の自分と現在の自分の違いを。子どもを産むことも育てることも悩む必要がなくなったいま、あらためて尋ねられた「だれの福音か」という問いかけに、かつて自分が母になりたかった頃に「母として聞いた福音だった」と伝えたかったのだ。

Ｂ子さんの場合、結果として子どもができなかった。それを知っている筆者は、“わたしにとっては福音だった”と答えたＢ子さんの“わたし”を“母”へ置き換えることなど考えが及ばなかった。さらに、その後離婚し、かつてパートナーであった男性に“その頃のおもい”を確認できない現状では、「夫婦にとって福音だった」とする以外、Ｂ子さんには答えようがないのであろう。なんと、配慮のない問いかけだったのだろう。再び、自責の念にかられる。聞き手である自分自身が、生殖医療というまばゆいばかりの最先端医療の栄光に目がくらみ、その渦中に自身のからだをゆだね母になりたいと願いを託した女性の姿を、危うく見失いそうになるところだった。その危険性に気がついた時、「我に返る」－まさにその言葉通りの体験をした。

## 「聴く」を顧みる

自身も不妊治療経験を持つ身であるがゆえにできる（と思っていた）気配りと配慮を前提に、気負いのない立ち位置で向き合ってきたつもりの己を顧みる。間違いなく、不妊と共に生きてきたという自負が招いたともいえる失態だ。あらゆる領域のピア・カウンセリングの際によくある失敗事例とも重なる。

ピア・カウンセリングとは、同様の経験をしたピア（＝仲間）が、自分の経験をもとに、いま、同じ悩みで苦しんでいる方の話に傾聴することをいう。話し手からすると、同様の経験を持つ仲間に話すという安心感からラポールは成立しやすく、また聞

き手も同様で共感しやすい。反対に、同調や同情といった、援助関係を阻害する感情に聞き手が支配され、それが話し手に向かうと相手を傷つける要因となる場合もある。また、聴き手であるピア・カウンセラーが自身の問題を解決できないまでも、受容することができないままでピア・カウンセリングを行う際には、十分な注意が必要となる。なかには、話し手の経験が、自身の経験と重なり、話を聞くことで自分の問題を追体験し、共倒れする危険性もあり得る。さらに、トレーニングの少ないピア・カウンセラーの場合、自分が経験したことのない悩みに対応できないケースがある。例え同様の経験があっても、起きた事象の捉え方はひとさまざまであり、必ずしも共感できるとは限らない。特に、果てしなく結果を求めることができる生殖医療には、個人の体験にはとどまらない多様な選択肢を理解する必要があろう。自身の不妊体験を「聴く力」の資源のひとつにかえる－この意識が大切なのだ。

一般に、話を聞くためには、“聞き手がききたいこと”を話し手に求めるインタビューやアンケート、もしくは事情徴収などの調査時に用いる手段もある。ただし、この場合、事前に話し手の承諾を得たうえでの関係が必須である。逆に、話し手が“聞いてほしい”と願う動機がある場合は、聞き手の了解が必要だ。いずれも、はじめに、聞き手と話し手相互の関係を明確にすることで、その関係性が確立される。そのなかで両者が互いに、聞くことも話すことも十分にできる関係をつくることが、聞き手としての最初の役割なのだろう。

ときに、“話し手が話したいこと”と、“聞き手がききたいこと”との齟齬は、あらゆる援助場面における失敗の芽につながる可能性がある。聞き手は、まず、“話し手の話したいことをききたい”、という前提で耳を傾けなければ、援助関係は始まらない。それが人を援助することの基本スタンスなのかもしれない。しかし、状況によっては、聞き手が“話し手に何を求めるのか”を明確に提示することが有効な場合がある。たとえば、生活の為に必要な援助ニーズを知りたいときや、医療現場で治療中の患者に、限られた治療手段のなかで選択と決断を求める際などである。これらは、すべての人に与えられるべき生活の保障と、からだとこころの安全を脅かす恐れのある状況にある人々に対する援助が必要な場面だ。精神科と生殖医療現場で心理士として勤務する筆者はこれまで、自分はその選別と伴うリスクを知っているはず、そう思っていた。「援助者の“おごり”は、結果として人為的ミスにつながる」。今回ばかりはその典型となりかけた、反省しきりの出来事だった。援助関係において、顧みることと、仕切りなおすチャンスを見極めることは常に重要だと肝に銘じ、彼女と共にまた一歩、前に進むことにした。

## 「生殖革命の物語」エピソード②

## 妻以上母親未満

**「母親になりたかった・・そうね・・確かに、私はかつて・・母になりたいと、本気**

**で思っていた・・・それは間違いないわ」**
以前より穏やかな表情で、ひとつひとつのことばを確かめるように、時間では測れないほどの間を置きながら、B子さんは再び語りはじめた。
**「でも・・ちょっと、待ってね・・・」**
眉間を狭め、右に首を少し傾け視線を落とし、ことばが止まる。
　数十秒、いや1分は過ぎただろうか、目線をあげ、まるで意を決したようにことばが続く。
**「はじめは、そう、不妊治療を始めたころは、自然に自分が妊娠することが、治療の目標だった。夫婦仲はどこよりもよかったしね！」**
はにかみながらも自慢げに、満面の笑みを浮かべたその笑顔は、かつては夫に向けられていたのだろう。そこには、おそらく幸せな結婚生活を送ったのであろう若き日のB子さんの面影が浮かんでいた。反射的に微笑み返す自分もまた、どことなくうれしかった。
**「他の人もそうなんじゃないのかしら？不妊治療に通院する最初のころは、だれでも、“自分で妊娠して出産したい”と思って受診するはずよ。よほどの事情がない限りね。私もそうだったもの。自分と夫以外の子どもを妊娠するなんて、考えもつかなかった。でも、今では、夫以外の男性から精子の提供を受けて妊娠する人や、自分以外の女性から卵子の提供を受けて妊娠し、自分のおなかでその子を育てることができるようになったんでしょう？すごい世の中になったものよね～！？」**
合意を求めるように、まっすぐに筆者の顔を見つめた彼女は、現在の快活なB子さんの表情に戻っていた。精子提供については、本篇第2号「注目されなかったトピックス」で解説したように、国内では62年前から法整備の後実施されている技術である。B子さんにそのことを確認すると、**「あることは知っていたが、自分には考えられない治療だ」**と即答が返ってきた。
**「あ、でもね、考えはひとそれぞれ。事情も十人十色でしょう？私たち夫婦の不妊原因はどちらにもなかったけれど、もし、夫に原因があったとしたら、その選択肢が必要だったかもしれない。その場合、夫がその治療を望むかどうかだけどね～でも・・もし、夫が望んだとしても、私がそれを承知するかどうかは自分でも疑問だわね～もちろん、私から望むことはないと思う。夫以外の、“知らない男性の子ども”を自分のお腹のなかで十月十日育て産むことは、私にはできないもの」**
以前、治療していた頃に考える必要のなかった問題を、今「たら、れば」で聞くことが、いかに愚問かを知っていた私は、何も言わず、ただうなずくしかできなかった。

## 行き場のない母のこころ

**「あのね・・ある晩夫が珍しく泥酔して、私が一睡もできなかった日のことを話したでしょ？」**
上目づかいに、うかがうような仕草で声のトーンを下げ、彼女の話はつづく。
**「あれから、私の何かが変わったと思うの。なんていったらいいのかな・・あせるというか、意地になるというか、気合が入ると**

**いうか。そういえば、病院に行くと『先生、ほかに何かできることはないんですか？どこか、私にもっと悪いところがあるんじゃないですか？』と主治医に尋ね、看護師さんには『他の人はもっと早く妊娠するんじゃないんですか？自分だけがこんなに時間がかかるのはなぜなんですか？』と泣きながら訴えたこともあった。すると、主治医は決まって『それでは、もっと検査してみましょう』とか、『もっとよく効く薬を試してみましょう』と答え、さらに投薬や注射が増え、検査や通院の回数が増えることになった。顔を見ればいつも泣いてしまうので、それまで優しくしてくれた看護師さんは担当をはずれ、話を聞かず事務的に処置を済ます看護師さんにかわったりしたこともあったし・・。きっと、主治医の先生も、優しい看護師さんも、私にどう対応していいのか分からなかったんでしょうね。いまから思えば、自分で自分の首を絞めたって感じかな？自業自得って言えるのかもね！だって、自分でもどうしたらいいのか、なぜ涙が出るのか分からなかったほどだもの。いくら先生でも、看護師さんでも、迷惑な話よね～」**

もし、患者が病院で泣くことを迷惑におもう医療者がいるとするなら、彼らは生殖医療に携わるべきではないだろう。自分で自分の状態が理解できない。これほど不安なことはない。ましてや、通院する患者に対して、治療する役割を担う立場にある医療者は、通院する患者の痛みを緩和することも医療行為のひとつだ。なのに、なぜ、彼女は「自分が泣いたことが医療者にとって迷惑だった」と捉えているのだろうか。尋ねてみた。

**「あとにも先にも、どの病院でもあんなに取り乱した状態になった経験はないわ。そもそも、痛くもないのになぜ涙が出るのかが分からなかったし。ねぇ、涙が出るときって、悲しいとか、悔しいとか、何か原因があるでしょう？今ならときどき、笑いすぎて涙が出ちゃうこともあるけどさ。まぁ、あの涙はそんなんじゃぁなかったわね。なんていうか・・悲しくて、苦しいの。悔しくて、悲しいの。こんなに悲しいことが、この世の中にあるのか！って信じられないくらい、悲しかったの」**

ここまで一気に言い切り、大きく息をついた。同じくして、深呼吸をする自分があることに気がついた。よく「息が合う」という言葉がある。話し手の呼吸のリズムをつかみ、聞き手がその波長をとらえた時、その関係がひとつの流れをつくる。同じ方向に同じリズムで向かう、という感覚。歩調が合う、とも似ている。

**「でね、病院へ行って“ここが痛い”って説明できれば、先生も治療できるのかもしれないけれど。悲しいとか、苦しいとか、悔しいとか、って感情の問題でしょう？そこまでは理解できていたから、言う相手が違うんだ、って思ってた。っていうか、言っちゃいけないと思っていたし、病院では“言わせてくれない雰囲気”だったもの」**

## これって、デジャブ？

しばし時を止め、B子さんの話に耳を傾けながら、不思議な感覚を覚える。

確か、B子さんは「母になりたかった頃の

話」を語っているはずだ。その頃から 20 年以上の歳月が流れ、人々の生活や社会全体、そして医療のあり方も、すべてが進化し、変化している。なのに、彼女の語りは、時空を超え、いまこの時代に不妊を治療する当事者たちの声と重なるではないか。当事者の視線で、生殖医療現場の過去と現在を検証してみる。

現在の生殖医療現場には、生殖医療を周知した心理士を配置する施設が、わずかながら存在する。不妊治療中の当事者たちに対する心理カウンセリングに心理士が対応することにより、通院中の不安や悩みの緩和、治療の選択と決断への対処を相談する時間と空間が確保されつつある。これは、当事者ニーズと医療者ニーズが一致した結果、構築された新しい試みであり、過去の生殖医療現場にはなかったシステムだ。また、生殖看護専門教育を受けた看護師による看護相談や、不妊当事者でつくる自助団体がサポートする患者会などで、当事者が悩みを語り合う機会を用意する施設も存在する。他にも、それぞれの施設ごとに、通院中の患者への特色あるサービスが考案され、どれをとっても、過去の医療施設にはなかった、患者へのサービスの充実度が高いことが分かる。確かに、医療現場は変わった。

ならば、なぜ、いまも筆者に届く当事者たちの声は､B 子さんの語りと重なるのか。あたかも指紋の一致を鑑定する作業と同じく、現在の当事者たちの語りは、まるで、B 子さんの過去の体験を知っていたかのように、ことばが重なりあうのだ。当事者の悲しみは変わっていない。過去も現在も。医療技術の進化や医療者たちのたゆまぬ努力によって変化した医療現場だけでは、こと足りないほどの底知れぬ悲しみがあるのだ。やはり、今一度、振りかえり、過去から再検証しなければならない。

## 振り返りはじめた医療者たち

2010 年 10 月 18 日毎日新聞朝刊 5 面。記者からの**「約 30 年間の体外受精の歴史をどう振り返りますか」**という質問に、吉村泰典氏（日本産科婦人科学会理事長、慶應義塾大教授）は以下のように回答した。

「あっという間に普及し、発展し続け、飽和状態になっている現状だ。その間、妊娠率をあげることや採卵時の女性の身体的負担を軽くすることを追求してきたが、それは親の利益に関することで、生まれてくる子どもの福祉は考えられないできた。患者の自己決定権を優先するのが医療の原則だが、子どもの同意を永遠に得ることができないのが生殖医療の難しいところだ。妊娠・出産は生殖医療のゴールではない。30 年間生殖医療に携わってきたが、果して良いことをしてきたのだろうかと思うことがある。一回、立ち止まって考えたほうがいいのではないかと。AID で生まれた子どもたちの叫びは、生殖医療全体がはらむ問題を、我々に教えてくれているのかもしれない。」注）AID とは、（第三者の精子提供による）非配偶者間人工授精のこと。

かつて、B 子さんが「考えられない治療だ」と即答した「精子提供による妊娠・出産」で、誕生した子どもは現在までに 1 万

人以上に上ることは連載２号（2010 年 9 月刊行）で述べた。このデータは、厚生労働省生殖補助医療部会報告書等から抜粋したものであるが、その直後、毎日新聞に先に紹介した記事が掲載されたことになる。この記事に代表されるように、多様な家族形態に対応可能な生殖医療技術の応用は、同時に、家族の問題をはらむことに注意が必要との理解が医療者にも広がり始めている。

確かに、生殖医療施設に通院する当事者のほとんどは婚姻関係にあるカップルであることから、「妻が夫の子どもを産みたいという動機があり、不妊症治療を開始する」という前提でカルテは作成される。他にも、最近では、婚姻関係にない事実婚カップルや、性同一性障害と認定された同性同士のカップルが受診するなど、高度生殖医療が対応する患者事例のなかにも、法律上まだ認められていないカップルを含め、時代の流れと共に多様化する家族形態の問題が浮き彫りになりつつある。このように、国内では法整備のない、つまり規制のない状況で、多様なカップルが“子どもを持ちたい”と願う際の対応が、直接、生殖医療施設の判断にゆだねられるという事態が実際に起きているのだ。このように、立ち止まってもう一度考える必要のある家族の問題に、早急な法整備は必須である。しかし、それ以前に、「あらゆる家族形態をつくることが可能な医療技術」を持つ生殖医療（施設・者）へ、家族支援システムの導入を急ぐことや、その社会整備を構築することなしには、今後、家族の安全を社会が保障することはできなくなるのではないか。筆者はそのことを憂いているひとりである。

医療者も振り返りを始めた。今後も、不妊を生きた当事者たちと共に、その生きざまを振り返り、そして自身を省みることを続けよう。B 子さんの語りはまだ、終わってはいない。

# 対人援助学＆心理学の縦横無尽（2）

# 大震災に思う

**1）助動詞「る・らる」をめぐるポリティックス**
**2）単線性物語としてのナントカ神話**

**サトウタツヤ＠立命館大学**

対人援助学の里程標から、タイトルを変更して２回目。今回はやはり地震から連想したことを書かせてもらいます。

１）　助動詞「る・らる」を巡るポリティクス

３．１１の東日本大震災以降、私たちの認識が大きく変わったと言われる。そして、１５年前におきた阪神・淡路大震災の時のことも様々な形で思い起こされ、語られることになった。

開催するかどうか慎重に検討された春の選抜高校野球大会では、創志学園高校（岡山）の野山慎介主将が選手宣誓をおこなった。

宣誓。

私たちは１６年前、阪神・淡路大震災の年に生まれました。
今、東日本大震災で、多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。
被災地では、全ての方々が一丸となり、仲間とともに頑張っておられます。
人は仲間に支えられることで、大きな困難を乗り越えることができると信じています。
私たちに、今、できること。それはこの大会を精一杯元気を出して戦うことです。
「がんばろう！日本」
生かされている命に感謝し、全身全霊で、正々堂々とプレーすることを誓います。

平成２３年３月 23 日
創志学園（岡山）　野山慎介主将

この宣誓に胸を熱くした人も多かったようである。

スポーツ選手・芸能人・一般の人を問わず、被災地の支援に立ち上がった。その際に「被災地の人を勇気づけられたら、元気づけられたら、うれしいです」というような物の言い方が物議をかもしかけた。上から目線だ、というのである。言葉の問題として非常に面白い。というのは助動詞「る、らる」は大きな変化のただ中にあるように思えるからである。「見れる」という表現は、「ら抜き言葉」として忌み嫌われた時期があった。しかし、今では定着しつつある。その結果、何がおきたか。

「る、らる」は受身・尊敬・自発・可能を表す助動詞であるとされるが、見るにおいては、見れる＝可能、見られる＝受身に分化したと考えられるのである。食べるも同様である。食べれる＝可能、食べられる＝受身である。今の子どもは、「＊＊ちゃん、これ食べられるよ～」などというと自分が食べられてしまう、と思って怖がるというマンガがあった。私なども、映画だったか演劇だったかの席に関して「一番前で見られます」と書いてあるのをみて、むしろ自分が人から見られてしまうところを連想してしまったりした。

「自分の芸なり料理なり（その他なんでもいいのだが）で被災地の人を勇気づけられたら」という表現は、可能を表しているのではなく自発を表している表現なのではないだろうか。自分の芸なり料理はたいしたことはないかもしれない、しかし、芸をみたり料理を食べたりすることで、もし仮に相手の方が元気になればうれしい、というような表現として、助動詞「られ」が用いられているのではないだろうか。上から目線で、と非難する人は、言うまでもなく自分が上から目線で被災地や被災者の人を見ているのであり、それが他者の喋る「る・らる」によって喚起されてしまうのであろう。勇気づけられたらうれしい、という時の「られ」は自発の意味を表している。

２）単線性物語としてのナントカ神話

この大震災は福島第一原発に多大の被害をもたらした。これだけの大震災なのだから、東京電力の責任ではない、という意見が強く出るかと思ったらそうはならなかった。その理由の一つに、安全だということを強調していたから、ということがあげられるだろう。安全だから大丈夫、何があっても安全だから、その先のことを考える必要はない、という安全神話を振りまいていたのである。さらに言えば、安全なのに安心できない人は非科学的な人であると非難さえしていたのである。このような上から目線で接しておいて、安全が損なわれました、と言っても誰も同情してくれないのは当然であろう。

福島第一原発の件で、面白いというか許せないのは、測定にまつわる話である。安全神話を振りまいた側は、科学は信頼できる、という論調であった。そうであれば、どんなときにでも科学的態度を取るべきであるのに、必ずしもそうはなっていない。科学の基本が測定や測定に基づく予測にあることは誰も否定しないはずであり、だからこそ、多額の予算が放射能の測定や拡散予測のためにもつぎ込まれてきた。このような時こそ、東電側は測定をしなければいけない。科学に基づいて安全であることを主張しなければならないはずである。

しかし。

1　測定器の数が揃わずに測定をしないで結果的に人を危険な目にさらした場合があった。
2　SPEEDI という皮肉な名前のシステムで得た予測を公表しなかった。
3　被害が極めて広範囲に及ぶため、危険を感じた人々が自ら測定を始めたところ、測定にはいろいろな条件が関係するし誤差があるので、混乱を引き起こす可能性があるといっていた学者がいた。
4　極めつけとして、一時期、安全な数値を超えているのに安心せよと言ってみたり、安全基準そのものを動かして安全だといい、（安全に基づかない）安心を強要した。

これはエッセイなので、細かい論拠はあげないが、いくら好意的な人であっても以上のような例が次々と出てくるのであれば、安全を認知して安心することは難しいだろう。また、当局側のこうした態度には、明らかに自分たち以外の人々は愚かだという前提が透けてみえる。

上記４つの例は以下のような態度に由来する。
測定するかどうかの判断も専門家が行う。測定できなければ科学的事実はない。
測定する際、素人は手をださず専門家に任せておけばよい。
測定値に基づいた安全かどうかの基準設定は専門家に任せておけばよい。
公表が必要かどうかという情報公開の選択は専門家が行う。

つまり、完全な専門家主義でありパターナリズム（父権主義）である。科学技術が私たちの手を離れて久しいが、地球上の人々がすべて抹消されかねない力が既に地球上に存在しているという意味で、核問題はその中核の一つである。人間が作り出したものに間違いは無いと言い切るのが安全神話である。神話と一般に言った場合には古くからの話で信じるしかないもの、というニュアンスを持つ。私たちはそれに加えて単線的な物語であるという特徴を指摘したい。そうした単線物語を受け入れるのではなく、複線性の物語が今こそ必要とされている。
ナントカ神話と呼ばれるものは原子力安全神話の他にもいくらでもある。私たちは、原子力事故に関するパターナリズムに対抗せねばならないと共に他のあらゆる領域における単線的な神話をうちくずしていかねばならない。何かを考える際には常に複線性を念頭において、単純な因果で終わるような物語は、その内容ではなく形式において批判的に吟味されねばならないのである。
私が開発した複線径路・等至性モデル
（http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/paper.html）というシステムは、政策議論にも使えるのではないかと思う。私はこれまで、母性神話、IQ 神話、血液型神話、目撃証言神話、健康神話（病気は不幸神話）など様々な神話を相手に研究を行ってきたが、そうした具体的なレベルの研究と、複線径路・等至性モデルという理論的な研究は、東日本大震災後の今、合致していたたと実感できる。そういう意味で東電の安全神話をめぐる様々な動向は私個人にとっても感慨深いものとなった。

# 家族造形法の深度

## 家族造形法を使った事例検討
### その５

早樫 一男

**○はじめに…。**

繰り返しになりますが、家族造形法を使った事例検討の面白さは、ライブ感覚で、臨場感あふれた展開となるところです。面接にも通じる感覚といってよいと思います。

ライブの様子を紙面で再現し、伝えるのはなかなか難しいのですが、今回もある研究会での展開を報告することにします。

今回の事例検討の後半では、援助者の位置どりについて、体験的（体感的）な理解をすることになりました。

**○家族情報と相談に至る経過…。**

家族は父母（いずれも４０代）、長男（中２）、長女（小４）です。父親は単身赴任ですが、自宅には週末ごとに帰っています。母親は福祉関係の仕事に就き、夜の８時過ぎに帰宅することが多いとのことです。長女（以下、本人）は勉強ができないので、夜中の１～２時ころまで勉強をしています。母親が買ってきたドリルをしなければいけないとのことです。長男はマイペースです。

相談は学校の先生から持ち込まれました。「いったいこの家族ってどんなの？」ということを考えてみることができたらなあというのが事例提出者（以下、提出者）の思いです。

**○家族造形を通して、家族の理解…。**

**提出者が家族役割を決めることからスタートです。役割が決まったら、提出者が彫刻家役になり、できるだけゆっくり、家族を作っていきます。**

まずは、本人を置くことから始まりました。

本人はお勉強をしているポーズです。少しうつむいています。「一切笑わず、表情は暗い」という指示が加わりました。

次は兄です。本人からは背を向けて座り、一人でゲームをしている感じです。

その次は母親。娘をじっと見ています。関心は外にあるかもしれないということで、からだの向きをどのようにするか、提出者は悩みながら、ポーズや向きを作りました。

父親は隅っこで外を向き、あぐらを組んでいます。「家のことについては、少しは見ている感じ」というコメントが付け足されました。

（写真　１　座っているのは父親役　立っているのは母親役）

**〇静止の時間…。**

４人家族が作られた後、全体を俯瞰して、それぞれのポーズについての微修正が行われました。

**完成後の１～２分程度は静止の時間となります（「どのような感じか湧いてくるか、どんな気持ちになるか等、じっくりと確かめてください」と指示があります）。**

**また、この静止の時間中、提出者はいろいろな角度から眺めたり、それぞれの横に位置し、共に感じてみることを繰り返していきます。**

**〇家族からのフィードバックと意見交換。**

**家族役割を引き受けた各メンバーからのコメントと意見交換は家族の理解につながる大切な時間となります。家族造形法ならではの事例検討の時間と言えるでしょう。**

**今回も提出者を交えた意見交換が活発になされました。以下、そのやりとりの再現です。**

本人：苦しい。本当に苦しかった。息ができない。勉強をやめたらお母さんの足がつかつかとよってきそうだから、やめられない。しんどい。苦しい、この姿勢。本当に限界。

（写真２　本人役　右上にかすかに母役の足が見える　中央上は彫刻家役）

兄：まったくマイペース。家族のことをあてにしていない。自分から関わりを持とうという感じはない。誰も見えないし、あてにしていない。さみしいという感じはない。あきらめているわけではないが…。時々、飽きた時に、お母さんが怒っ

ている姿勢が見えたり、気配を感じると、また、お母さんは妹に対してやっているなあと思う。でも、いつもの感じやなあということで、距離を置いている。

（写真３　兄役　ゲームをやっているところ）

提出者：妹に対してはどんな感じ？

兄：特に、気持ちは湧いてこない。妹は見えないから、しんどいという声を聞いても、そうやったのかという感想しか浮かんでこない。

父親：娘は見えない。しかし、お母さんの足の向こうに娘の手は見える。娘はしんどいやろうなあとは思う。お母さんがしっかりと立っていて、足の存在がすごく強烈なイメージがあり、気になる。足が怖い。息子は単にいるなあという感じ。

本人：お父さんは気にしてくれているんや。

（父の言葉は意外という感想が語られました）

母親：いろんな気持ちの変化がある。すごく動いた。最初、指を指しているというポーズは、手がしんどくなるという感じと気持ちいい感じがした。自分がこの家を仕切っているというか…、支配という感じ。でも、静止の時間が経つにつれしんどくなってきた。最初は、子ども二人を目の端で見張るような感じだったけれど、最後の方は姿勢を維持するので精いっぱい。とにかく、しんどかった。自分のしんどさで気持ちは動かないが、子どもから声があがるとか、動きがあったら、カッとなって、しんどさが怒りに転じるような感じがある。父親は見えていない、気配しか感じない。でも父親の声が聞こえたり、動きがあると反応しそう。「何もしない癖に何言っているの！」とか、「もっと父親が頑張ったら」とか、「もっとしてよ！」といった感じでの怒りがある。まったく、見えないのに意識はしている。兄のコメントを聞いても心は動かなかった。娘がしんどいといった時にはイラッとする。娘の反応は刺激となる。みんなから、お母さんは怖い怖いといわれているときに意外だった。そんなに怖いって？いう感じ。

提出者：客観的に見ていると、お母さんが怖いっていう印象が強烈にある。自分で母親のポーズを作ったが、そのポーズが焼き付いて、どの家族メンバーの位置に行っても、お母さんは視野には入らないのだけれど、母親のポーズをずっと感じてしまっている。お母さんがとにかく怖くて…。

本人：私はお母さんの全てが見えないのだけれど、足が十分に怖かった。

提出者：私は残像のように残っている。自分が作っているかもしれないが、どこにいっても焼き付いている、離れない。

兄：僕は後ろを向きたくなかった。その一方で、僕のことをお母さんはどのように思っているのかは聞きたかった。僕の存

在について…。

母親：お兄ちゃんに対しては、変なことをしなければいいという感じ。でも、反抗期に入るし、口答えしたりしたらすごく反応すると思う。

提出者：兄としては、今は妹に目が行っているから、お母さんに対しては、あたりさわらずで、自分の世界を守るという感じではないかなあ。

兄：とりあえず、お母さんはどうでもいいはという感じ。お母さんとは適当に離れておこうというか…、向きたくないなあという感じがある。

本人：誰もあてにできない感じがあるから、誰か助けて！という思いが湧いても、誰もここにはない感じ。

父親：子どものことは気にはなるけれど…。

本人：途中で、横に倒れたくなった。窒息しそうで…。

**○母親への対応は？…。**

提出者：お母さんはどういう名目なら、学校（スクールカウンセラー）に相談に行けるだろうか？

母親：警戒心はすごく強い。しかし、警戒心がとけて来たら、すごく頼ると思う。

進行役：お母さんは誰か（援助者）が自分の近くに来るということは受け入れることができるか？

母親：最初は警戒心が強いと思うが…。求めている気持ちはすごくあると思う。

提出者：お母さんはどういう名目だったら援助者とつながれるだろうか？子どもに問題があると言ったら、子どもにすべて裏目に出てしまう。お母さんに問題があるから相談をというわけにはいかないし…。

母親：先生から「学校で心配なことがある。お母さんにも聞きたい」と働きかけられたらどうだろうかと自問してみると…。

提出者：先生からお母さんに声をかけてもらうことはできるが、子どもの状況がスムーズにいっていないということは伝えざるをえない。

進行役：もしも、学校から「家でのお子さんの様子を聞きたい」と言われたらどうだろうか？

母親：娘に、「何をしたの？」って聞くだろう。

提出者：もしも、カウンセラーにつなげることができても、母親はほとんど心を開かないような気もする。

母親：自分からは行こうとは思わない。単発とか、２～３回ぐらいだけ会っても心を開きそうではない。でも、継続的に会ってもらいたい感じはある。誰かが近くに来てくれて、ちやほやちやほやしてくれたら…。べったりと頼りたい。

**○娘が元気になるには…**

父親：学校から来て貰いたいと言われたら、行ってみようというつもりはある。

母親：私はうれしくない。特に、父親一人で出かけたら…。

父親：気になるから週末には帰っている。子どもに対しての気持ちはある。しかし、妻の足が気になる…。自分がいないところでお母さんがやっていることについて、信頼とまでは言えないが、尊重はしている。

進行役：両親で学校に呼ばれたら…。

母親：学校から帰ったら、学校ではこうい

う顔をするのと父親を攻撃しそう。
父親：学校から呼んでくれるのなら、行ける。

提出者：それでは、この子が元気になったらどうか？
母親：楽になる感じがある。
本人：この姿勢をやめさせてくれないかなあ。
母親：それがまた腹が立つ。「しんきくさい！」という感じ。自分と重なる感じがある。
提出者：そうだと思う。
母親：しんきくさいのを見ていると、すごくイライラする。
父親：娘とお母さんとの間での悪循環を感じる。
母：例えば、学校から「子どもを早く寝かせてください」と言われたら、どのように反応するかを考えている。自分の気持ちの動きが予測できない。「提出物が出ていない」といわれると、カッとなる。すごく腹が立つが、「早く寝させて」と言われるとわからなくなる。悪い反応は出てこないと思う。
進行役：夜の時間の過ごし方を聞かれたらどうか？
母親：何時ころ寝ているかと聞かれたら、責められている感じがする。子どもが元気になったら、お母さんとしては安心する。とにかく、子どもを見ているとイライラする。
提出者：救いは友達との関係には問題がないこと。それなりに楽しくやっているよう。
母親：そういうことを言われると母親としてはうれしいかもしれない。「学校で友達とうまくやっている」と言われるとうれしい。娘のことを褒められると、心の底のあたたかいところが動く感じがする。それを聞くとポーズが緩む。
父親：娘に対しては、気になるが手をのばせない間隔がある。
娘：父親からはそんな感じは伝わってこない。
提出者：でも父が帰って来ている。
父親：とにかく気になる。兄に対しては、そのままおとなしくしていてくれよという感じ。
母親：母親は実はすごく疲れていると思う。仕事はちゃんとしているかもしれないが、乖離していると思う。
進行役：母親は子どもに対して褒めることができないか？
母親：だって、しんきくさいもの…。イライラする元だもの。でも、褒めてもらうと心の底が温かくなる。お母さんを褒めるより、娘のことを褒められる方が温かくなる。実は、娘と一心同体という感じ、分身というか…。

提出者：改めて、確かめるが、担任と新しい関係、いい関係を作ってもらうことは…。
母親：このお母さんと継続的にカウンセリングしていく、サポートしていく覚悟がよっぽどしっかりしていかないと…。
提出者：学校として、そこまでの覚悟は体制的にも無理だと思う。お母さんが自主的にどこか相談機関に通うとも思えない（母親「通わないと思う」とつぶやく）。少なくとも、お母さんとコミュニケーシ

ョンをとれるようにして、この子の力をつけていく方向を考えざるをえない。お父さんには、このような状況の中で大変だから、助けてもらえませんかねといったふうに持っていけたらいいね。

母親：娘が思春期に入ったら、母娘の関係は大変だと思うけれど、小学校時代に少し明るくなって、元気になって、学校で褒められたら、大丈夫な気がする。

本人：これ以外のポーズでおいて欲しい。

提出者：この子に対しては、学校のサポートが少しでてきている。サポートが増えたことで、どのようなポーズになれるかだよね。

進行役：それをやってみたら…

提出者：今は、この子のことを保健室が把握して、保健の先生が声をかけてくれるようになった。この子はしんどい時は、保健室に行くようになった。また、いつも先生から怒られてきたのが、少し減ってきている。何か背景がありそうだとわかって、先生が配慮してきている。気にかけて、この子に声かけしてくれている先生もいる。それだけでも、この子にとってはだいぶ違うと思う。これから、この姿勢がどんなふうに替わるかやね。

進行役：具体的に先生役にどこかに入ってもらうかを考えてみよう。そのことによって、ポーズが変わるかどうかだが…。

**この後、援助者の位置（関わり方を具体的に位置関係で表してみる）を確かめてみることにしました。**

**今後の関わりについて、造形という形で確かめてみるという展開は、造形法の使い方（バリエーション）の一つです。**

**家族造形法の面白いのは、その場で浮かんだアイディアを実際にやってみることができるというところです。**

**〇援助者の位置は…。**

最初のポーズの確認後、提出者が援助者役になり、「どこに、どのような姿勢で入るか」を試行錯誤して確かめてみました。

提出者：難しいなあ（思案する）…。

**本人に関わる位置をいくつか確認しながら、その都度、援助者・本人・母親の感じを言語化していきました。**

提出者：どこに入っても、お母さんからにらまれている

（写真４　立っているのは母親役　下を向いているのは本人役　位置を確かめている援助者役：左端）

母親：その位置はますますいやだ。

本人：どうしても動けない。

提出者：お母さんからみたらじゃまだよね。

（写真５　母親役から見た娘役と援助者役）

提出者：どっちから支えても、お母さんとは対立するね。

母親：学校で本人を支えるというのがいいのかもしれない。

提出者：お母さんにとっては見えないところがいいのかもしれない（他のメンバーも同意）。どこに入っても、お母さんの味方をしているというふうにはならないし、対立関係になってしまう。

母親：学校の先生が耳元で「頑張ってますよ」「友達とこんなふうにしてますよ」と言ってくれると受け入れられる気がする。

**その後も、母娘が少しでも楽になる位置関係、ポーズの確認を繰り返しました。**

提出者：当面、学校でサポートして、この子がしっかりしてきた頃に母親と会う場を設定するとかやね。

母親：そうだったらスムーズに受け入れられるかもしれない。

本人：援助者が横に来てくれると、神様みたい…。

提出者：この子にとっては、保健室で話をして、なんとなく楽になったことによって、希望を持ったのではないか…。

母親：登校というのは、お母さんの視界から消えてしまうようなイメージがある。帰ってきた時に、娘が元気になって、顔が上がっていたら、「あれっ、どうしたの？」という感じがある。その頃に、「最近、学校ではこうなんですよ」と言われたら、納得する。

本人：少し元気が出て、顔が上がった時には、お母さんの足がそんなに怖くない。

（写真６　顔を上げた娘役　手は援助者役　足は母親役）

その後、提出者からは学校の取り組み、今後の可能性についての話が展開されました。

**〇事例提出者の感想**

本人であれ、親であれ、自主的に相談に来ないようなケースのなかに、「まったく信じられない」「どういうことだろう!?」

と戸惑うものがあります。そんなとき、家族造形を置き、登場人物たちの声を聴くことで（文字通りの声もあれば、身体から感じられる声なき声もあります）、当事者中心の状況把握が可能になります。もちろん、本当の当事者の声ではありませんが、それでも、私たちのイマジネーションを活性化し、理解を深めてくれます。家族造形の優れたところは、登場人物のすべてが平等に声を上げ、それぞれの立場に寄り添った理解と支援計画が可能になることです。もちろん、最終的には、IP の利益が最優先されなければなりませんが、一見、悪者のように思える人にも理解と共感がなければ、家族を動かすことはできないのだと思います。

**〇おわりに…。**

家族役は、役割を引き受け、造形として感じ、演じる中から湧き出てくる思い（内なる声）とともに、役割から離れたところで感じる思い（外からの声）を行き来するというのが、家族造形法を通した事例検討の特徴の一つだと感じています。

今回も協力していただいた参加者のみなさんに改めて感謝いたします。

# 旅は道連れ、世は情け

## ～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

## ⑤お金と責任

村本 邦子

人生において、私がもっとも愛するものは自由である。自由を妨害するものは憎むべきものということになるが、その代表として、所有と依存の欲望を挙げることができる。人間はあまりに弱く小さな存在であり、その誘惑はあまりに大きいので、ややもすると、自由を諦めるか（いわゆる「自由からの逃走」である）、もしくは、もっとも手っ取り早い方法として、自分自身をそれらと無関係なところに置くと決めてしまうことになる。少数派かもしれないが、私自身は後者の選択の方が好きである。基本的に 1 人で生きるという選択である。もちろん、孤立して生きるというのとは別のことだ。

人と一緒に仕事をすると、所有と依存の欲望が頭をもたげる。所有の欲望とは、自分の思うようなペースで自分の思うように事が運ばれてほしいと願う欲望、依存の欲望とは、全面的に人をあてにしてしまうという欲望である。どちらも支配の裏表だ。一人ひとりが違う人間である以上、どちらも完全に適うことはあり得ないし、本当のところ、どちらが適ったとしても満足は得られない。なぜならば、それは孤独の証しになるだけだから。思うに、DV の加害者やカルトの教祖は、全面的に人をあてにし、すべてを自分の思い通りにしたいと望んでいるが、実際には、人間は完全なロボットになりきれないからこそ、飽きることなくその役割を続けていけるのではないだろうか。

組織で仕事をするうえで大切なのは、目的の共有、役割の分担と合意、責任と遂行であろう。しかしながら、複数の成員からなる組織において、成員すべてが自律的で成熟しているということはあり得ないから、結局のところ、誰かが誰かのフォローをすることで辻褄を合わせつつ、組織は回っていくものである。その時に、所有と依存の欲望が少しでも頭をもたげると、フラストレーションを抱えることになる。自分という人間の器を鍛えていけば、それは乗り越えられるものなのかもしれないが、それは

途方もなく労力を要するプロセスだと思える。できれば、そんなものとは無縁でいたかった。

だから、人を雇うというようなことは思ってもみなかったし、組織として仕事をするつもりはなかった。女性ライフサイクル研究所は、個人事業主の集合体であり、やりたければ、それぞれが自分の責任で仕事すればいい、お互い、子育て中の身だから、場を共有していれば、困った時に助け合えていいんじゃないのという意識はあった。だからこそ、次々と「私も何かやりたい！」という人が現れた時、「給料も交通費も払わないけど、やりたいことがあったら、自分でやってね」と受け入れた。もともと、来るもの拒まず、去るもの追わずの私である。

こうして加わった人たちは、何かをやりたくてたまらない人たちだった。子どもを保育所に預けるという人まで出てきたのには内心驚いた。そこまで気合いを入れて働くのか。繰り返すが、開設当初、私自身が仕事と位置づけていたのは週 1 日の開業カウンセリングだけで、あとは、それまでプライベートでやっていた活動をもう少し公的なニュアンスでやってみようと思ったにすぎなかった。それに比べると、他の人たちは熱い想いを持って何ものかに突き動かされるように動いていた。あれやこれやとアイディアをひねりだしては行動を起こしていくので、私はただただ圧倒されていた。

最初に、待ったをかけなければならなくなったのは、活動の請求がこちらに回ってきたときだった。もともと場所代や維持費は私が持っていたし、1 回千円でグループに参加していたお客さんたちが次々、スタッフになっていくのであるから、人手は増えたとは言え、収益は下がる一方である。これではたまらないと思って、何度も話し合いの場を持ち、基本的にそれぞれの事業収益はその人のものであるから、収益が出れば一部を運営費に入れ、個人の経費は自分で賄うというルールを決めた。

お金の問題は、いろいろな側面から、繰り返し私たちに突きつけられた課題だった。ある時、ひとりのスタッフがシンポジウムに出て、年配の男性から「あなたたち、そんなによいことをしているのだったら、どうして有料にするの？お金なんかとらず、ボランティアでやりなさい」と言われ、憤慨して帰ってきた。私自身が経験したのは、「有閑マダムの趣味」という陰口だ。なんたる侮辱！有閑マダムの趣味で女性問題がやれるものか。何しろ、私たちは、あの時代に子どもの虐待や性暴力の告発をしていたのだ。私たちは歯ぎしりして、自分たちのやっていることの意味を確認しあった。たとえ高額でなくても、有料でプロとして責任をもってサービスを提供したい。

たぶん、こんなふうにして、私はだんだんと、皆の想いに巻き込まれていったのだろう。夫との関係もあった。子どものことは、基本的に私が何とかする。私に予定が入るときは、夫が融通する。だけど、仕事が重なった時には、夫の仕事が優先される。夫の給料をあてにして生活しているのだからやむを得ないとも思う一方で、何だか釈然としない思いも残った。彼は決して経済

を持ち出して権力をふるうタイプの人ではないが、自分のなかにわだかまりができたので、翌年からは、定収入を得るために非常勤講師に出ることにした。最初は 1 ヶ所だったが、1 番多い時は 4 ヶ所で半期に 7 コマほど教えていた時代もあったから、今よりたくさん教えていたことになる。もとより、教えるのは嫌いな仕事ではない。この時代の教え子たちのなかにも、対人援助職者として頑張っている人たちが結構いるのだ。

大学への誘いはコンスタントにあったし、仕事はまだたくさんあった時代だった。周囲からは「もったいないね」と言われたものだが、少なくとも子育てを終えるまでは、フルタイムで働くつもりはなかったし、何がもったいないのか不思議だった。本当のところ、フルタイムで働くより、24 時間営業の自営の方が忙しいと言えなくもないのだけど、私にとっては、自由度の感覚がまったく違ったのである。とは言え、子どもたちはどんどん大きくなり、親の手を離れていく。私個人に関して言えば、外で定収入を得ながら、開業カウンセリングの方もトントン拍子に増え、講師や執筆の依頼も結構あって、95 年にはそれなりの安定した事業収入が見込めたので、96 年には、年数回のオムニバス形式のものをのぞいて、非常勤講師は全部やめてしまった。

そんななかで、他のスタッフたちもそれぞれに事情を抱え、勉強を始めたり、資格を取ったり、家計を助けるために就職したりもした。正直なところ、自分で事業を起こすと言っても、最初の 5 年、私以外の人は、たいして稼ぐことはできなかったのだ。だからと言って、誰も女性ライフサイクル研究所をやめる気はなく、それぞれ、いずれはここで立てるようになりたいという野望を持っていた。いったん始めた事業を放り出すわけにもいかなかった。誰かが始めたことも、やむなく残るスタッフで引き受けたが、実務的な仕事量は半端でなく、少しずつ内部での仕事にもお金をつけることにしていった。

私としては対等な立場で仕事をしたいと思っていたものの、どうやら経済的に対等にやるのは無理であるから、いずれはそれを目指して無理のない範囲でという妥協策だった。何とも複雑な気持ちにさせられるのは、夫たちの経済格差である。いくら熱い想いがあっても、家計を助けなければならない人は外で働かなければならなかった。自分にそこまで責任はないと思いつつ、内心、他のスタッフの家計の心配までしている始末だった。日本の女性史にはいわゆる「主婦論争」というのがあるが、この時代、そこに登場する複数の論理をほとんどひとめぐり実体験したような気がする。結論は出ない。

そして、事件が起こった。1 人のスタッフが社会的問題を引き起こしたのだ。それまで、「それぞれが自分の責任で」と言ってきたものの、いざとなったら、私には関係ないと割り切ることなどできなかった。人と人とが関わることである以上、お金ですむ話ではない。何より私は代表として名前を出していたし、専門家として一番責任の重い立場にあった。結局、これについては、

その後 10 年フォローすることで責任を果たしたが、長く続けていれば、遅かれ早かれ事件は起こるものである。この時に思い知ったことは、結局のところ、社会的に言えば、私が責任者であることは否定できず、何か起こった時には逃げも隠れもできないのだということである。それならば、いっそ潔くリーダーであることを受け入れるしかないじゃないかと腹を括った。

結論を言ってしまえば、意外にも、私は馬鹿なお人好しということになる。何であれ好きなことを一生懸命やるのは絶対的善であるという信念を持っているために、どうしてもやりたいという熱意とガッツを感じると、つい応援したくなってしまうのだ。こうして、1 年も経つ頃には、私が経済的にも、実質的にもリーダーとして責任を負う体制が作られた。

私の希望は、それに皆の希望も、いつの日にか、ここで一人前に立つことだった。それぞれ日々、勉強を積んで、誠実によい仕事を重ねること、狭い世界に閉じこもらず、どんどん外へ出て視野を拡げることを皆に言い続けた。自分自身に言い聞かせたことは、所有と依存の欲望に負けないこと、女性ライフサイクル研究所は私のものではないし、私は私として常にそこから自律しているということである。社会的に見過ごせないギリギリの線までは、たとえ私の思いと違ったことが起こったとしても、メンバーの自由と責任に任せ、失敗を受け入れた。関係性としては、いつも変わらず助け合う共に生きる仲間であったが、仕事上は相当程度、私が皆の面倒を見てきたことになる。私には試練の連続だった。あまりの重荷に、2〜3 度、解散宣言をしたことがあったが、解散させてはもらえなかったし、やり始めたことの社会的責任を途中で放り投げることは、やっぱりできなかった。

果たして、私は自由に生きてきたと言えるのだろうか。どうひいき目に見ても、肯定してもらえそうにない。それでも、自分としては、自由を放棄しないよう常に努力を重ねてきたし、それなりの成果をあげてきたと思っている。女性ライフサイクル研究所という組織は、役割のアンバランスさこそあったものの、目的の共有、役割の分担と合意、責任と遂行をそれぞれが自律的に請け負うよう促しながら回してきたのだ。リーダーとして鍛えられたし、何より、私たちがこれまで社会で果たしてきた役割を考えれば、「よくもまあ、ここまで私をフル活用して、社会に役立たせてくれたもんじゃないの!?」と感心するばかりである。初期のメンバーの粘り強さ、あるいは執念深さなしに、女性ライフサイクル研究所はあり得なかった。そして、皆が皆、大きく成長した。自分自身をも含めてだが、それは本当に感動的なプロセスだった。

それぞれのメンバーが成長し、ようやく皆が将来有望な同僚になるかもしれないと思えた 2002 年、私たちはついに経済的に対等になって、研究所を法人化した。その時、私は、「皆のここまでの成長を認め、これからの成長を待って、もう 10 年だけリーダーとしての責任を負うから。でもその後は私を解放してね」と言い渡した。それがちょうど来年にあたる。

# きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第４話

水野　スウ

## いのみら通信の由来

週いちのオープンハウス「紅茶の時間」から始まって、このところは、コミュニケーションの練習の場である「ともの時間」でしてることを細ごま綴ってきて、何事もなければその続きをまた、と思っていたのだけれど、何事もどころか、原発震災という、とてつもない一大事なことが起きてしまった。

いまだ過去形ではなく、今が今も進行中の、なんとおそろしい地平線に、私たちは立っているのだろう。ふるさとに帰れないかもしれない人たちの胸のうち、おさなごを抱く若い人たちの不安を思うと、もう胸がつぶれそうになる。

「きもちは、言葉をさがしている」という連載のサブタイトルは、「紅茶の時間」とその周辺。ならば今回はこれまでと違う、紅茶のもう一つの周辺について書こうと思う。

震災後の数日間は、ただただ情報を取り込むのに必死で、心臓がばくばく、ほとんど思考は停止していた。幸いだったのは、間をおかずに「ともの時間」と「紅茶の時間」の日がやってきて、心許せる仲間たちとなんの遠慮もいらず、原発の恐怖も不安も、原発なき未来についてもいっぱい話せたことだ。

「話す」は「放す」なんだよ、きちんとまだ言葉にできない想いだって、溜めこんだまま出さずにいたら、心は便秘してしまうよ、だから話して、ちょこっとでもきもちを解き放そうね、といつも言ってきたことが、まさにわが身を通して循環したのがわかった。今回の震災で、あふれるほどの情報をインプットし続けるばかりで、出す相手がいなかったら、それはそれですごくしんどくなった人もきっと大勢いたことだろう。

毎春、調布の不思議なレストランこと、クッキングハウスにお話の出前に出かけるようになって、7年目になる。代表の松浦幸子さんからその都度、お題のリクエストが届き、それにそって語るのだけど、今年は、「いのみら通信の由来」という題でお願いしますね、とご注文主から依頼があった。

私が23年前からささやかに出している手描きの個人通信、通称「いのみら」のフルネームは、「いのちの未来に原発はいらない通信」。その由来を語ることは、私が原発というものに関心を持ち始めたころからのこと、一緒に原発について学び、動いて来た紅茶仲間たちとの23年をふりかえること、そして今の事態を私がどう受けとめてるか、自分にいったい何ができるか、を私の言葉で語ることだった。

正直いって、この10年あまり、私はすっかり油断していたのだ。あっちの原発でもこっちの原発でもトラブルや事故は起きてるけど、まさかチェルノブイリみたいなことは起きないだろう、そう思いたくて、原発に対しての意識は底辺で持ちながらも、前みたいには声をあげてきていなかった。いのみら通信の中味だって、原発や環境問題からだいぶ遠のいて、その時どきの私の関心事でちいさな紙面が埋まっていたように思う。

15,6年くらい前から、紅茶に来る人たちの変化——子育ての場からはじまった紅茶は、いつごろからか、いろんな悩みや問題を持った、多様な人たちもやってくる場となり——にともなって、私自身はおおいにコミュニケーションを学ぶ必要に迫られていた。

自分なりに教室に通ったり、セミナーを受講したりしながら、どこかに私や紅茶の求める“学校”はないか、ずっと探し続けていたころ出逢ったのが、東京のクッキングハウスだった。　足しげく通ううち、SSTやコミュニケーションの学びはもちろんだけど、それ以上に、松浦さんのひとと接する態度や、メンバーさんたちやクッキングハウスという場そのものから教えられることがいっぱいあって、私はそんな発見をいのみらに何度も綴っていった。

そんなふうにして私の中の優先順位が、「原発」から「コミュニケーション」へとシフトしていった時間幅が、ちょうどこの10年あまりのこと。そして今、時がひと巡りしてふたたび、だけどクッキングハウスでは初めて、いのみらの由来、としての原発を語ることになるとは。

## いのみらが生まれるまでのこと

チェルノブイリ原発で爆発が起きた25年前、私は、当時3歳の娘の母親だった。ある人の講演会を聞きにいって、原発事故のおそろしさにふるえあがり、ハンゲンパツに火がついた。そのころの日本の多くのお母さんがそうだったように。

紅茶は毎週、ちいさな子を持つ母親たちであふれていたので、その恐怖も一気に伝染した。でも恐怖だけで人は長続きしない。やっぱり勉強しなきゃ、と仲間たちと、たくさんの本を読み、講演会を聞きに出かけ、情報の共有がはじまった。それまで新聞とテレビだけが情報源だった私にとって、前から原発に関心を持っていた人たちが、紅茶に来て分けてくれる情報のほとんどが初耳で、「原発はトイレのないマンションって呼ばれてるんだよ、原子炉で燃やした核燃料の持って行き場は日本のどこにもないからね」ということだって、そのころ初めて知ったのだった。

そもそも原子力発電はどこから来たのか、ってよくよく考えたら、そのもとに原爆があった。核爆弾を作るために原子炉でウランを核分裂させ、分裂させたあとの放射性廃棄物の中にはプルトニウムがあり、それが取り出され、加工されて、長崎に落とされた原爆になった。

核が分裂する時のエネルギーはものすごい強大な熱を持つ。そのエネルギーで高温のお湯をわかして、そのお湯の発する蒸気の勢いでタービンをまわせば、それで電気が起こせると、誰がいつごろ気づいたのだろう。核の平和利用という名で、エネルギー資源の乏しい日本に、アメリカ側から原子力発電のすすめがあって、我が国でもこれからは原発をつくっていくんだ、という動きになったのは、皮肉にもビキニで水爆実験のあった年だった、ということも初めて知った。そんなこと、新聞には書いてなかった。

テレビと新聞からだけじゃ、ほんとのことは見えてこないんだ。テレビによく出てくる専門家という人たちの話もなんだかあやしいぞ。私はもっといのちの側に立った情報を知りたいし、仲間たちと勉強したこと、自分の頭で理解できたことだけでも、せめてまわりに知らせたい。それなら自

ら発信すること、ちいさくても自前のメディアを持つことだ。そんな私のきもちの流れの中で、いのみら通信が生まれてきたのだった。1988年4月のこと。

## 私にとってのいくつかの理由

通信を出すまでの間に、いろんな人の話をきいた。原発計画のある町の人の話、ずっと以前から原発に反対しつづけてきた学者さんや先生の話。テレビには登場しないそういう先生たちの話の方が、テレビで聞く解説や電力会社のパンフレットよりはるかにすとん、と私の中で腑に落ちた。

たとえ事故が一度も起きないとしたって、原発はつねにヒバクシャを生み出すシステムだということ。燃料のウランを地中から掘り出す場面で、年に一度、原発をとめて定期点検工事する作業現場で、事故が起きた後ならさらに、使用済み核燃料の再処理工場ではそれよりさらに。使用前、使用中、使用後、のどこを切り取っても、誰かの被曝を前提にしなければ原発は動かせないのだった。

その誰かは、たいていの場合、弱い立場の人たちだ。原発労働者、と呼ばれる人たちの存在にも働かされ方にも、それまで関心を持ったことはなかった。私からは見えない沢山の人たちに被曝を強いる、ひどい差別構造の上に原発はのっかっていて、その一番上の方に、私の便利な生活があったんだ。

プルトニウムの毒の力が半分に減るまでに、24,000年もかかるとはじめて知った時は、くらくらしそうだった。今が今、原子炉の中で核分裂して発生したプルトニウムと、それから先の、気が遠くなりそうな時間の長さ。さらにはもっと半減期の長い放射性物質も、原子炉の中で生まれてくる。原発を運転し続ける限り。

その使用済み核燃料、わたし流にいうと、放射能のウンコの後始末をいったいどうするのか、最終の処分方法も処分地も決まらないまま、私たちのツケを全部、未来に押しつけることで、原発というものは動いていたんだ。

チェルノブイリ事故による放射能は、事故後ほどなく8,000キロ離れた日本にも飛んで来て、ビニールハウス栽培のものより露地物の、しかも有機農業の作物の方が、そして化学飼料よりも大地の牧草を食む牛たちの乳の方が、より汚染された。25年前のことがまるでデジャブみたいに、今、日本で起きている。ある地区の牛たちにはある時期まで牧草を食べさせないように、というおふれも出て。

原発は、いのちと共存できない。そう確信した私にとって、原発に反対する理由は、あの時、もうこれらで十分だった。なんていうとたちまち、これだから無知な主婦は困る、という声が聞こえてきそうだけど、そして実際聞こえてもきたけれど、原発の本質は、エネルギー問題というより、つきつめれば放射能の問題なんだ、と思えた私にはやっぱりそれで十分だった。

1から10まで原発のこと、科学者並みにわかってないと原発やめようと言えない、っていまだに私は思わない。20数年前よりも原発についての知識が少しはふえたと思うけど、それがいったい何ほどのことだろう。東京電力の原子力発電所が事故をおこし、あの中で一体何がどうなっているのか、どうやって核をなだめ、おちつかせたらいいのか、どんな専門家にも学者にも電力会社の人にも政府にも、誰にもわかってない、ということがもうみんなにわかってしまったのだから、私がわからないってことはちっとも恥ずかしいことじゃない。

## 原発のタネ

原発に関心を持つまで、銀行引き落としになっていたわが家の電気料金。そのころの私は家計簿すらつけてなくて、毎月の電気料金を気にも留めてなかった。気づいたら、うわわわ……すっごい高い電気料金。恥ずかしい、というなら、むしろこっちのほうがよっぽどそうだ。なんと、2LKのちいさなマンションで、80アンペア、真冬で一時は最高ン万円をこえていた（今こう書くだけでも、恥ずかしい）。

80アンペアの内訳は、電灯が40、深夜電力の給湯器が40。電灯の方はアンペアを半分に落としてもらったけど、もう一つのアンペアはいじれな

い。それでも意識し出したらどんどん電気料金はさがり、さらに調子にのって節電しすぎて、冬の寒さにしもやけになりかけたこともある。家族にはさぞかしいい迷惑だっただろうな。

今となってはそれも笑い話だけど、なんでそんなにガンバッタか思い返すと、当時は、原発に異を唱える人には、ならばエアコン使うな、といった責めの空気が普通だったからだ。大げさにいえば、じゃあ、あなた、薪とランプで暮らせますか、みたいなおどし文句がよく聞かれたのだ。だいぶ後になってから、家庭で使う電力は全体の9%で、残り91%は企業や自治体など事業系が使っている、と知った時は、ええ〜〜、じゃ本気で省エネすべきはどっちよ、私のあの涙ぐましい努力って一体……とがっくり来たけど、そういう実情を知らせないこともまた、脱原発のハードルを高くするのに有効だったんだろう。

その極端な例を、つい最近も聞いたばかり。今から20年ほど前のこと、真夏でもエアコン使わず扇風機だけで汗だくになってる原発反対の人の暮らしぶりを見たある人が、「すごい、あそこまでの覚悟がなくちゃ反対なんて言えないんだ、こんな生半可な自分にはとうてい無理、ってあきらめた」と言ったのだ。

その反原発さんも、自分の節電で原発止めよう！ って意識でぐわんばっていたのかもしれない。かつての私とどこか似たり寄ったり、笑うに笑えない。そういう無理な節電、我慢生活、はかえって人を遠ざけ、一部の特別な人しか反対を言えなくさせてしまう。それじゃ本末転倒、ひょっとして私もこんなメッセージを発してなかったろうか、ひやり、とさせられた話だった。

たしかに、ちょっとやせがまんの節電もした。だけど当時の私にとってそれ以上に大きかったことは、それまで無自覚だった暮らしのぜい肉に気づいたこと。それをそぎ落としていく作業の中で、自分の内側に、原発をもっと必要とする原発のタネがあったと知ったことだ。もっと便利に、もっと早く、もっと効率よく、という、もっとを求める生き方。大量生産・大量消費・大量ごみ生産、自分さえよければ、ごみのその後は知らないよ、という、“原発的”な暮らしのありよう。

はじめはただ、こわい、止めたい、から単純に出発した私だったけど、原発が切り口になって、いっぱい見えてきた社会のいびつさ、ゆがみ、差別の構造。チェルノブイリの事故から私が得たものは、原発をキーワードにして出逢い、今もつながっている大切な人たちとのネットワークもふくめて、暮らし方は生き方なんだ、という実にシンプルな生活の哲学、ものの見方、考え方だったように思う。

この春で丸19年がたった、金沢隣町の津幡での暮らし。君は紅茶を続けるだろうから、一階は部屋を区切らないで居間だけにしよう、と言い出したのは夫の方だった。あんまり電気使いたくないから、エアコンがなくても過ごせる家にしよう、居間の真ん中に薪ストーブがあったら最高だな、と言い出したのも彼だ。

なので、原発反対のスウさんだから、薪ストーブで生活してて、エアコンもないんですって、みたいに紹介されたりすると、ちょっと違うかな、と思う。反対だから〇〇、は時に、反対するなら〇〇しなくちゃ、ととられることもある。原発なしで暮らしたいと思っても、自由に電力を選べないのだから、せめてどっぷり電気に依存しないような暮らし方をしたい、と私たちが願っただけだ。

もともと風通しのいい造りの家ではあったけど、近くの雑木林から抜いてきたおさない広葉樹を庭のあちこちに植えたら、あれよあれよと木々はぐんぐん伸びて枝葉をひろげ、年々、緑のエアコンのよく効く、夏、涼しい家になっていった。近ごろよく、緑のカーテンの効用がいわれるけど、これは確かにわが家で実証済み。電気代は、金沢のマンション時代の一番高かったころの5分の1くらいになった。それって、使わなくなった電気の分だけ、家の中に架空発電所を建てたみたいなものだ。

そんな森ん中みたいな家でひらいている紅茶なので、こころ疲れた人にもきっと居心地がよく、エネルギッシュな金沢時代とくらべて、ゆったり静かな時間へと、紅茶の空気もゆるやかに変わっていったのだろう。そして先に書いたように、私自身の関心も、原発からコミュニケーションの学

びへと、移行していった年月だったのだ。

## 3.11から見えてきたこと

3.11後は、これまで原発にまったく関心のなかった人にも、テレビや新聞を普通に見ているだけで、はっきりわかってしまったことがいくつもある。

事故を起こした東京電力の原発内で何が起きてるのか誰にもわからない、というのはもちろんその最たるもの。他にも、原子力発電って、電気を作っていない時でも、中にある燃料はまだまだ熱くて、それが熱くなりすぎるともっと大変なことが起きるので、外から電気を引いてずっとずっと水で冷やし続けなければいけないものだったんだ。使い終わった燃料も、同じ原発内にあって、それもまだずっと水で冷やし続けなきゃいけない。そもそも、どうしてそんなものがあそこにあるの。いろんな原発から出る使用済み核燃料は、今のところ青森の六ヶ所村に仮り置きさせてもらってるのだけど、そこももう満杯なので、とりあえず自分とこの原発内においてあった、というわけか、などなど。

注意深くテレビを見てた人なら、プルトニウム、という放射性物質の名前にも敏感に反応したかもしれない。事故を起こした原発のうち一つは、ウラン燃料にプルトニウムもまぜて使っていたこと、私もうっかり気づかずにいた。ウランだけを燃やすのと比べて、このプルサーマルの方が20万倍も危険だという。

プルトニウムは、未来の夢の燃料のはずだった。原発で燃やしたウランからプルトニウムをとりだして、それを再び燃料に使うという高速増殖炉は、あたかも貴重な資源のリサイクルのようで、40年前の研究しはじめのころこそ、そこに夢を託した科学者たちだってきっといたと思う。走り出せば技術は後から追いつく、はずが追いつかず、増殖炉もんじゅは止まったままで、使えないプルトニウムは貯まる一方で、なんとか消費しなきゃならなくて、普通の原発でもまぜて燃やすことになったんだ。今回の事故さえ起きなければ、こんなプルトニウムの存在も、多くの人には知られないまま、増え続けていってたのだろう。

## 「こわい、でも、ないと……」

こんなにもひどい事故が起きたのだから、放射能がどれだけ人びとを恐怖にさらし、日々の暮らしをめちゃめちゃにするか、もうみんな十分わかったのだから、これでもう流れは脱原発だ。なんて思っていたら、とんでもない、私の考えが甘かった。事故からひと月あまりの世論調査で、原発維持の意見の方が、廃止や減らそうという意見を20%近く上回ってるではないか。

テレビの街頭インタビューで、小さな子を抱えたお母さんがこう応えていた。「こわいです。でも、ないと……」

「でも」と「ないと」の間には、「原発」の二文字が隠れている。不安は不安だけども、原発ないと電気足りないし、もう3割も原発の電気だし、それに原発は$CO_2$出さないし、クリーンだし、安いし、リサイクルできるそうだし、あ、それに世界との経済競争に勝てないし、日本の力が弱くなっちゃうし。

ね、だからやっぱり原発なしじゃやっていけないよ、の思い込みは、相当に強固で、根が深い。20数年前に、実は全部が全部、ほんとなわけじゃないんだ、と気づいた者の責任は、少しでもその思い込みの呪縛をほどいていくことだろう。それには、てんで理数系でない、〇い（まるい）頭の私が私なりに理解した原発を、できるかぎりシンプルな言葉で伝えること。それが今の私にできることの一つ、と思えた。

どうしてテレビや新聞からは本当に知りたいことが伝わらないの。どうして学者たちは安全ですと言ってきたの。どうして日本にはこんなにたくさん原発があって、いくつもの原発が一カ所に集中してるの。どうして日本じゃ自然エネルギーが増えないの。いくつもの「どうして」がほどけて行く中で見えてくる、この国独特の、巨大な電力独占のかたち。

まずなんといってもCMの影響力はでっかい。電力10社＋デンジレン（いつも電子レンジ、と

言い間違いそうになる）こと電気事業連合会は、マスコミのだんトツ最大スポンサーだ。でも、あれ？　独占ならコマーシャルしなくても売れるはず、と思うでしょうが、いやいや、原発が実は危険で高くつくものだと知られないためには、常にCMで安全です、と流し続けることが必要で。またマスコミに対しても、ずっと圧力をかけ続けることが大切で。原発推進にとって不都合なことを言う学者も、コメンテーターも、テレビになかなか出れなかったり、報道現場の人もニュースキャスターも、原発に関してまずいことを言うと、番組から降ろされたりしてきた。

各地の原発が事故を起こすたび、できるだけ小さな記事で取り扱うよう、電力会社の代理人である広告会社の担当さんは、すぐ放送局に縛りの電話をかけるという話も聞いた。そうやって、多くの人が「でも、ないと」って思う方向に、マスコミを動かすのも、広告代も、その経費は、みんなの支払う電気料金だ。

それにもちろん、原発は国策だもの。国からの補助金の9割が原発関連で、自然エネルギーには1割というんじゃ、新エネルギーがふえるわけもない。大学だって研究費がもらえない、反対する学者は出世できない。安全です、という子どもたち向けの副読本も当たり前に配られてきた。原発はいつのまにか、電気をつくるという本来の大事な仕事よりも、政治と政府と電力会社がぐるぐる状態のまま、巨大な利権を生むシステムになってしまってたんだ。

## 「感」と「理」

「でも、ないと」の思い込みは、そうやってこれまで何10年もかけてしっかり刷りこまれてきたもの。長年の呪縛から自由になるってきっと容易なことじゃない。それをほどいていく作業には「感」も「理」も必要なんだ、と思う。

「感」は、不安や怒りといった感情、そして感じる力、感性。

放射能の長い半減期を知った時、どこまで想像力を働かせられるか。防護服を来て、何ヶ月ぶりに自宅に帰る人や、放射能のせいで、畑の野菜も採れた魚も捨てなきゃならない人や、運動場で遊べない子どもたちのきもちを、想うこと、想像すること。

「理」は、理性や理由や理論。

「でも、ないと」の根深い仕組み、作れるはずの電気を売らせず、買わずにすむ電気を買わせられてる仕組みを知ること。世界の、持続可能・再生エネルギーの拡がり、脱原発、脱石油を目指してすでに実行してる国々があること、それを可能にしてる政策や、日本でもその可能性がいっぱいあると知ること。そういった話を人にする時は、自分の中にそれなりの理由や理論の持ちあわせがないと、ちょいと突っ込まれただけですぐ「でも、ないと」に逆戻りしかねないので、多少の数字やデータを得ておくのもまた必要なこと。

「感」と「理」の次にきっと大事なのは、伝え方。テーマが原発であるならなおのこと、どれだけ自分の思いを「私メッセージ」で届けられるか。誰かを悪者にしたり、責めたり非難する「あなたメッセージ」や、「正しさ」を押しつけて相手を変えようとすればするほど、一番大切なことは伝わらないし、その人の中に入ってゆかない。

このことはちょうどこの10年あまりの、クッキングハウスでのSSTや、その実際版である「ともの時間」や、コミュニケーションワークショップの中で何度も何度も気づかされ、学んで来たことだ。かつて原発を熱く語っていたころの私は、多分に攻撃的で、いいか悪いか、つい相手に迫ってしまう話し方だった気がする。どうしてわかってくれないの、と違う意見を持つ人たちを、いつの間にか責めてたようにも思い出す。

あのころの私と、今と。伝え方はだいぶ違うみたいだ。敵をつくらない、二項対立に陥らせない、聞いてる人とキャッチボールをかわしながら、そのボールが受けとられてるかどうか確かめながら、私を主語にして語ってる自分がいる。

そのことを、クッキングハウスで話してる途中に、私自身がはっと気づいた。そうか、原発の語りもまた、SSTやコミュニケーションの学びを活かす応用編、実践の場。「原発」からだいぶ離れて過ごしてきた私だったけど、その同じ時間、仲

間たちと一緒にコミュニケーションの練習を続けてきたことには、こんなに深い、大事な意味があったんだ。

## 未来に関わる一人ひとりへ

このひと月、ふた月で、原発をふくむ日本のエネルギー論議はすさまじい勢いで変わっていってる。東京の出前から戻って、原発特集号みたいないのみら通信を書き上げたのが5月6日。その日の夕方、菅総理は、浜岡原発の全面停止を中部電力に要請した。

出前先でも、東海地震の震源域に建つ最も危ない原発、と言われている浜岡にだけは、原発推進／反対抜きでなんとしても、もう止まってもらわないとね、もしもまた事故が起きたら、どう謝っても日本は世界に申し訳が立たないもの、と話していたばかりだったから一層うれしく。たとえ菅さんの突然の要請が、アメリカからの圧力によるものだったとしても。それから10日たたないうちに、すべての浜岡原発が本当に止まった。二度ともう動かしてほしくないと心から願う。

菅さんはさらに、日本のエネルギー基本計画をいったん白紙にもどす、とも言っている。電力会社の独占だった送電網の分離も検討しはじめるようだ。アイスランドの地熱発電の設備は日本製だし、アメリカでは去年、ソーラーと原発の電気料金は逆転してソーラーによる発電の方が安くなった。日本でも送電網の独占が解かれて、電力が自由化されたら、スウェーデンのように自分の買いたい電気を選べる日がくるかもしれない。

これで日本のエネルギー政策が脱原発へと変わるかも！　と一瞬飛び跳ねたくなったけど、いや、そうすんなりとは行くまい。変わりようが激しければ激しい分、後からきっと大きな揺り戻しが来るはず、と今から覚悟しておこう。再生可能・自然エネルギーへの期待がこれだけ高まって、でもいざ実行にうつそうとした時は、おそらくいろんな問題点がみえてきて、そしたらここぞとばかり、揚げ足とりが始まるんだ。

だからってそこで、「ほら、やっぱり、原発ないと」の波に呑み込まれてしまうのは、もういやだ。私たちはこれまで、原発に対してあまりに寛容だった。度々の事故を許して来た。自然エネルギーに対して、せめてその半分くらいは寛容であってもいいんじゃないかな、と思う。なんといっても、日本はこの方面の技術はあっても、実践では先進国より何周も遅れて、今やっとスタート地点に立とうとしてるとこなんだから。

どんなエネルギーにしたって、何かしら不具合があって当たり前、機械だから故障するのも当たり前。むしろ、54基もの原発に一気にとって代わる、絶対安全で巨大な魔法のエネルギー（ああ、これこそまさに原発的だ）なんてものがコマーシャルに登場してきたら、谷川俊太郎さんの詩、「生きる」の中の一節、「いま生きているということ　それは　かくされた悪を注意深くこばむこと」をすぐ思い出せる自分でいたいよ。

いま本当に、いのちの未来の大切な分岐点に、日本で生きる私も、あなたも、立っている。原発の崩れたあの現場に対しては何もできないけど、自分の内なる原発のタネと向き合い、未来に関わる主体性を持った一人になることはできる。自分もその一人なんだ、って自覚することで。

紅茶の時間からクッキングハウスへ、そこからさらにコミュニケーションの学びと実践へ。おかげで、紅茶だけだった時より、きもちを言葉にすること、相手を認めることの大切さをもっと実感するようになった。何より、その人が存在してくれている、というbeの意味に、深く気づけるようになった私がいる。その延長線上に、「ほめ言葉のシャワー」のワークショップがあり、同名の冊子もあるのだと思う。

今年の私の出前予定は、「ほめ言葉のシャワー」と「原発」と、くっきりふた色に分かれているように見える。でも本当はそうじゃないのかもしれない。一人ひとりそれぞれのbeを大切にすることから生まれたほめ言葉のシャワーと、一人ひとりの存在やいのちを大切にできない原発と、二つの対極を語ることは、つまりは同じ一つのことを語ることだ、とも思うから。

2011.5.24

# やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

## 第四章　　屋久島の祭り

離島の暮らしは日々の営みの中で自然の恩恵を受けて生きているという実感が必然的に強くなる。屋久島は古くから山岳信仰の地である。その屋久島で見られる祭りのほんの一部ではあるが紹介したい。

### ■山の神祭り

旧暦の正・５・９月１６日。
山に感謝し、山に入らない日。
かつての屋久島は詣所と呼ばれる場所から先の山には女性や子供が入ることが許されなかった。それでも年に３回は男性も山に入ることをせず麓で日頃の感謝を捧げて過ごす日、それが山の神祭りである。また、この日は山姫が水を汲みに下りてくるとされ、山姫に出会ってしまうと血を吸われるという伝説もある。

**■海祭り**

海４月中旬、山が新緑に包まれ森が柔らかな彩りを見せる頃、いよいよ屋久島はトップシーズンを迎える。そのシーズンを迎える前に屋久島じゅうの海岸や港などを清掃するイベント。清掃するポイントが数多くあるため自分の地域の海岸などに集まる、朝の涼しいうちの２時間。

遠く海の向こうからのゴミに様々な思いを巡らせる時間でもある。
午後には子供たちのためのカヌー体験などのイベントが行われるが、何よりも清掃のあとに見られる子供たちの誇らしげな顔がきっと故郷を大切に思う気持ちを必然的に育んでいるのであろう。

■ご神山祭り

屋久島最大のお祭り。いわゆる夏祭りであるが、この祭りは山岳信仰に基づく伝統文化の継承を伝えるべく続けられており、

お水取りから始まる神事の中でも住民が参加する火熾しがある。この櫓の中央には大きな丸太があり、その丸太に巻かれた大きな綱を海側と山側で引き合い、その摩擦で火を熾す。このご神火は人々の無病息災を願い火櫓を燃やし続ける。

その神事の際には屋久杉で作られた太鼓を使っての奉納演奏も行われる。
なお、この祭りは３０年前に生まれている。町興しと伝統文化の継承など様々な思いも込められており、水中花火など島民にとって夏の一番の楽しみでもある。

■やくしま森祭り

これまでに紹介した祭りと並べるには些か傲慢かとも思うが、是非この機会に一人でも多くの人に知ってもらいたい。
私自身が発起人として名を連ねるこのイベントは１０月の満月の夜、２０００本のキャンドルを使用して行う音楽祭。屋久島総合自然公園という森の中にある町立の野外ステージを使ってのコンサートだが、使用する電力は３０Ａと一般的な住宅と変わらない容量で行い、また出演アーティストやスタッフ全員がボランティアで作り上げるイベントである。

島で唯一の屋久島高校のボランティア部や屋久島町商工会青年部を中心として島の若者たちが総出で全て手作りの作業を行う。

まずステージの音響効果を高めるために間伐や枝打ちで切られた杉の葉で壁一面を埋め尽くし、２０００本のキャンドルもひとつひとつ並べられ、開会式では入場者と共にキャンドルの点火を行う。

ゴミを出さない祭り、を提唱し会場にはゴミ箱を設置せず、持ちこんだものは自分で持ち帰りいただく。チラシを配布することもせず、入場券も紙のチケットではなく手ぬぐい。小さな子供からお年寄りまでみんなが楽しめる生きた音楽を届けること、屋久島の自然に生かされ生きることに感謝を捧げることを掲げた祭り。家族みんなでゴザやお弁当などを持って集まってくれるこの祭りが子供たちの誇りとなることを願っている。６年前、この祭りを企画した際に相談した方の言葉が今でも私の支えとなっている。

「どれだけの伝統も、必ず始めた人がいる。花火のようにパッと上がって終わりじゃなく続いてゆく祭りをやりなさい。」と。

やくしま森祭りは昨年５回目の開催。まだまだまだ生まれたてのお祭りではあるが、受け継がれ語り継がれていくものになることを信じ、また今年も開催出来ることを祈る。

大野　睦　ＢＬＯＧ　やくしまに暮らして

http://mutsumi-ohno.seesaa.net/

# お寺の社会性

## ― 生臭坊主のつぶやき ―

参

竹中尚文

### はじめに

前回は葬儀屋さんの藤原さんの話を書いた。今回は葬式坊主の思いを書きたい。

### 1.　先日のお葬式

坊さん仲間から、ゴールデンウィーク明けに震災ボランティアに行かないか？と誘われた。私は寺を空ける時間がなかった。家内に 3 日程、寺を空けることは出来ないかと尋ねたら、無理だと言う返事だった。自分でも無理だろうと思って尋ねたのだが。東北の方の困難を垣間見て、何かをしたいと思っていた。日頃、社会の中に生きる坊さんを標榜しておきながら、何もしないのは忸怩たる思いである。ボランティアに行った坊さん達から報告メールが入るのに動けない自分がもどかしい。

ウチの寺には坊さんが、私一人しかいない。代役がいない。年に一日か二日は、風邪の発熱で動けない日が出来たりする。そんな日は、電話口で坊守(ぼうもり)が謝りの言葉を重ねて、一方で近隣の寺に電話をかけて手の空いている坊さんを捜している。坊守というのは、たいていが住職の女房で、寺のマネージャーである。坊守が住職は、寺に居なければならないと言うと、言いつけは守らねばならない。

このゴールデンウィークも終わろうかと言う頃に電話が鳴った。Ｆさんのおばあちゃんが亡くなったと言う。Ｆさんのお宅は90歳に手が届こうかというおばあちゃんと60歳を越えた息子さんと二人暮らしである。おばあちゃんには娘がいるが、嫁いでいる。電話をくれたのはその娘である。電話口で、セレモニーホールで家族葬をしようかと思う、と言った。お金はあるのかと尋ねた。無いから、家族葬と思ったそうだ。家族葬だと、会葬者が来ないから香典は無い。葬儀費用を家族で負担しなければならない。いくら安くても

葬儀費用が無いのだから家族葬はむつかしい。

私は、寺の本堂で普通の葬式をしないかと、持ちかけた。本堂ですると葬儀費用が安くつくから、香典で葬儀の費用は払えるだろう、と言った。おばあちゃんには、わずかでも蓄えはあったかもしれない。でも、この10日ほどのおばあちゃんの入院費を考えればその蓄えも心もとない。私は、前号で書いた葬儀屋さんに電話をした。本堂で葬式をするので、15万円程で引き受けてもらいたいと頼んだ。病院から寺までの寝台車の料金、ドライアイス、お棺、火葬料、霊柩車の料金をざっと見積もった額である。実際には、本堂の前に張った受付用のテントをレンタルして、手伝いに出てくれた隣保の人たちに弁当を用意したりして、総額20万円程になった。

隣保長に、何人くらいの人が会葬に来てくれるだろうかと尋ねた。100人程は来るだろうと言う返事だった。香典は20万円を超えるだろうと皮算用をした。このおばあちゃんはこれまでから、近所のお葬式には付き合いをしてきたのだから、そのくらいの香典は集まるだろうと思った。

また、今まで息子さんは隣保のお葬式の時には手伝いに出ていた。だから、隣保の人たちも当然のように手伝いに出てきてくれた。嫁いでいる娘さんには、親戚の方で生花を出してくれるようにお願いしたので、お棺の周りにはお花が飾られた。お葬式の体裁はりっぱに整った。

このお葬式を提案した理由は経済的ばかりではない。Fさんのお宅はおばあちゃんと息子さんが力を合わせて暮らしてきた。息子さんは新聞配達で収入を得て、読み書きやお金の計算はおばあちゃんの役割であった。近所の人たちも私も、この高齢のおばあちゃんが亡くなると息子さんがどうやって暮らしていくのか心配していた。このおばあちゃんが体調を崩したのは10日程前であった。近所の人たちが救急車を呼んでくれた。

このおばあちゃんが亡くなって家族葬をするならば、近所の人たちは手伝いに来なくてもいいし、会葬にも来なくてもいいと言うことになる。近所の人たちは、このおばあちゃんが亡くなったことも知らないことにしておかねばならない。それが家族葬と言うものだ。

おばあちゃんが亡くなって病院から寺の本堂に運ばれて来たときも、隣保の代表者が駆けつけて来た。隣保長にお葬式の手伝いをしてほしいと頼むと安堵の表情を浮かべた。葬儀の受付や案内係を隣保の人で分担をした。葬儀

の司会の料金をカットしたので、隣保長に司会を頼んだ。原稿は私が書くからと言って。

お葬式が済んでお骨を拾って帰ってきたら、近所のおばあちゃん二人が家に上がり込んで、早速Ｆさんの息子さんにあれこれと指図をしていた。ひまをもてあましていた年寄りにも仕事ができた。これからも近所の人たちがいろんなお節介を焼いていくだろう。たまには、的外れなお節介もあるかもしれない。息子さんもこれまで通り新聞配達をして暮らして行けそうだ。

## 2. お葬式の積立金

先日、Ｇさんのお宅に百ヶ日法要でお参りをした。百ヶ日というのは、お葬式が済むと、初七日、二七日、三七日と続いて七七日(四十九日)まで七日参りが続き、百ヶ日があって、一周忌法要と続く一連の法要の一つである。百ヶ日の読経の後、Ｇさんの奥さんが「私は、今もずっと罪の意識でイッパイなのです」と言った。

そのお宅では、おばあちゃんが亡くなった。そのおばあちゃんは死後、一週間程して発見された。奥さんは、そのことを言っているのだ。おばあちゃんは一人暮らしで、隣接して息子さんのお宅がある。90 歳に近いこのおばあちゃんはこれまで元気で、息子さんが毎週日曜日に買い物に乗せて行くのが恒例だった。いつものように日曜日、おばあちゃんを訪ねたら台所で倒れたまま亡くなっていた。警察が来て状況を調べて、おばあちゃんを連れて帰って検視をして、事件性がないのでお葬式をした。

一週間も気が付かないなんて、と言う人もあるかもしれない。このおばあちゃんは、私がお参りをしたときに隣の息子家族のことをよく言っていた。「息子夫婦は私のお金ばかりをあてにしている。孫は小遣いをせびるばかりだ」と言っていた。こんな言葉ばかり発していると、訪問者の足は遠のく。このおばあちゃんは、人が尋ねて来ないことを気にするようでもなかった。

最近のお葬式は高額の費用がかかると言うので、葬祭会社によっては積立金の勧誘に回ったりしている。マッチ・ポンプのような話である。私はお参り先で老人と話す機会が多い。そんな時、葬祭会社の積立金をしているという話をよく聞く。

「積み立てなんか止めておいて、息子さんに葬式代だと言ってお金をあげればどうですか？」

「そんなことをしたら、息子は私の葬式代を自分のことに遣ってしまうじゃないの」

たとえ息子が親の葬式代を使い込んでも

いいではないか。葬儀会社は契約通り葬式をしてくれるだろうが、葬儀の翌日に精算を済ませると亡くなった人のことを覚えているだろうか。そんなことが葬儀だろうか。

息子よりよく知らない会社を信用する。人のつながりよりも、契約に守られた孤独を選ぶのだ。これは、老人だけの生き方ではない。無縁社会や孤独死を作っているのは現代の我々である。人の繋がりはわずらわしいものである。人の繋がりの上に葬儀は成り立っている。わずらわしくない葬儀を求めている姿はさびしい。

ところで、私はその奥さんが言う罪悪感を否定するつもりはない。奥さんの罪悪感は当然なのである。

数年前のことであるが、家族で夕食に出かけて、帰ってからお風呂につかりながら亡くなったおばあちゃんがいた。近所の老人が「いい亡くなり方だ」とうらやむように言った。息子さんが「あれが最後やったら、もっと美味いものを食べに行けばよかった」と言っていた。ユーモラスな話だけれど、息子さんは大まじめにそう思っていた。

家族にとって、これでよかったと言う死はない。強い繋がりのある人が亡くなると、言いしれぬ罪悪感があったりする。世間の相対的な善悪による罪悪感ではなく、絶対的な罪悪感である。私が出会ったお葬式で、多くの人がそんな罪悪感をもっていたように思う。

## 3. とぶらう

先月、14 歳になる我が家の犬が死んだ。ペットとはいえ家族の一員のような存在であり、その死は悲しい。とは言え、私はペットの葬儀をしない。先日、仲のいい住職が「俺は、御布施が貰えるならペット葬だってするぞ」と冗談で言った。葬祭業者によれば、人間の葬儀よりお金をかけたペット葬もたくさんあるそうだ。現代はそんなものかもしれない。人間の生活より費用のかかった生活をしているペットがずいぶんといる。「生きる重み」、「死ぬ重み」を考えてしまう。

斎藤茂吉は『赤光』の中で、老母の死に対する悲しみ、畏れ、慚愧、自分の生に対する自問を歌っている。大正時代の文学者が、その時代の生死観を表現したのかもしれない。今、東北地方での膨大な死を「悲しみ」だけで表現しているテレビには、違和感を覚える。人間の死に際して悲しみだけであれば、ペットの死と差異がない。

もちろん大切な人の死に際して、計り知れぬ深い悲しみがある。嗚咽の中で「なぜ死んだのか」という問いが発せられる。それは死因を究明する言葉ではない。死とは何であるかを問いかけているのだと思う。その問いかけは、私の生に対する自問でもある。亡くなった方と私の繋が

りから私の人生への問いかけがある。

今、家族葬と言う言葉が横行している。葬儀が人の繋がりの上に成り立っているのだから、家族葬と言う言葉に違和感を覚える。

最近、そんなに珍しくない話がある。田舎で老婆が一人暮らしをしている。子供達は都会でそれぞれ暮らしている。その老婆が体調を崩して、近所の人たちの世話になって入院をした。しばらくの入院で老婆は亡くなった。子供達が帰ってきて、子供達だけで家族葬をした。近所の人たちには知らせなかった。どれだけの人に声をかけていいのか分からないし、今後も付き合っていけないので、家族葬にした。坊さんに関しても今後の仏事の付き合いが出来そうにないので、セレモニーホールに頼んでもらった坊さんにその場限りの読経をしてもらった。

「とぶらう」という言葉が、「葬儀をする」と言う意味と「尋ねる」という意味であると私は聞いている。私たちは、葬儀という儀式だけを「とむらい」だと思いがちである。しかし、人の死に際して生死の意味を尋ねていくのがとぶらいである。だから、私は葬儀を告別式とは呼ばない。

私は葬式坊主の仕事は、人間の死に寄り添う中で新たな人生観に出会っていくことだと思っている。数ヶ月前の話である。七日参りに行ったら、近所のおばあちゃんがお参りに来ていた。初対面のおばあちゃんだった。お経の後、こんな話になった。

「わたい、百まで生きられるやろか？」

「坊さんに聞かれても解らん。人の寿命は解らへん。」

「わたい、百まで生きたいねん。息子が四十で死んでな。かわいそうやし、悔しいし。だから息子の分も生きたいねん」

不意打ちを食らった。返事の言葉が出なかった。涙がこぼれた。

こころ日記

# 「　ぼちぼち　」

## エー、こんな子いやや！

脇野　千恵

夢を叶えた少年がいます。

彼が高校３年生の夏休み、私は甲子園へ３回、応援に行きました。

B 男が中学校に入学してきた４月、私は国語科担当として彼のクラスに入りました。学習の準備も何もしない。授業中は教師や友だちに暴言を吐く。ずっと私語が止まない彼に、毎時間手を取られ、ほとほと疲れる毎日でした。

当時の勤務校は、市内でも屈指の荒れた学校として有名でした。あそこにだけは転勤したくないと、教師達は口々に囁いたものです。私は講師でありながら（今でこそ担任は外れていますが…）担任に大抜擢され、その年窃盗などの経験をもつ転校生のいるクラスを持ちました。

どのクラスもそれぞれに問題を抱えていたので、贅沢はいえませんでした。

小学校からの申し送りでは、Ｂ男は問題児として挙がってきていました。事前にわかっていると、私達もそれなりの覚悟をして身構えますが、時々ノーマークで入ってくる子がいると、不意打ちをくらったように一気にクラスが崩れていきます。B 男のクラスにはもう一人そんな C 太がいました。

当然のごとく、毎日、毎時間、何かしらトラブルが発生し、段々授業の成立が難しくなっていきました。私の国語の授業もなかなか危ないものでした。

挑発に乗らない、暴言で叱らない、他の生徒の学習権を守るなど、自分を律するのに必死な日々。自身の教育理念やしつけのあり方に問題があるのでは？自分の中か

ら「自信と誇り」という言葉がどんどん消えていきました。
　真面目な人間は、この辺りで休み始めたりするのでしょうが、幸い私は、何があっても学校へ行くことを止めることはしませんでした。

　担任はおもしろい！と言って、定年間際になっても役職につかない教師がいます。私も教員生活の２／３は、担任をしていましたが、どちらがいいか何とも言い難いのが正直なところです。
　年度が変わり４月のクラスが替えは、子どもたちにとっては死ぬか生きるか？それ程緊迫した大イベントです。
　下駄箱の入り口に張り出された名簿から、自分の名前を探す姿はとてもけなげです。そんな様子を見ている教師陣は、子どもたちの反応を半ば予想していたかのように、冷静に観察しています。
「先生、クラス替えってどうやって決めるの？」
とよく聞かれますが、すかさず、
「あみだくじ！いやじゃんけん？」
などと答えたりします。
　そのクラス替えは、年明け早々から着々と進められます。
　まず、双子や親戚は一緒にしない。小学校で親同士がトラぶった！これもダメ。できるだけ問題とされる生徒は分散する。不登校傾向も。学力の平均を見るといったことなどたくさんの項目についてのデーターを並べ、延べ１０回以上の会議で検討します。
　今年もある生徒が、
「先生、俺のことはめたやろー。ほんま、ないわー。」
と嘆いた子がいました。
　私自身も、中学３年時のクラス替えには、してやられたと感じたものです。

　子どもにとって、クラス替えはドキドキものですが、私達教師も誰がどのクラスを、どの子の面倒を見るのか、といったことでのちょっとした攻防戦があることは否めません。クラスの争奪戦？駆け引き？といってもいいかもしれません。重い空気のまま事が決まることで納得のいかない教師がいたりすると、それは子ども達にとっても辛い一年となります。
　誰が担任になるか、そのことも子ども達の人生に、何か大きな変化をもたらすものがあるのではないでしょうか。

　２年生になったＢ男。そしてもう一人のＣ太。二人は学年の要です。まさか国語の授業でバトルし続けたＢ男を担任？
いやＣ太？クラス決定には、それなりの責任と覚悟が必要だとういことは理解していますが。どちらかを選択しろといわれたら…今までになく悩んだ末、Ｂ男を担任することにしました。理由なんてありません。
　思春期にいる彼らは、自分が正しいと思って毎日行動しています。ある教師は、体つきも大きくなった少年から何をされるかわからないと、とても恐がりました。子どもに罪はありません。私はＢ男とあと二年間の中学校生活を共に過ごす覚悟を決めたのでした。

　もう昔になりますが、少年法改正があった時、子ども達は口々に

「１４歳になったら、警察につかまるんやろ？」
「ほな１３歳までに、一杯悪いことしとったらええねん。」
と、よく声高に言ったものです。だからといって、そんな悪いことをすぐにするわけではありませんが。
　このことは、荒れている学校では実はとても重要なことなのです。

　２年生になったＢ男は、クラスの違うＣ太と、毎日色々な事件を起こしていました。喫煙、飲酒、バイク、万引きなど。（少年にはよくある問題行動ですが。）
　ある日、彼の行動について指導をした私は、Ｂ男に胸ぐら捕まれ暴力を受けました。幸いたいした怪我ではありませんでしたが…。しかしこのことは、教師が決して見逃してはならない問題です。特に生徒指導上、「対教師暴力」としてどのように対応するかは、「１４歳」という年令が大きく左右するからです。
　例の如く早速生徒指導部会が開かれ、Ｂ男の問題行動について討議されました。
担任の方針からは、ずっと外れたところでの判断が下されるのです。
　普通、こういった問題対応の流れは、教師の怪我の状況→病院→診断書→被害届けとなります。私はすぐに管理職に呼ばれ、
・体は大丈夫か？
・病院へ行って、診断書をもらうか？
・場合によっては被害届けを出すということもできるがどうか？
と尋ねられました。
　強引な管理職は、有無も言わさずすぐに病院へ行けと言い放ちます。学校で手に負えない子は、様々な問題行動を取り上げられ、やがて施設送りとなることを
知っていた私は、
「被害届は出しません！」
と答えました。
　Ｂ男は母親と共に、近隣のサポートセンターへのカウンセリングに暫く通うことで、事なきを得ました。
　しかし、彼の問題行動はすぐに修まったわけではありません。Ｃ太との繋がりも切れず、毎日のように家庭訪問に明け暮れていました。もうすぐ１４歳の誕生日を迎えるというのに、このままだと高校へも行けなくなる。私は彼のために被害届けを出さなかったことが無駄にならないよう、Ｂ男の些細な問題行動については、細心の注意を払い自身で指導するようになりました（もみ消し？）。この時ばかりは、「ホウレンソウ」は役に立たなかったように思います。

　実はＢ男には、ずっと続けてきたことがありました。それは硬式野球です。地域のクラブチームに所属し、土日は休む間もなく猛練習。時に試合会場へ足を運ぶと、学校では見せないＢ男の活躍ぶりを目にすることができました。
「なんで、学校ではちゃんとできひんのかなぁ。」
とつぶやいたものです。
　Ｂ男と両親の夢は、「甲子園」。
　入学早々からの彼の口癖は、
「おれ甲子園行くねん。みんな応援しにきてやぁ。」
　誰も本気にはしていませんでしたので、
「わかった、いったるわ。」

と答えるのが精一杯でした。

やがて３年生になり、暗黙の了解のもと、Ｂ男の担任は私と決められました。
野球だけは辞めさせたくないという両親の強い思いから、悪行については殴ってでもわからせるというしつけは徹底されました。「１４歳」という節目も大きかったと思います。次第にあの荒れは一体何だったのかと思う程、落ち着いた学校生活を送るようになっていきました。そして、希望する高校への合格切符を手にすることができたのでした。

甲子園のマウンドを走るＢ男の後ろ姿は、廊下を駆け回る懐かしい姿でした。夢をみているのか？とも。

その年、Ｂ男の同級生数人は更正施設に入りました。私が担任したことのある子もいましたが、問題行動の内容はＢ男と同じようなことだったように記憶しています。

Ｂ男と彼らとの違いは何だったのだろう？いつもそのことが頭をよぎります。

担任の裁量によって決められた彼らの進路。その子のためと考えてのことでしょうが、彼らはそのことをどのように受け止めたのでしょうか？

今もＢ男の母親と出会うことがあります。当時、思春期なんてそう長くは続かないから、と励まし続けました。
「あの時、ほんまに死んで！と何回思ったことか…」

そんな笑い話が言えるのも、今だからこそです。高校に入り甲子園に行くという夢を果たしたＢ男は、今また将来への職の夢を果たすために、次の学校に通っています。

Ｂ男のような子は、たくさんいます。そしてもっともっと苦労をしてそんな子を育てたという教師もいることでしょう。この話は何も特別な話ではありません。

思春期にいる子どもたちは、まだまだ未熟です。大人になってしまった者には、随分昔のことで忘れてしまっていますが、みんな思春期があったのです。少なくとも私達プロ集団は、思春期時に起こるであろう事柄については、専門家であってほしいものだといつも思っています。

誰もが担任をいやがったＢ男との生活。子どもにとって何がよかったのか、何がよくなかったのかということを学ぶことができました。そして、何かあったとき、誰がそのことにきちんと向き合うのかといったことも。

今、私自身の夢も叶えてくれたＢ男に感謝・感謝です。

（中学校教員　脇野千恵）

# これからの男性援助を考える

## 第３回

# 夫の不倫から考える男性援助

松本　健輔
カウンセリングルーム　HummingBird

## 1、はじめに

日頃夫婦臨床に携わっていると、不倫という言葉を毎日のように耳にする。それだけ、不倫は夫婦関係を脅かす要因であり、さらに人ごとではないとても身近なことでもある。

著者は不倫という事象に対して二つの接し方をしてきた。一つは主宰するカウンセリングルームで不倫から回復を望む夫婦のカウンセリング場面である。そしてもう一つは、研究として不倫をする男性からのインタビューを行った場面である。研究論文と違う本稿では二つの場面から著者が感じる主観的な視点で不倫という事象において夫婦に何が起こっているのか、そしてそこから男性への援助を考えてみたい。本稿での記述は研究、そしてカウンセリングを通して著者が感じたことであり、それが正しい、正しくないということではなく、そこを通して何かを感じ、考えて頂ければと思う。

そもそも不倫とは、倫理に反するという意味である。著者は以前論文の中で、よりニュートラルな言葉として婚外恋愛という言葉を用いた（松本2010）。しかし、夫婦カウンセリング現場で見たときは、やはりそれは不倫に当たる。つまり、当事者だけでなく、裏切られたと感じている配偶者が存在し、彼、または彼女にとっては許すことのできない事実だからだ。その点も考慮し、ここでは敢えて『不倫』という言葉を用いることにする。

さて、その不倫ではあるが、多くの調査で約半数の男性が経験があるという（たとえば野原1999）。これだけみると男性が如何に不倫しやすいのかという話になるが、彼らは1人で不倫をしているわけではない。その数と同数の女性がまた不倫関係に陥ったことになる。

なお、本稿では男性が不倫をしたケースで話を進めたいと思う。それは私の研究は男性が不倫したという事象しか扱えていないこと、そして男性が不倫をした相談ケースが多いからだ。また、それ以上に、男性が不倫をされたケースの方がより複雑で著者自身がまだそれを上手く語ることができないということも理由の一つにある。そのため著者自身の今後の課題の一つでもある。

## 2、不倫の発覚

女性からみた発覚

まず当たり前であるが、不倫は発覚しなければ夫婦の問題として浮上しない。カウンセリングに来られる人の9割以上において、発覚の決め手が携帯電話になる。もともと怪しいと感じていた妻が夫の携帯をチェックする場合が多いが、まったく疑っていなかった妻が、夫の携帯電話に女性の名前のメールが来ているのをたまたま置いてある携帯で見て疑いチェックしてしまった場合もある。そこから細かくチェックしていく中で不倫相手と二人で

出かけたと思われるレシートが発見されたりするなど、二人の交際の全貌が見えてくる。そして意外にも多いのが「私が知っている夫ではない」という反応だ。彼女達はこう続ける。「夫はどちらかというと愛情表現をしない寡黙な人だと思っていました。でもメールでは愛しているとか私が一度も言ってもらったことのない言葉を言っているのです」と。またある女性はこう語った。「夫は出不精で付き合っている時から不満でした。ただ、そういう人だと諦めていたんです。でも、メールの中から見える夫はすごくアクデティブでいろいろな所に彼女を誘いだしているんです」と。また付き合っている時から性に対して淡白だと思って不満を感じつつ諦めていた夫だったのに、メールの中では女性と性的なメールを頻繁にやり取りしている「知らない夫」と出会うという人もいる。ジェンダーを持ち出すまでもなく、女性が女性として感じられるためには、異性としての男性の存在が必要不可欠だ。「女である私を守って、引っ張って、そして愛情表現をして欲しい」「でも現実はうちの夫はそういうことのできない人だから仕方がないと思って諦めていたことを、夫は違う人にしていたんです。」彼女達の傷つきは女性性の傷つきとも言えるのではないだろうか。ある女性はカウンセリングの中で夫にはっきり以下のように言った。「私は今回のことで女性の部分がすごく傷ついた。そこをなんとか回復したい」。

### 男性からみた発覚

夫は不倫中高い葛藤状態にある可能性が高い。研究でのインタビューでは、責任感という言葉を中心に辛さを語る人が多かった。例えば、「妻や子どもを幸せにする責任が俺にはあるがそれに反することをしている」という話だ。また同時に、恋愛している女性に対してもなんとか幸せにしたいという思いも生じ、自分の妻や家族との間で常に揺れ続けるという場合も多い。その葛藤状態から不眠になってしまったという男性すらいた。

その中で不倫が露呈し、その葛藤から解放されてほっとする男性は少なくないようだ。「その瞬間は正直ほっとした気持ちはあったのは確かです。隠してきたことをようやく言えるんだと。」しかし、現実として夫婦関係の危機にあることは妻の様子を見て気がつく。日常理性的に振る舞っていた妻でさえ、最終的には感情をぶつけてくる場合が多い。その感情を受け、男性は初めて妻と向き合う事をきめる。

## 3、夫が陥りやすい間違った努力

家事と育児を手伝うという意味

不倫が露呈した夫の多くは一般的に謝罪として家事育児に積極的に関わろうとする。夫としては、日頃妻が自分が家事や育児に参加してくれないという不満を大なり小なり聞いていてそれを実行しようとする。とても自然な流れだ。しかし、前述したように、女性の多くは自身の女性性が傷ついている場合が多く、その傷つきには家事育児という夫の行動はなんの意味も持たない。そして妻がそうじゃないんだという叫びを夫は理解出来ずに戸惑う。家族の中ではそれぞれ一人一人が複数の役割を持つ。たとえば女性が母であったり妻であったりするように。ここでしていることは、母という子育てを担う役割への協力である。しかし、彼女が傷ついたのは妻役割なのだ。(もちろん子育て中に不倫をして、母としての傷つきも重なること多いが)。実際、そのことに気づかない男性は多い。

### 解決思考と共感

夫の不倫という事象に対して、夫婦間の問題解決の方法の違いによって生じる葛藤が多くの夫婦でみられる。夫は自身の過ちを認めた上で、未来の話をしていく。これもまた不倫という事象だけでなく、多くの夫婦不和にみられることだが、夫は「じゃあこの先どうしよう」「将来は俺はこうするから」と未来の話をし、『建設的』に話をしようと試みる。それに対して、妻は「あんなことをしておいてこの先なんて考えられない」「なかったことにしろってこと」とそれを批判する。「じゃあどうやって過去を償えばいいんだ」と怒りの夫の台詞が続くという流れ

だ。怒りの感情をただ受け止めて欲しい、ちゃんと誠意をもって何回も何回も説明してもらわないと前に進めないという妻の気持ちを理解するのに時間が必要となる。ちなみにこのことは、夫に悩みを相談したら、アドバイスが返って来て二度と相談しなくなったという著者がカウンセリング場面で耳にタコができるほど聞くエピソードと重なる。感情を受け止めて欲しい、話をただ聞いて欲しいと妻が夫に話したのに、夫としては具体的なアドバイスを求められていると誤解して必死で解決策を出す。そしてそれが夫婦の溝を生む。不倫に関しては表面上、被害者と加害者が明確である。それゆえ妻は他のことに比べ夫を批判しやすい状況になる。男性は「何回謝罪したらいいんだ」「同じ話を何回したんだろう」と不満をひた隠しにして、妻と向き合う中で妻は少しずつ気持ちが晴れてくる。しかし、夫にはそれがまったく見えず、ある時に爆発して「一生謝る人生なんて嫌だ」「離婚しよう」と言い、また振り出しに戻る。少しずつ良くなっている妻と、それが見えない夫という男女の溝がそこにも存在する。その構図がやはり当事者である男性としてなかなか気づきにくい。

### 不満を伝える

「なぜ不倫されたのか」という疑問の回答として妻は夫に自分の非を尋ねることが多い。それに対して「お前には不満なんてまったくない」と言われ、「それならなんで不倫したのよ」というやり取りが繰り返される。妻にしてみると、理由なく不倫されたのならまた同じように不倫が起こると考えてしまう。それなら理由があり、その理由を解決すれば安心に繋がると考える。

程度の差はあれ多くの夫婦間満足度の調査では妻より夫のほうが不満が少ないという結果が出ている。それ調査の考察上、妻が我慢を強いられているという文脈で理解されてきたが、カウンセリング場面に限定すると、我慢することを美徳であると思っていたり、それ以上に不満を言語化しない夫の特徴がみられた。しかし、実際妻が不満を知りたいと思い、それが関係を良くするために必要だと理解し、そしてカウンセリングの中でそれを丁寧に、根気よく扱うことで少しずつ言語化していく。「お恥ずかしい話なんですが。。。」「そんな小さいことでと思われると思うのですが。。。」「ほんとうに些細なことですが。。。」とその語る言葉の中には必ずといっていいほど上記の枕詞が使われる。そのことを尋ねると「こんなことを気にするなんて男らしくないと思うんです」という説明が返ってくる。このことは、二つの男性特有の問題がある。一つは、不満など自身の感情を言語化することが苦手という点。そしてもう一つは、「男として小さいことを気にしてはいけない」「男なんだから不平不満を言うべきじゃない」という男性としての規範意識だ。男性の不倫行為もまた『男らしさ』の規範の影響を受けている。

## 4、不倫からの回復への男性援助

Linquist（1989）は不倫からの回復には怒りの感情、裏切られた悔しさ、セルフエスティームの喪失というような本当の気持ちをさらけ出し、ぶつけ合うことが配偶者の心を癒す過程となると主張している。これは著者の経験とも一致する。しかし本当の気持ちをさらけ出し、ぶつけ合うということは想像以上に難しい。そもそも不倫以前から夫婦関係に問題があった場合、お互いにコミュニケーションが上手く機能していない可能性がある。その二人が感情を出しても、お互いに言いたいことがなかなか伝わらない。

夫の不倫では明確な被害者・加害者が表面上で出来上がる。しかし、だからといって、カウンセリングの場面で夫を妻と一緒に批判するわけにもいかない。ただ、逆に夫を擁護することは女性の傷つきを軽視することになるという難しさがある。そういう点で中立がとても難しいように思われるが、実はカウンセリングに来るという時点ですでに一つのことが『ある程度』共有されている。つまり、「夫婦関係を継続していきたい、良くしてきたい」という点だ。つまりお互いが同じゴールを目指しているのだ。しかし、現実はそんなに単純ではない。お

互いが同じゴールを目指していてもやり方が違う。そもそも同じゴールを目指していることすらわからない場合がある。しかし、確かにあるのはお互いが解決をしたいと望んで何かをしているという点だ。前段で示したことは、夫が夫婦関係を継続し、良くするために行った行動だ。（実際の結果はマイナスになる場合が多いのだが）。

不倫をしたということで夫は責められる。そして、その行動が妻の期待に添えていないとまた責められる。しかし、彼らが彼らなりのやりかたで努力しているという点は援助者として忘れてはならない。そのことを理解した上で、その報われない努力を報われる努力にするために援助を行っていく。

「不倫した男はまた不倫する」などと言われるが、本当だろうか。もちろんそういう一面もあるのかもしれない。しかし、実は現状を脱出するために他の方法を見つけることができない男性が多くいるのではないだろうか。そういう話をすると男性の肩を持ち過ぎだと言われるかもしれない。しかし、もう不倫しないで欲しいと願う妻は多い。つまり、不倫を乗り越えるという援助そのものが、妻のためにもなる。さらに、男性が変わることは、妻のためでもあり、ひいては子どものためでもある。そういう意味で言葉遊びに聞こえるかもしれないが、男性援助は男性のための援助だと思われがちであるが、著者にとっては、全ての人達への援助の一形態であると思う。男が悪いという簡単なレッテルを貼ることは結果として関係継続を望む妻を助けることにはならないのだ。

最後に夫婦関係がある程度安定し、カウンセリングが終結した男性からのメールの抜粋を紹介したいと思う。

男として妻や家族を守る義務があると思って来ました。でも、それを守るためにすごく疲れて結果不倫という形で他の女性に逃げてしまいました。そのことも自分が弱いからだと責めてきました。今回妻にバレて、こうやってカウンセリングを受けて気づいたのですが、自分は家族を守るということは自分が我慢することだと思って来ました。妻に弱音を吐かずに、1人で耐えて行く。でも、違ったんですね。妻に自分の感情を言うことがどれだけ妻にとって大切なのか、そして私にとってもすごく大切な作業なんだと気がつきました。
当初は、妻がことの顛末を説明しろと言われたり、何かを買って欲しいと言われたり、謝れと言われたりしてそれに従うことが罪滅ぼしだと思ってきました。でも妻はそれを認めてくれず心の中で妻を責めました。でも、今思うと妻の表面上の言葉ばかり信じて、ほんとうに何が言いたいのか考えようともしませんでした。妻は今でもときどき思い出して私を責めてきます。一生許されないとは思いますが、妻の思いをちゃんと受け止めて、裏切られたけどでもこの人と一緒に生きて行きたいと思われるように頑張りたいと思ってます。（一部個人が特定されるところを改変しています）

参考・引用文献

野原広子(1999).婚外恋愛の願望はありますか?.婦人公論,84(21),30-37.中央公論社

松本健輔(2010).婚外恋愛継続時における男性の恋愛関係安定化意味付け作業―グランデッド・セオリー・アプローチによる理論生成―.立命館人間科学研究. No21.43-55.

Linquist, L.(1989). Secret lovers: Affairs happen how to cope. Lexington Books

# ノーサイド

## ―加害と被害を越えた論理の構築―

## （1）

# 中村周平

私は 2009 年から 2 年間、応用人間科学研究科でお世話になりました。「応用人間科学研究科」で過ごした 2 年間は、私にとって修士論文をまとめるだけではなく、自分の人生を大きく変えてしまった出来事と向き合い、自分自身の考え方を変えていくための大切な時間でした。

応用に入った当初は、卒業研究のテーマを継続していきたいと思っていました。けれども、私はもう一つの「テーマ」を心の中に抱え込んでいました。

毎日楕円球を追いかけていた高校 2 年の秋、私はラグビーの練習中の事故で首の骨を折り、「頚髄損傷」という障害を負いました。その事故を境に、ご飯を食べたり風呂に入った

り…それまで自分一人でしていた何でもないことを誰かに頼まなくてはならない生活が突然やって来ました。また、私の「介護」が家族の生活の中心を占めることになり、両親は仕事を休まざるを得ない状況に陥りました。ただ事故当初、自分の事故は偶発的に起きた「特別なもの」だと考えていました。「ラグビーに怪我はツキモノ。でも、これだけ大きな事故っていうのはあんまりないんだろうな、周りでほとんど聞いたことなかったし…」。しかし、事故後、これは決して「あるラガーマンだけ」に起きた不幸な話ではないということを知りました。

日本国内のラグビー事故において、過去 20 年間(1989～2008)で 360 件、年間平均 20 件近くもの重症事故が起きている現状があります。2003 年度に「重症事故対策特別委員会(現安全対策推進委員会)」が立ち上げられたものの、その数に減少の兆しは見えていません。

「こんなこと、二度と繰り返しちゃいけない」。いつしか自分の人生を大きく変えてしまったこの事故のことを考えていきたいと思うようになりました。しかし、事故の原因究明や補償をめぐって学校側と調停などを重ねていく中で「これ以上『スポーツ事故』について触れたくない、これ以上周りの人からいろいろ思われるようなことはしたくない」という思いから、修士論文として深めるには抵抗がありました。誰かに恨まれるかもしれないという不安を抱きながら書かなければならないテーマよりも、ある程度の経験や裏付けもあり、何より批判されることの少ないテーマを無意識のうちに選んでいたのかもしれません。

自分の事故にそんな後ろめたさを持っていた私が、「スポーツ事故」をテーマに研究を進められたのは、家族クラスターの先生方や研究仲間をはじめ、多くの人たちに支えていただいたからだと思っています。「スポーツ事故に加害者はいない」と訴えながらも、自分の事故を文中で「悲劇」と表現していたこと。事故を一つでも減らしたいと考えおこなっていた「当事者からの情報発信」が「被害者感情」のしがらみによって相手に反省を求める姿勢になってしまったことで、ラグビー部の指導陣や学校との間に大きな溝を作ってしまったこと。家族クラスターの先生方はそのことを直接伝えるのではなく、研究を進めていく中で自ら気付き、感じ取っていくことを尊重してくださいました。逃げるのではなく、しっかりと自分の過去と向き合い今を見つめ直すことの大切さを身を持って感じることができました。そして、「被害者の中村周平」ではなく「いちラグビー部の OB」として、かつての指導者やコーチと関係を築き直すきっかけを掴むことができました。

スポーツ事故に遭った人や、その家族からの情報発信はスポーツ事故を無くしていくためには不可欠なものです。しかし、それだけでは十分なものとは言えないのではないでしょうか。本来なら事故の「当事者」である人たちの中に、部活の指導者や学校の存在が抜け落ちていると考えます。しかし、日本独自の慣習や司法の制度的な要因によって、事故にあった本人や家族と、指導者や学校とが歩み寄れない現状が存在しています。この現状を克服し、相互の関係を修復することができないか。そして、スポーツにおける事故を少しでも減らしていけるよう共に行動を起こしていけないか。「被害者感情」にとらわれ、「補

償」や「再発防止」の観点からしか事故と向き合えなかった自分が、「修士論文」というものを通して、そのような考えや視点を持てるようになっていった心境の変化や支えてくださった方々との出会いについて、事故が起きる前(私が一日中楕円球を追いかけていたころ)まで遡り、時間軸に沿って書き出していきたいと思います。

確かに事故は私や家族の生活を変えてしまった、一瞬の間に起きた「出来事」でした。ただ、私自身は今でもラグビーは素晴らしいスポーツであると思っています。ラグビーというスポーツを通して様々な経験をさせてもらったことや、かけがえのない仲間に出会えたことに心から感謝しています。そのラグビーで年間約 20 件もの重症事故が起き続けている事実を、ただの「出来事」として見過ごすことはできませんでした。この「情報発信」を通して私は、「ラグビーは危ない。事故に遭うとこんな不幸になる」ということを伝えたいのではなく、事故後、本当なら同じ「当事者」として事故に向き合って欲しかった、かつての指導者の方々と今一度歩み寄り、ラグビーがより安全なスポーツになっていくことを共に考えていきたい、私が訴えていきたい強い思いです。

## ～私と「ラグビー」～

今回は、事故に遭うまでの私の過去について触れていきたいと思います。運動に対して苦手意識を持っていた自分を変えるべく、スポーツを始めようと考えていた中学時代。その中で、ラグビーというスポーツと出会い、徐々にその魅力に取り込まれていきました。これは当事者研究ですが、自ら過去を振り返り記述していく方法では、自分の過去について客観的に「語る」ということが十分にできませんでした。自己語りの「手記」のようなものになってしまったのです。そのため、同じクラスターに所属する北村真也さんに協力していただき、「私へのインタビュー」をお願いしました。この方は、私のことをよく理解していただいている研究仲間であり、普段から相手の考えや思いを何気ない会話を通して、引き出してくださる方でした。方法はインタビューを通して私の過去に遡り、その当時の心境を私が北村さんに「語る」という方法を計 4 回おこないました。インタビューをしていただき、目の前の人に「語る」という形を取れたことで、自ら過去を振り返るだけでは書ききれなかったことを、引き出していただくことができました。そのとき交わされた会話の内容を手がかりに、私の心境を書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I とする。

### 1　偶然の出会い

小さい頃から、決してスポーツが得意な方ではありませんでした。それに加え、週 1 回の水泳教室を辞め、家でダラダラと過ごす時間が増えたことで、体重もそれに比例してドンドン増えていきました。小学校の卒業アルバムには「海パンの上にお肉が乗っていた体」がはっきりと写っています。「動けない自分」「運動音痴な自分」、クラブ活動で文化系に入っていたことも「運動なんかできるはずがない」と決めつけているところがあったのかも知れません。

I:「ってことは中学 1 年から、ラグビーを始めたわけ？」

S:「そうなんですよ。ホントはスポーツすっ

ごい苦手な方で」

I:「そうなん！？(中略)っていうことは結構太ってたん？」

S:「太ってました。だからそれが自分の中でもいかんなと思いながら止められずにいたのが、中学校を一つの機会として、何か運動部に入りたいと…」

そんな弱い自分を変えたいと考え、「何がなんでも運動ができる部活に入ろう」という決意を持って中学校に入学しました。

いくつかの部活を体験し、入部届けの期日 2 日前の朝、部活名の欄に「バレー部」と書いて学校に向かいました。小学校からの友人が多かったという安易な理由からでした。「学校の帰りにでも出して帰ろう」そう思っていた矢先、知り合いの同級生に廊下で声をかけられました。そして、なぜかラグビー部の監督室に連れていかれ、監督から話を聞くことになってしまったのです。話しているだけで背筋がピンと伸びる、そのような印象を受ける方でした。緊張のため、会話の中身はほとんどわかりませんでしたが、唯一「明日待ってるからな」という言葉だけは今でも鮮明に憶えています。

S:「(監督から)『明日待ってるからな』って。それで『あぁどうしよう』ってなったんですけど、断れんようになって、結局バレー部って書いたのを消して、ラグビー部って書きなおして、学校に出したんです」

I:「へぇー、それがきっかけやったんや」

S:「そうなんです」

I:「べつにラグビーがしたかったわけでもなく？」

S:「断れずに」

予期せぬタイミングではありましたが、それは本当に厳しくて、やりがいのある「ラグビー」というスポーツとの出会いでした。

初めて知るスポーツ、しかも本格的な運動経験がなかった私にとって、練習は想像を絶するものでした。寝ても覚めても、練習の毎日。疲労で食べ物がのどを通らないという体験は生まれて初めてでした。「海パンの上にお肉が乗っていた体」は、夏を迎える頃には肋が見え始めていました。また、ラグビーを始めたことによる「変化」は心理的な面にも顕著に現れていました。小さい頃から人見知りが激しく、初めて会う人には挨拶どころか、目を合わすことも難しかったのですが、部活では先生や先輩に挨拶しないことはタブーだったため、その部分に関しては入部当初から徹底的に指導されました。「人に会えば反射的に頭を下げる」、最初は怒られないために嫌々していたことでしたが、しっかりと挨拶すれば相手の方がしっかり返事を返してくれる、それが当たり前になると、逆に挨拶しないことの方が不自然に感じるようになりました。私の中で、何かが変わり始めていました。

ラグビーに関しては、入部当初、様々なことで悩みを抱えていました。一つは体の小ささです。140 センチ程の身長は、お世辞にもラグビー向きとは言えず、スクラムを組むと体の大きい選手に囲まれ、私一人だけ、頭一つ「抜け落ちている」ように感じてなりませんでした。当然、そのことは試合や練習中、体と体がぶつかる際にも大きく影響していて、当たり負け(相手と当たった際、負けて押されてしまうこと)することも度々ありました。もう一つは、「スポーツをすること」における「経験」の少なさです。中学時代の監督は全日本でのプレー経験もあり、京都の中学ラグビーでも名の通った指導者だったのですが、私はそれを入部してから知りました。チームメイトは、その監督のもとでラグビーがしたいと越境してきた人間が半分を占めていて、小さい頃からラグビーに関わる環境で過ごしていました。その他のメンバーもサッカー経験者など、体を動かすことを苦手とする人間はほとんどいませんでした。かたや、私は「何か運動できる部活に入れれば」という気持ちで入った人間です。ラグビーということより「体を動かす」という点だけでも、絶対的なスキルの違いがあることは明らかでした。練習にはついていくことがやっと、試合ではミスを連発してチームに迷惑を掛けることも多かったです。しかし、辞めたいと思ったことは一度もありませんでした。

I:「もうやめようかなって思わへんかったん？」

S:「最初は何かすごい、しんどくてもう…。しんどいし行きたくないなって思った時はあったんですけど、辞めようと思った時は一回もなかったですね、中学校のときは。なんでかな…楽しかった。小学校のとき文化系で、あのコンピュータクラブとか将棋部とか、そんなんしかやったことなかったんが、初めてチームプレーって言うんですかね。集団でやるスポーツに本格的に参加して、なんか、それでできた集団って自分にとって新鮮で。あまり当時の記憶があれなんですけど、でも辞めたいと思ったことは中学校の時、一回もなかったですね。」

そして、学年が上がるごとに試合に出させてもらえる機会も多くなり、少しずつラグビーというスポーツが理解できるようになっていきました。そうなるとラグビーをしていることがおもしろくなってきます。今まで、つらいだけだった練習や試合が徐々に楽しくなり、そして、気が付くとラグビーというスポーツに完全に魅せられていました。

S:「中学校の時ですか…そうですね、あの中 1 中 2 の時は、ホンマについて行くだけでいっぱいいっぱいで。みんなはドンドン上手くなっていくのに、自分だけ、全然ついていけないのが、はずかしかったこともあって。なんかそのころは、みんな続けてるし、自分も続けてられたんかなってぐらいやったと思うんですけど。自分らのチームになったぐらいから、ちょっとずつ試合にも出させてもらえるようになって、ラグビーっていうスポーツがちょっとずつ分かり始めたというか。今までなんかこう、とりあえず、飛んできたボールのとこに向かって走り込んでるだけやったのが、だんだんこう定跡じゃないけど、こうなったらこうなるんや、ちょっとずつやったんですけど…」

I:「なるほど。こう分かってきたわけやな、そこらへんの」

S:「はい」

歓声が全く気にならなくなるほどの試合前の緊張感、大人数でボールを奪い合うチームプレーの迫力。試合の勝ち負け以上に、ラグビーの持つ醍醐味や楽しさを、身を持って経験することができました。それまでルールも知らず、見たことさえなかったものの虜になっていたのです。毎日、体中泥々になりながらも中学校生活の大半をラグビーに費やしている自分がそこにはいました。

## 2　継続の意志

「365 日」ラグビーという充実した中学校生活。ただそれも、中学までと思っていました。3 年間ラグビーを続けてきたことに私自身大きな達成感を感じていまし、高校ラグビーで通用するほど、決して上手いプレイヤーではないことを自覚していたこともありました。そんな中迎えた 11 月の近畿大会。チームは勝ち進み、準決勝で大阪府代表の啓光学園中学と対戦することとなりました。結果は惨敗、これが中学ラグビーの最後の試合となり…。

S:「関西では一番高いレベルで近畿大会っていうのが最後なんですけど。そこでベスト 4 までいって…僕の中で楽しかったけど、このラグビーも中学校 3 年間やって終わりかなと。もういいかなと」

I:「なるほど、これでもう卒業やと俺のラグビー人生はと」

S:「と思ってたんです。でも、近畿大会の準決勝で負けたときに、なんかこう、これで終わっちゃうのかなっていう、初めてその時に、すごく面白くなってきてるのに、ちょうどラグビーが。だからこう自分の中で区切り付けなあかんと中学校で辞めるつもりでいたのが、なんかもったいないなというか、これもうちょっと続けてたらもっとわかってきて面白くなるんちゃうかなっていうのが出てきて…」

しかし、試合が終わったとき、私の中にはすでにある気持ちが芽生え始めていたのです。「ラグビーをもう少しやりたい」という継続の気持ちが。

# あいかわらず長い編集後記

## 編集長（ダン シロウ）

■東日本大震災後、二冊目のマガジンの発行だ。時が経つのは早い。しかし原発事故の復旧は遅々とした歩みのようで、私のような非科学技術系の人間には、本当のところ何処に向かっているのか、よく見えない。

今号で水野スウさんが「いのみら通信」の事を書いて、油断していたと書いているが、本当に、災害は忘れた頃にやってくるのだと思った。まさか原発がこんな事態を日本にもたらして、手に負えなくなるとは。

■東北各地の復興の歩み個別化はいよいよ明らかで、個々人に運不運があるように、再出発の道程も、本当にケースバイケースになっているようだ。じれったく、不本意な今を過ごす人も多いに違いない。

私は阪神大震災と東日本大震災と二度、大きな被災を脇で見ている巡り合わせになった。阪神大震災の時は、それがどういう事なのか、何が突きつけられているのかも分からない、とまどいと無力感の中にいた。

しかし今回は少し違った。さっさと出来ることをすればいいと思ったのだ。その一つは速やかに届くルートの義援金の対応だった。早々と自分にふさわしい額や対象を決めて実行した。

その後は、自分のルーチンワークを粛々とこなして時を過ごした。続々と明らかになる様々な意見や取り組みに、心動くことがなかったわけではないが、それはそれの出来る人たちに委ねた。

そして私は今、この後の地域社会における家族のことを考えている。被災地では物が壊され、失われただけではなく、価値観も崩された。そんなところで、元の暮らしをイメージして、復旧を目指すのは違うのではないかと思う。失ったところからの再出発には、価値観にも見直しがあっていいと思う。私の関わる分野なら、「家族」がそれだ。

息子や孫の学歴、進学問題。産業構造の近代化の中の、漁業と関連産業、地場産業の後継者問題。高齢化する小さな村や街の過疎や空洞化等。こんな前提を承認したまま、再びそこに向かって復旧を目指すのは違うだろう。

だから私は、生まれかわらなければならない街に向かって、「家族」の新たな価値観の発信できたらと思っている。

何をどうするのかは、まだ協議段階だが、いずれ実現できると嬉しい。そのために今必要なのは、チャップリンの言うように、「勇気とサムマネー」だ。

## 編集員（チバ アキオ）

■３８歳で初めて、スタンドまで届くホームランを打った。学生時代、野球はうまい人がいるので、自分なんて…と思っていた。しかし、今は楽しかったらいいやん！すきやからいいやん！と開き直る。そうやって動きだし、継続していると、いろんな人が協力してくれたり、一緒に動いてくれたりする。本当にチームメイトに感謝です。

■肉体の経年劣化を考えると複雑な競技ほど、今しかない。メンバーは対人援助職がほとんど。先日は大会に出て準優勝も。いつか、ケガをして辞めるということもあるだろうけど、やりたいのだからしょうがない。

■チームメイトには援助系有資格者等の専門職も多い。野球以外のところでは、「援助」「支援」のことも話したりするメンバーだが、準優勝祝賀会では何時間も野球談議のみ。ユニフォームはこれがいいんちゃう！マリナー

ズ風がいい！縦ジマがいい！ええ～？！それだけは嫌！カブス風やろ！カープやん！いやいや福井商業高校の炎のマーク風がええやん！背番号何番がいい？24 番！「絶叫調～中畑清です！！」しか浮かばへん！ちゃうやん桧山やん！だから～ノーステップ打法は～、アンダーソックスが見える方がいいわ！昔風やな！脚長く見えるで裾までの方が！スパイクに引っ掛かるって！やっぱ俺は門田やな…っと、30 代から 60 代のメンバーが話す。こうした場所があり、ここでの出会いがまたいろんなことにつながっていく。同じ時代を生き、こうして出会った喜びがある。好きなことをしているとそう思える。

■私が担当している社会福祉士養成課程の学生であり、職場仲間である川本健士氏が在籍するバンド「ははの気まぐれ」のライブに行った。会場はいっぱい。ステージまで、ほんの 2 メートルぐらいのところで観客になる。生音が本当にいい。演奏もすごい！川本氏はドラム担当。近くで見ると一打、一打の違いがわかり、これまたすごい。ネットで CD も購入し、楽しんでいます。それを聴きながらの対人援助学マガジン第 5 号編集作業。

【次号予告】次号は対人援助学マガジン執筆陣による初の対談・共同企画が進行中。26 年の時を超えた企画。大阪のとある公立小学校で、新しい先生が着任。そこから、物語は始まります。いわゆる障害児と健常児が同じ教室で、クラスをつくっていく「統合教育」というスタイル。そして現在。少子化もあり、教育現場、福祉現場、あちこちで起こっているいわゆる「統合」状態。このことについて、当時の担任教師、当時の児童、そして現在の「統合」現場で活躍されている幼稚園園長が対談。そこでは、何が起こり、どんな努力をし、どんな喜びと苦しみがあり、子どもたち、保護者たちにはどんな経験になるのか、そうした経験を持つ児童のその後の人生に与える影響はあるのか、などテーマは尽きません。対談場所は、タカラヅカ歌劇で有名な、兵庫県宝塚市にある「宝塚ホテル」。「大正モダン」を彷彿とする歴史あるホテルの一室にて、どんな話が繰り広げられますか。記事とともに、こうした対人援助学マガジンの新展開にも、ご期待ください！

■告知■

**対人援助学会：定例会**

**10 月 14 日（金）** 19:00 から 21:00

**京都駅前キャンパスプラザ６F**
**立命館大学教室で。家庭児童相談所で働く八木アリコさんが、「ネグレクトと転居問題」について語ります。**

**■ご意見・ご感想■**

**マガジンに対するご意見ご感想**

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン（１号、２号、各１０００円、第３号、第４号１３００円）が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。


**マガジン編集部**

604-0933 京都市中京区山本町４３８
ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N



**対人援助学マガジン**

**通巻5号**

**第二巻　第一号**

**２０１１年６月１５日発行**

http://humanservices.jp/



**対人援助学会事務局**

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

## 対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届
〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

### 「戻りたい街へ」

阪神大震災のしばらく後、西宮北口駅までは動き始めていた阪急電車に乗って出かけた。日曜日だったと思う。

駅前にあった壁半分が崩れ落ちて、まるで玩具のドールハウスのようになった、７，８階建てのマンションを見た。各部屋の中が全て遠目に見えている風景に圧倒された。

それまで私が目にしたことのある喪失を連想させる景色のマックスだった。おさまらない感情に、ドキドキしたとしか言い表しようがない。気を取り直して神戸に向かって歩こうとして、路地の小さな一軒家の張り紙を見た。そこには「何とか無事で、娘の所に避難しております。ご連絡は・・・」とメッセージがあった。

駅近くの商店街から、一筋入った静かなこじんまりとした住宅街だった。しかしその時、私が見ていたのは、残骸の山だった。生け垣、盆栽、丹誠込めたであろう植木が、壊れた家屋と共にぐちゃぐちゃの瓦礫になっていた。小市民のプライバシー保護を連想させるブロック塀が、その周りのちいさな心配りの積み重ねを踏みつぶしていた。

ここで私の心が折れた。何をしに、何を見に、なぜ行くのか。一つの理由もなかった。

援助物資を持っていたわけでも、尋ねなければならない近親者が居たわけでもない。友人、知人はたくさんいたが、私が手ぶらで駆けつけるのは唐突な気がした。結局そこから前には進めず、引き返した。

当時の私の職場は、支援の枠組みからも外れた、期待もされていない機関だったせいもあって、自分の何も出来なさが余計にこたえた。そして１年以上、神戸の街に足を向けることができなかった。

この間、大阪の漫画家が集まって、阪神大震災復興支援漫画展を開催することになり、作品の提供を求められた。

そこで描いたのがこの作品だ。ジグソウパズルは壊しても、壊しても、組み直すとまた同じ絵柄になる。街、人、暮らしとは、そういうものではないのか。

土木畑出身の当時の市長は、復興を災い転じて福となすとでも言いたげに、新たな街づくりを吠えていたが、「街」や「暮らし」の蓄積について、感受性が違うと思っていた。「戻りたい街へ」はそんな思いで描いた一枚だった。

しかし今、東日本大震災と大津波の爪痕は、戻りたい街への想いも含めて押しつぶしてしまったところがある。そして、戻りたくても戻れない原発事故被災地のような想像を超えた事態も生み出してしまった。

私にとっても、このマンガをもう一度登場させる機会があるなど、想像もしなかった。天災同様、忘れていた作品だった。

１５年前、阪神大震災後に描いた作品が、今どのように皆さんの目に映るのか、マンガ作家としては興味深いところだ。

２０１１／０６／０５

団士郎